

「八幡史学館」資料 第4シリーズ 平成21年

番号+	表題	内容	実施日	講師	備考
		平成21年度 八幡公民館 募集案内			
		八幡史学館写真アルバム			
1	◎	第1回講座 = 「八幡名所百選のことなど 八幡史学館名所百選チームが選んだ「八幡名所百選 = ガイドマップイン八幡宿」	平成21年6月16日	山岸弘明	
		第1回講座 = 「八幡名所百選のことなど ①「濃い口」人気集めた「地回りしょうゆ」～しょうゆの歴史、②江戸後期に始まり昭和戦後に終わる～八幡のしょうゆ醸造 ③門や店、蔵が現存～市川本店、④やわた屈指の旧家小川しょうゆ店、⑤明治36年に建てられた母家が現存	平成21年6月16日	山岸弘明	
		市川本店 = 博覧図、配置図、しょうゆラベルの市川本店図 小川屋 = 敷地配置図、母家平面図、立面図、昭和始め絵図、明			
	◎	第1回講座 = 「八幡周辺の句碑歌碑をたずねて 阿須波神社、飯香岡八幡宮、満徳寺、仲町駐輪場、無量寺、満蔵寺	平成21年6月16日	佐倉東雄	
2	◎	第2回講座 = 激動する慶応4年(明治元年)～義軍府の戦い、知県事役所、菊間藩の成立 昼は乱暴人どもに金子脅し取られ、夜は6,7人抜き身携え、 明治元年、2年、3年関連年表、八幡・寺嶋家文書「文久3年、道中出府諸入用控え ドキュメント八幡村1868	平成21年8月3日	山岸弘明	
		第1話明治維新の戦い ①鳥羽伏見の戦い ②不満の幕臣たちが木更津に集結 ③寺嶋家文書の維新の戦い ④藤田屋に残された刀			
		第2話房総知県事 ①柴山知県事八幡仮役所、②大多喜に移る、旧旗本先納金事件で失脚			
		第3話菊間藩の誕生と築城 ①水野忠敬の上総転封、②華麗な水野家の系譜、③はじめに三枚城あり ④戸田村で築城を待つ ⑤菊間陣屋か藩庁舎か城か、⑥現地の総指揮は大殿忠寛、⑦謎多い縄張り、未完成に終わる			

		参考資料 = 沼津城家紋、水野家系図、菊間藩領、岡田程八日記、五井村年貢割付		
		寺嶋家文書 = 旗本村上三十郎組名主文書。家族疎開消息、新規陣屋取立願		
3	◎	第3回講座 菊間城跡を歩く 現地巡見	平成21年10月3日	山岸弘明、佐倉東雄
		水野家ゆかりの品々 = 前回に補足して		
		沼津城の水野家「おもだか紋」 = 八幡竹内家、水野忠敬の書 = 古都辺秋葉家、八幡村の陣屋取立願 = 市川家文書		
		旗本村上家名主文書「道中ならびに出府諸入用(雨天中止の場合予備資料 = 寺嶋家文書		
		午前 = 菊麻国造の里、菊間古墳群		
		古代に村田川流域を支配、皇太子時代の昭和天皇が陸軍演習せを視察、北野天神山、新皇塚、東関山古墳、菊間コミュニティセンター		
		午後 = 明治の城、菊間水野藩5万石遺構を訪ねる		
		菊間団地はたんほへだった、藩士子弟学んだ藩校「明親館」四神相応の沼地、質素な藩主水野家住居、		
		本丸近くの謎の空間、城内に残った千光院、江戸藩邸から移築した松翁神社、村中に響いた藩庁舎の鐘		
		巨大空堀と藩士長屋軍、通称五店跡		
4		辰巳公民館主催事業「江戸東京歴史散策」		
		第1回「江戸東京歴史散策」	平成21年5月26日	山岸弘明
		第2回バス研修 = 「お茶の水と霞が関に江戸東京を訪ねる」	平成21年7月31日	山岸弘明
5		辰巳公民館主催事業「すこやかカレッジ」		
		バス研修 = 岩崎邸と上野不忍の池をめぐる	平成21年9月15日	山岸弘明
6		中央公民館歴史講座「遠浅の海おいだすまに」	平成21年12月13日	佐倉東雄

八幡史学館

1. 講座の目的

八幡地区の歴史をほりおこし、その背景を学び次世代への伝承をすすめる。

2. 日程と内容

第1回 6月16日(火) 午前9時30分～11時30分

八幡名所百選、八幡の醤油業、句碑と歌碑

第2回 8月3日(月) 午前9時30分～11時30分

菊間城と菊間藩、江戸時代の八幡

第3回 10月13日(火) 午前9時30分～15時30分

現地巡検～菊間城跡周辺を歩く～

※ 現地巡検は、午前から午後までの日程で行います。昼食・飲み物の用意が必要です。詳しくは、第2回講義のあとにお知らせします。

3. 講師 山岸 弘明 先生

4. 募集 定員40名。(全日程に参加できる人)

《お願い》

やむを得ず欠席する場合は、当公民館(TEL 41-1984)へ必ずご連絡下さい。

市教八公第7-4号
平成21年5月27日

山岸 弘明 様

市原市立八幡公民館
館長 河野 一雄



主催事業の講師について（依頼）

木々の緑が美しい季節となりました。貴台におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

日頃は社会教育ならびに当公民館の諸事業に対しましてご理解ご協力を賜り心より感謝申し上げます。

さて、この度当公民館の主催事業として、「八幡史学館」講座を下記のとおり実施することとなりました。

つきましては、公私ともにご多用のところ誠に恐縮に存じますが、講師としてご依頼したくお願い申し上げます。

記

- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 事業名 | 八幡史学館 |
| 2 | 日 時 | 第1回 平成21年 6月 16日 (火)
第2回 平成21年 8月 3日 (月)
第3回 平成21年10月 13日 (火)
午前 9時30分より 11時30分 まで
(*第3回は15時30分まで) |
| 3 | 場 所 | 八幡公民館 |
| 4 | 対 象 | 成人 42名 |
| 5 | そ の 他 | 当日、印鑑をご持参ください。また、資料の印刷等がございましたら、公民館にてさせていただきますのでお申し付けください。 |

担当 社会教育指導員 中嶋 眞由美

1
3
平成21年度八幡公民館主催事業「八幡史学館」

「八幡名所百選」のことなど

平成21-6-16

山岸弘明

第1回（6月16日＝火曜日） 「八幡名所百選」のことなど

- ①史学館名所百選チームが選んだ「八幡名所百選＝ガイドマップイン八幡宿」
- ②市川本店、小川屋にみる八幡のしょうゆ醸造のあゆみ
- ③八幡地区の句碑、歌碑（お客さま＝佐倉東雄）

第2回（8月3日＝月曜日） 「菊間藩」のことなど

- ①菊間城と菊間藩＝明治の一時期誕生した菊間城。ナゾ多い築城と藩政を探る
- ②八幡宮や名主文書から八幡のむかし新資料を紹介

第3回（10月13日＝火曜日） 現地巡検＝「菊間城跡」周辺を歩く

八幡公民館集合、路線バスで菊間へ。昼食持参、午後もあります。詳細は次回に

史学館名所百選チームが選んだ

「八幡名所百選＝ガイドマップイン八幡宿」

1) 「八幡史学館名所百選チーム」

- ① 昨年度「八幡史学館」参加者で「八幡史学館名所百選チーム」を結成
 - (1)メンバー＝小出惣治（会長）、佐倉東雄、鷺津寛子、多村勝彦、高沢 毅、石井 勇、山越恒吉、北島勝代、朝倉久恵、青木クニ、山岸弘明（事務局）（新参加も歓迎します）
 - (2)八幡地区歴史文化の掘り起こしと伝承、百選を通じた地域活性化。活動はすべてボランティアです
- ② 「八幡名所百選」の選定（メインテーマ）
八幡宿地区（44選＝選定完了、ガイドマップ試作版）、五所地区（12選＝選定完了）
菊間地区（選定作業中）、市原地区（これから） 合計100の予定
- ③ 今後は
 - (1)地区別ガイドマップの作成、散歩コース作り、ボランティアガイド
 - (2)普及宣伝活動（新聞発表、公民館、駅ギャラなど）
 - (3)環境整備と表示（案内板の検討）など検討して行きたいと考えています。
- ④ 八幡公民館に協力、その他の活動実績
 - (1)八幡公民館ロビー＝やわたむかし写真館、山口達画伯展
 - (2)八幡宿駅ギャラリー＝八幡公民館の60年を見つづけた私たちの郷土やわた展
 - (3)八幡称念寺＝山口達画収蔵作品展
 - (4)八幡公民館文化祭＝おかげさまで60年・八幡公民館とやわた展
 - (5)飯香岡八幡宮＝放生池と清見の滝周辺の清掃（実施中＝みなさんも参加しませんか）

2) 八幡名所百選＝ガイドマップイン八幡宿



江戸時代のしょうゆ醸造↑→



大正?の市川石三しょうゆ工場

市川本店、小川屋にみる八幡のしょうゆ醸造のあゆみ

1) 「濃い口」で人気集めた「地回りしょうゆ」—— しょうゆの歴史

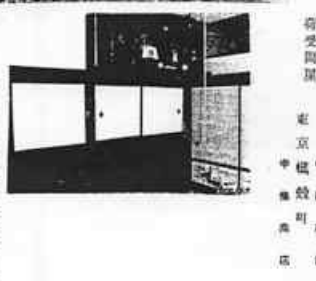
- ① 日本の気候風土が作った調味料 —— しょうゆの誕生
 - (1)「しょうゆ」は中国から伝来した「醬(ひしお)」に始まる。
 - (2)ひしお=けものや鳥の肉をこうじと塩をませた酒に漬けて100日ほど熟成したもの
- ② 白鳳ころひしおは日本に伝わり、鎌倉時代に溜(たまり)が生まれた。
 - (1)中国から経山寺みその製造法を持ち帰った信州の僧が桶の底に溜まった液汁がおいしいことを発見
- ③ 大豆と小麦で「しょうゆこうじ」を作り、塩水を加えて熟成、発酵させるという、今日の「しょうゆ」は室町時代、京大坂に近い播州(兵庫)や泉州(大阪)などで作られた。
 - (1)現在でも竜野や小豆島は千葉県に次ぐしょうゆ産地になっている
- ④ しょうゆが量産され消費地へ運ばれて多量に販売されるようになるのは江戸時代のこと。江戸ははじめ、上方の「下りしょうゆ」がはばを効かせたが、中期以降、銚子と野田を中心とした「地回りしょうゆ」の「こいくち」が定着した。房総の地は
 - 気候=年間を通じて気温が一定して湿度が高い、原料=大豆や小麦、塩が得やすい
 - 需要=大消費都市江戸に近い、の3条件が揃いしょうゆ製造に適していた。
- (1)銚子しょうゆは元和2年(1616)摂津西の宮しょうゆ製造の流れをくむ田中玄蕃家がヒゲタを創業、正保2年(1645)紀州湯浅の醸造技術を引いた浜口儀兵衛がヤマサを興す。
- (2)野田しょうゆは寛文元年(1661)高梨兵衛門が先駆し、キッコマンも天明2年(1781)に始まった。
- (3)こいくちは江戸中期、上方風に対抗した「江戸風」の流行で一気に広がった
- (4)文政4年、江戸の年間しょうゆ消費量=8升樽125万こ、うち98%が関東産
- ⑤ 戦後の一時期、製造期間を短くした「化学しょうゆ」が作られたが風味が劣ったという。その後、原料処理工程や連続装置の技術革新が進められたが、伝統の「味と香り」造りのため長期間発酵熟成させるという基本手法は変わっていない。
- ⑥ 現在の日本の総しょうゆ生産量=100万kl(500石) 1人およそ10l弱、40%を関東産が占めている。

2) 江戸後期に始まり、昭和戦後に終わる —— 6軒も数えた八幡のしょうゆ醸造所

- ① 八幡のしょうゆ=八幡宮社家の市川本店が江戸後期に始め、明治、大正期に地場産業として発展した。当時八幡は製塩業が盛んで水も豊富、原料の大豆、小麦も手に入りやすかった。製品は主に大消費地である江戸、東京へ出荷された。
 - ② 八幡には最盛期、6軒のしょうゆ醸造所があった。
 - (1)市川本店(屋号三太夫)=天保ころ~昭和20年代、ヤマサ最上印、酒類販売も
 - (2)田山(紀伊国屋)=明治~昭和20年代、キッコ正
 - (3)宇田川=明治~昭和20年代
 - (4)鈴木(陣屋)=明治~昭和30年ころ、キッコータ、味噌製造も
 - (5)寺嶋(河内屋)=明治ころ、味噌製造も
 - (6)小川(小川屋)=明治~昭和20年代、チガミ小印、味噌製造、酒類販売も
- 市川本店以外は年産500石前後の中小メーカーが多かった。
昭和戦時期は従業員の出征や原料不足や非常時体制下の企業統合などで操業を停止、戦後一部は再開したが、八幡海岸の埋め立て前にすべて姿を消した。



戦前八幡町案内
(現況)
小川屋南面 ←
↓



平五郎八幡町
小川商店
東京小町町三丁目
中野区
東京
中野区
中野区
中野区

3) 門や店、蔵が現存する — 明治の絵図にみる「市川本店」の繁栄

- ① 市川本店=旧八幡宮社家、江戸後期からしょうゆ醸造業を兼ねる。地区業界のリーダー格で、規模も抜きんでいた。
 - (1)江戸後期の醸造家団体の「関東八組造り醤油仲間」名簿にはない
- ② 明治後期、日本博覧図「醤油醸造、酒類販売、市川石三邸宅」表門、店、母屋、庭、蔵2棟など、江戸後期の建造物が現存。
 - (1)高いエントツや仕込み桶などしょうゆ醸造設備もみえる
 - (2)原料や製品を運ぶ人、仕込み中の人など働く人たちの姿も生き生きと描かれて
 - (3)土蔵棟札銘=天保九戌年八月十一日幹支吉祥 いる
- ③ 工場跡地は現在空き地、礎石などが残り、盛時が偲ばれる。



市川本店

4) 八幡屈指の旧家だった小川しょうゆ店

- ① 八幡屈指の旧家=その系図(位牌、墓誌などで作成)
 - (1)小川五兵衛(文政11年没)、(2)佐右衛門(明治18年没)、(3)亀吉(明治36年没)、(4)倉吉(昭和17年没)、(5)衛(昭和26年没)、(6)利三郎(平成元年没)(以下省略)
- ② 小川倉吉=小川屋の最盛期、明治、大正期の当主、明治の「人名録」にしょうゆ醸造業、絲繭仲買商。町内有数の資産家にして五井銀行監査役など
- ③ 小川家は多くの土地を所有した八幡屈指の富豪だった
 - (1)明治30年「小作米請け取り簿」=貸地宅地4件、田31件、畑10件。小作米121俵ほか
 - 31年=貸地52件、小作米144俵余+金2円余

5) 明治36年に建てられた母屋 — 店と蔵はいまだ健在

- ① 小川家はご当主が長期入院中で、ご近所の牧口さんが留守宅を管理されている。
- ② しょうゆ業当時の敷地面積700坪の内、裏側のおよそ半分ほどが分譲済み。旧道側に母屋と庭。母屋は明治36年建造の店と土蔵、旧居宅、後ろ半分居間部分は昭和30年代の増築。
- ③ 明治36年「居宅、土蔵(店を含む)新築経費控え」
 - (1)総工事費2,601円91銭3厘(材木、石材、セメン、大工、畳、建具、棟上経費など) 大工は八幡の大塚三吉、職人は八幡、材木は深川から。
 - (2)明治36年9月起工、37年12月ころ完成
 - (3)明治38年1月しょうゆ蔵大釜改良工事、赤レンガ3,000本25円50銭 当時八幡宿駅はなく曾我停車場着、両総運送卸手数料(大八車輸送か)
- ④ 工場のエントツは操業をやめた後も平成はじめまであった。

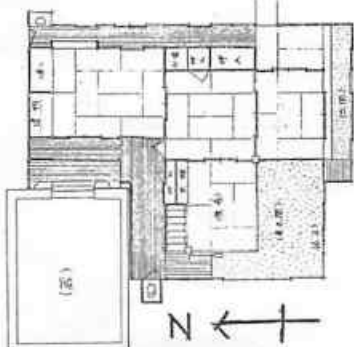
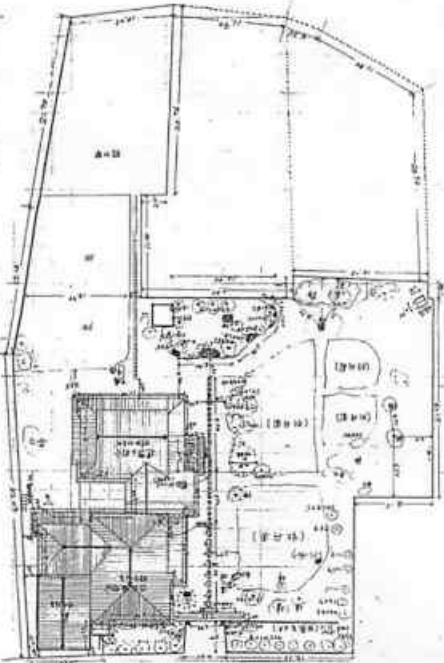


小川倉吉

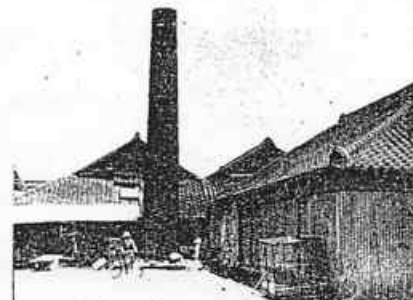
6) 記録を残す — 現存建造物の実地調査

- ① 小川家に現存する敷地、建物などの図面
 - (1)明治21年、明治末期、昭和30年敷地建物図(家相診断図など)
 - (2)大正3年届け出敷地建物図、増築届け図(部分図)
- ② 敷地面積(明治、大正、昭和ころ)
 - (1)八幡1357、1758番地合併=279坪(920㎡)
 - " 1359、1760番地合併=451坪(1,488㎡) 合計730坪(2,409㎡)
- ③ 建造物(大正3年千葉税務署あてしょうゆ届け出別紙)
 - (1)居宅(明治36年建造現存=増築あり)=25坪余(一部2階)、別宅=20坪、湯殿=3坪

明治36年建造
現存部図
(一部)



新築経費控



戦前の小川屋

(2)土蔵(明治36年建造現存) = 6坪、倉庫3棟=20坪、14坪、7坪余
 (3)醸造工場2棟=60坪、38坪(明治図にはこのほか70坪ほどの工場が載っている)

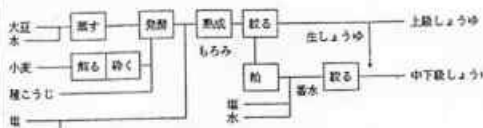
- ④ 旧居宅土蔵は店舗(店、帳場)と土蔵、居宅からなる。当初土蔵は独立して建てられたが、後世(戦後?)、店舗と土蔵の間を廊下で繋いでいる。
- ⑤ 屋根は店舗と居宅が寄棟、土蔵は切妻、瓦葺き、増築の時瓦葺き替えを実施
- ⑥ 外壁は正面店舗西側が板戸、玄関側南面はガラス戸(当初は不詳)、一部なまこ壁
- ⑦ 店舗は間口3間半、奥行き2間半、入って右半分が土間で左半分に帳場、広い土間に店頭売りのしょうゆたるが置かれたのだろうか。帳場は畳敷で奥に書棚が作り込まれている。
- ⑧ 居宅は玄関、奥座敷客間など3室、客間には廊下を回し池のある庭が望めた。
- ⑨ 土間や基礎はコンクリート製、日本のセメント工業創成期のもの。
- ⑩ 旧家の居宅としてはせまく、家族が生活する私邸は別にあった可能性もある。
- ⑪ しょうゆ工場時代に使用したらしい陶製容器やひしゃく、むかしの民具など多数を保有。

7) むかしの醸造方法

- ① 原料の前処理=大豆を水に浸し膨張させてから煮る。小麦を煎り粉砕する。
- ② こうじの作成=大豆と小麦を混合し、種こうじを加えて高温下で発酵させる(しょうゆこうじ)
- ③ 仕込み=醸造用の大たるに移し、塩水を加える(もろみ)。カイ入れしながら1年以上熟成を待つ。
- ④ もろみを布に包んでしぼり「生しょうゆ」と「しょうゆ粕」に分離する。加熱して品質を安定させる。生しょうゆの収率はおよそ70%、しょうゆ粕に詰め「上級しょうゆ」として販売。
- ⑤ しょうゆ粕に塩水と生しょうゆを加えて「香水」を作り、再びしぼって中下級品とする。
- ⑥ 1)生しょうゆが少ないと品質は劣るが廉価になる
- ⑥ 小川家が保管する明治、大正期のしょうゆ製造記録など
 - (1)明治10年、酒類売買営業鑑札御検査願、許可証
 - (2)明治はじめ、市川信明旧祠官引き継ぎの件(メモ)
 - (3)明治38年、43年ほか、千葉税務署あて、しょうゆ石数御届ほか
 - (4)明治41年、42年ほか、仕込み帳などの製造記録多数(虫くい、編年に網羅してはいるわけではない)
- ⑦ 主な原料仕入れ先と販売先(大正3年千葉税務署あて届け書類)
 - (1)大豆は岩田万右衛門、桑田与三郎(八幡)須賀三次郎(深川)
 - (2)小麦は桑田与三郎、佐倉孫三郎、檜山市太郎(八幡)中村源次郎、種村金太郎(菊間)
 - (3)塩は鈴木茂兵衛(日本橋)
 - (4)販売先は東京日本橋、千葉、五田保地区など、地元は店頭売り
- ⑧ 八幡から五大力船で江戸へ運んだ(大正8年しょうゆ船積み帳、11年の年間合計)
 - (1)大黒丸3,099本船賃145円65銭、稲荷丸1,560本78円、栄徳丸1,450本72円50銭
潤徳丸、海運丸、2号清正丸、浦吉丸、2号八幡丸、神力丸、新生丸、八幡丸、住吉丸
合計7,969本389円15銭
 - (2)大正11年八幡丸船積み請け書

八幡の石造物研究会(板倉満、小出惣治、佐倉東雄、多村勝彦、鷺津寛子、内藤敏子、北島勝代、山岸弘明)
 調査協力=牧口さん、山本さん、小川さん、寺嶋さん、市川本店、喜八

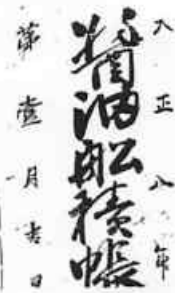
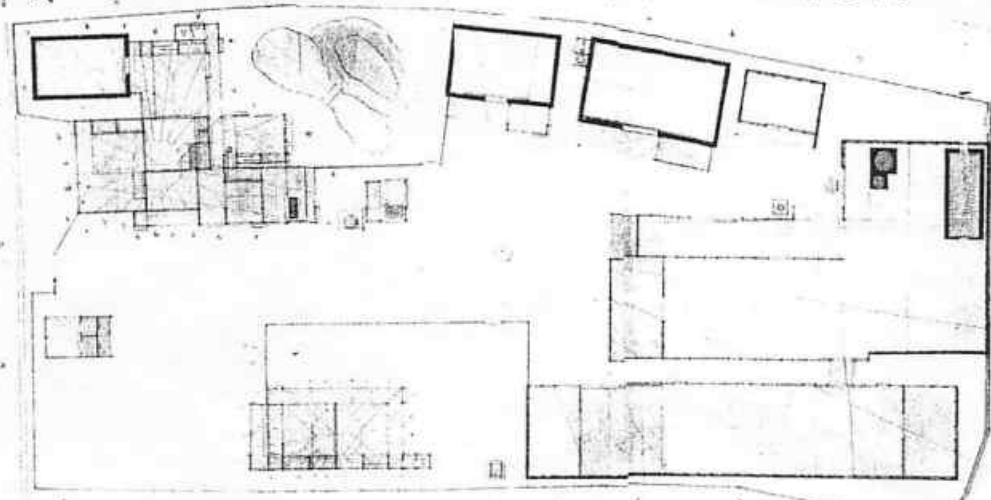
むかしのしょうゆ醸造方法(小川家の製造工程=推定)



しょうゆかめ 小物道具



明治末の工場跡山屋図



八幡周辺の句碑・歌碑をたずねて

(飯香岡八幡宮境内を中心として)

平成二十一年度八幡公民館主催「第一回八幡史学館」
実施日 平成二十一年六月十六日
会場 八幡公民館
案内者 佐倉東雄

①市原阿須波神社(市原)
庭中の阿須波の神に小柴さし吾は齋はむ帰り来までに

②飯香岡八幡宮境内

万葉集(四三五〇)天平勝宝七年防人の歌
防人帳丁若麻部諸人(きよよまらわかまのむらと
昭和四十五年六月建立
※防人：(崎守・さきもり)、すなわち辺
土を守る人の意で、多くは東国か
ら徴発されて筑紫・老岐・対馬な
ど北九州の守備に当たった兵士。
令には三年を一期として交替させ
る規定があった。

※防人歌：防人の詠んだ歌。また、その家
族の作家をも含めていう。天平勝
平宝七年(七七五年)に召された
防人の歌が万葉集巻二十に集めら
れ、巻十四その他にも数首見える。
東国方言を用い、親子・夫婦の哀
別を歌った純情流露の作が多い。

※詞書：和歌の初めに、詠んだ趣旨を書い
たことば。題詞。序。

詞書

己は往古白鳳四年、この国にこの神社を創めて
建てられし時、時季満卿勅使に渡らせ給ひ、
自ら銀杏樹を植えて詠を給ひし歌也
君がためけふ植そへし銀杏樹にいく世経んとも神宿るらむ
神垣に千歳を契るちちの木のかげをたのまぬ人なかりけり

勅使季満卿の歌 白鳳四年
明治二十四年八月十五日建立

御影山神のめでにし飯香岡むかしをかけて世に匂ひけり

万葉宗匠

建立年月日なし

見わたせば花たたずむはさくらかな

一徳

安政二年正月建立

御神楽の拍子に昇る初日かな

知雪

明治四十年八月十五日建立

名月や朝鳴き鳥も起きてゐる

秀真

昭和六年一月八日建立

息災で古希の美空やはつ鳥

秀真

昭和六年一月八日建立

清見滝歌碑(建立年月日無し)

昇吉

昇吉

刻字 こと國能人もみ免つるこの瀧の流は御代とつきせざりけり

保礼

刻字 落多藝津滝能志ち糸なか、連登かけてそ祈る神の広前

保礼

刻字 安未をと免ふち婦るうての字羅奈美に曾々久裳須々之多藝廻志良当萬

保礼

刻字 海女をとめ打ち振るうてのうら波にそそぐも鈴の滝の白玉

大重

刻字 広者多能八者多の神乃恵みこそ清見の瀧と湧きて流るれ

大重

刻字 久利返し見つしおれど安加ぬ可奈や者たのみや能多藝の志ら以と

是常

刻字 繰り返し見つしおれどあかぬかな八幡の宮の瀧の白糸

是常

刻字 与の人の心ともか奈可ミきよ紀清見の瀧のきよき姿を
世の人の心ともかな神清き清見の瀧の清き姿を

頼風

刻字 松風のちよのしらべにたくひくるきよミの瀧のおとのさや介さ
松風の千代の調べに闌ひくる清見の瀧の音の清けさ

梅泉

刻字 大神のた可きミいつの能古毛里るのきよ見の瀧にかかるうれしさ
大神のた可き御稜威の籠もりるの清見の瀧にかかるうれしさ

常春

刻字 月よりもまた雪よりも花よりもきよみの瀧盤猶まさり介里
月よりもまた雪よりも花よりも清見の瀧はなをまさりけり

常貞

刻字 いや波た乃可ミ能免具み越千代可介天清御能たき尔久む楚字連し幾
いや波た乃可ミ能免具み越千代可介天清御能たき尔久む楚字連し幾
い八幡の神の恵みを千代かけて清見の瀧に汲むぞうれしき

規毛

刻字 飯香岡とよむ者のり尔聞由を里きよミのたき乃滝つせの音
飯香岡とよむはのりに聞かゆをり清見の滝の滝つせの音

邦通

刻字 飯香岡岩根の松能千代可け天多え怒清見の滝のし良糸
飯香岡岩根の松の千代かけて絶えぬ清見の滝の白糸

重雄

刻字 於と支よき清身の瀧者以者清水にご良ぬ神のミた万ならんか
於と支よき清見の瀧は岩清水にごらぬ神の御霊ならんか
音清き清見の瀧は岩清水にごらぬ神の御霊ならんか

通專

林曉翁の碑 安政二年四月建立
きのうだも異なりわれの悲しきに今日また香る藤衣かな

組子

川筋の木草あやとるほたるかな

翠左

うけら咲く補陀落山やほととぎす

梅旭

花げしの空にたもとをぬらしけり

可月

夏山や花の名残のその跡をおしいおしいと蟬の諸声

一徳

日は入れど西は柳の姿かな

邦玉

ほととぎす跡をしたへば二日月

邦一

人の植えたとも思われぬ山田かな

月之

浅間神社

富士の嶺の神に願ひをを掛け巻くも
三十たびあまりみたびのぼりぬ

豊山

俗名長野豊太郎 明治四十二年九月建立

③ 満徳寺

松風のこぼれて涼し御墓堂

子崔 昭和六年七月建立

④ 仲町駐輪場(農協脇)

母親に助けられつつ椽に立ち遠山里を懐かしく見る

川上孝悌 昭和六年三月建立

⑤ 無量寺

市川家墓地(三太夫)
涼しさや古くよく寝る今日のさけ

市川大造(前大和正藤原常忠)

市川家分家雄三家墓地
のどかさや不二と筑波を庭に見て

対潮舎一徳(社家・山下左近正源庸吉)

飯田家墓所
いざさらば迎びとともに花の宿

庸孝 嘉永六年二月二十二日建立

⑥ 満蔵寺(五所)今井家墓地
短夜やこの世の夢のひと眠り(辞世)

今井卯三郎 行年二十才



御神楽の拍子に昇る初日かな



見わたせば花たたずむはさくらかな



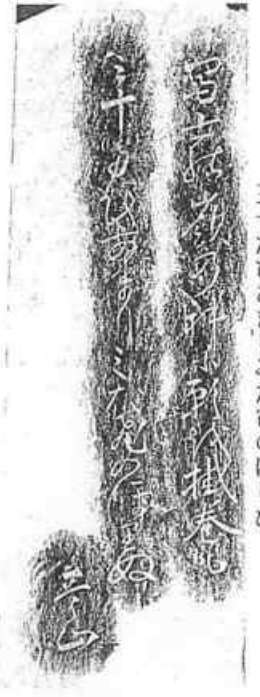
垣に千歳を契るちちの木の
かげをたのまぬ人なかりけり



庭中の阿須波の神に小柴さし
吾は斎はむ帰り来までに



松風のこぼれて涼し御墓堂



富士の嶺の神に願ひを掛け巻くも
三十たびあまりみたびのぼりぬ



名月や朝鳴き鳥も起きてゐる



息災で古希の美空やはつ鳥

激動する慶応4年(明治元年)—— 義軍府の戦い、知県事役所、菊間藩の成立

昼は乱暴人どもに金子脅し取られ、夜は6、7人抜き身携え、村方一統恐怖ま かりあり候

山岸弘明



(明治戊辰の戦いと八幡五井戦争)

1月2日 鳥羽伏見の戦いで幕府軍が敗ける
 1月6日 徳川慶喜大坂を脱出、12日江戸城に入る
 2月9日 有栖川宮を東征大総督に任命
 4月 八幡などに無法人横行
 4月11日 江戸無血開城、慶喜は水戸へ退去
 4月12日 福田八郎右衛門らが徳川義軍府を結成
 閏4月3日 義軍府は船橋戦争で敗走
 閏4月6日 八幡・五井戦争、養老川の戦い
 閏4月8日 義軍府壊滅、しばらく不穏な状況続く

(知県事・柴山文平仮役所)

4月21日 新体書発表、府、藩、県制とする
 7月2日 柴山文平、上総房州監察兼知県事任命
 7月13日 " 監察を解く
 7月15日 " 八幡着、東屋を仮役所とする
 7月17日 " 仮役所から房総常陸諸藩に通告
 7月18日 " 支配組合親村に通告、出頭を命ず
 7月19-21日 組合村総代ら仮役所に出席
 7月22日 組合村村々に高付帳提出を命ず
 7月 領内に高札(定三札)を掲出
 7、8月 組合村々各種書き上げを提出
 八幡村、これまで通り永々支配宿噴頭
 8月1日 柴山、大多喜へ移動、仮役所を移す
 8月 " 長南浄徳寺に移転、12月宮谷へ
 8月 水野忠敬らに所領を引き継ぐ
 (菊間水野藩関係)

5月24日 徳川家達宗家を相続、駿府70万石
 水野忠敬に所替え内示
 7月13日 " 所替え地市原郡と決定
 7月27日 " 家族ら伊豆戸田村へ引き移り
 8月 藩士ら戸田村へ移転
 8月 拝領地受取方兼境界測量方派遣
 8月22日 領地替え経費として1万3千両を借用
 8月23日 沼津の領内郷村を引き渡す
 8月26日 上総新封の警守を命じられる
 8月30日 沼津城引き渡し
 6日 新封警守のため水野藩兵市原に着任
 測量方、総普請役、屋敷割りなど派遣
 9月8日 年号が「明治」となる
 9月16日 忠敬、新政府に出頭、お礼言上
 9月21日 上総転封の正式辞令交付?
 9月 このころ 領内に高札を掲出
 9月27日 忠寛、東京を昨夕乗船、早晩八幡着、先行して現地指揮をとる

10月ころ 称念寺を「宿陣」とし、忠寛居住
 藤田屋を「仮陣屋」とする
 各本陣邸、東屋、八幡宮邸も利用か
 八幡村、陣屋招致入用負担申し合わせ
 このころ 城地決定、築城開始か
 10月 一部所替え、市原郡13,680石が変更
 10月13日 領内に「申し渡しの覚え」を通告
 12月17日 領地替え経費3年間1,000石、1万5千両ずつ下賜決定
 12月ころ 組合村、高反別など書き上げ提出
 10-12月 沼津藩士が相次いで転入、邸地を拝領

明治2年(1869)

1月 忠敬、供揃いで江戸入り
 2月19日 忠敬ら版籍奉還を願い出る
 3月4日 忠敬、羽後守叙任
 6月19日 版籍奉還、忠敬は菊間藩知事に任ず
 6月20日 忠敬、藩知事の辞表を提出
 6月26日 藩知事家禄は実高の10分の1、忠敬1,926石と決まる

7月7日 忠敬、説諭され菊間藩知事を拝受
 7月26日 " はじめての菊間入り
 千光院をへて根本宅増改築して移る
 大浜支庁屋敷純着任、旧弊改正めざす
 (1870)

9月 明治3年
 1月3日 武士の偉儀削減、菊間藩は土族20石に
 2月25日 大手筋新坂入札、407両で弁次落札
 3-4月 医局でほうそう種痘
 4月25日 忠敬、供揃いで勝馬村方面村々を巡見
 7月12日 新道普請完成。経費は近隣村々が負担
 12月15日 公廨(こうがい=役所)上棟式
 12月19日 " 郡中村々へ備前配付
 12月25日 村々農事休日制定
 12月27日 公廨に引き移り
 この年 落校「明親館」を新築する
 (1871)

2月 一部所替え
 2月1日 重臣ら領内郷村、八幡から
 2月24日 忠敬邸棟上式
 3月8日 大浜支庁で「大浜騒動」起こる
 魔藩置県。菊間藩は菊間県となる
 7月14日 忠敬、藩知事を免じられ東京に移る。
 藩庁は菊間県庁となる
 7月 築城工事を中止
 11月13日 菊間県などを統合、木更津県となる



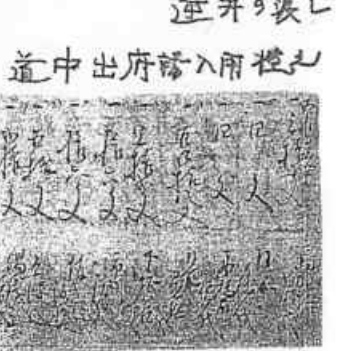
水野忠敬(右)と 忠寛父子 (市原市史)



寺島家(寺島医棧)



逆井の疾し



飯香岡八幡宮手水石の「龍」彫刻は金装飾されていた
 八幡の石造物研究会がすすめている石造物調査で、八幡宮の手水石正面の彫刻「龍」が黄金で塗装されていたことがわかりました。寛文2年(1662)建立、当時、さんざんと光り輝いたことでしょう。かつて陸海交通の要衝として賑わった八幡の昔を彷彿させます。痕跡を現地で確認しましょう。

寛文十七年

八幡・寺嶋千鶴子家文書「文久3年、道中出府諸入用控え」

1) 寺嶋家は旗本村上組名主を勤めた八幡屈指の旧家 —— 多数文書を所蔵

①寺嶋家は旗本1,200石両番格の村上三十郎知行所(地頭)名主を勤めた八幡屈指の旧家。代々名主を勤め、農業経営、船運、金融、しょうゆ、医師などを生業とした。

数千点規模の近世、近代文書を保管し県文書館に委託、整理中、現在のところ未公開。

(1)現当主は千津子氏の長男・雅史氏(寺嶋医院院長)

②寺嶋由次郎は5代前、江戸後期の当主で名主、苗字帯刀を許された。

明治維新まで5年、幕末文久3年(1863)公用で江戸へ出張した時の経費メモ。

③前年の文久2年、公武合体のため14代将軍家茂に皇女和宮が降嫁、しかし一方で尊皇攘夷運動が高まっていた。この年3月家茂は家光以来229年ぶりに上洛、孝明天皇は家茂を伴い賀茂神社に攘夷祈願する。領主の村上氏もこの上洛に従っている。

(1)文中に「御殿様大坂表御触の儀、御用として御上り遊ばされ、かつ英国一条騒擾につき勤番中」とある。英国一条は生麦事件に引き続く下関事件、薩英戦争をさす

④由次郎は招集命令を受けて本所三つ目、現在墨田区緑4にあった地頭所へ出張、その期間は5月13日～6月3日のおよそ20日間、いまの7月、夏の盛りであった。

2) 往路は50kmを1日で歩き、復路は船や馬も利用ややゆったりと —— その旅程

①5月13日早晩八幡出立、供の荷物持ち(半五郎)と2人か

「房総往還」を進み馬加(幕張)で休憩(茶代32文、橋代4文)

船橋で昼食(148文、船橋橋代4文)

船橋から道名が「佐倉成田往還」に変わる。下総八幡(本八幡)で休憩(茶代32文)

市川小岩渡船(関所)(16文)

逆井(中川、亀戸近く)で渡船(16文、そば代50文、湯銭、茶代20文)

夜、地頭所着

②6月3日江戸出立(荷物持ちなしの1人旅か)

行徳から船(100文)

船橋で昼食(104文)、乗馬(100文)、橋代(8文、2文)

登戸(のぶと=千葉市)(夕食、酒代200文)、夜、八幡着

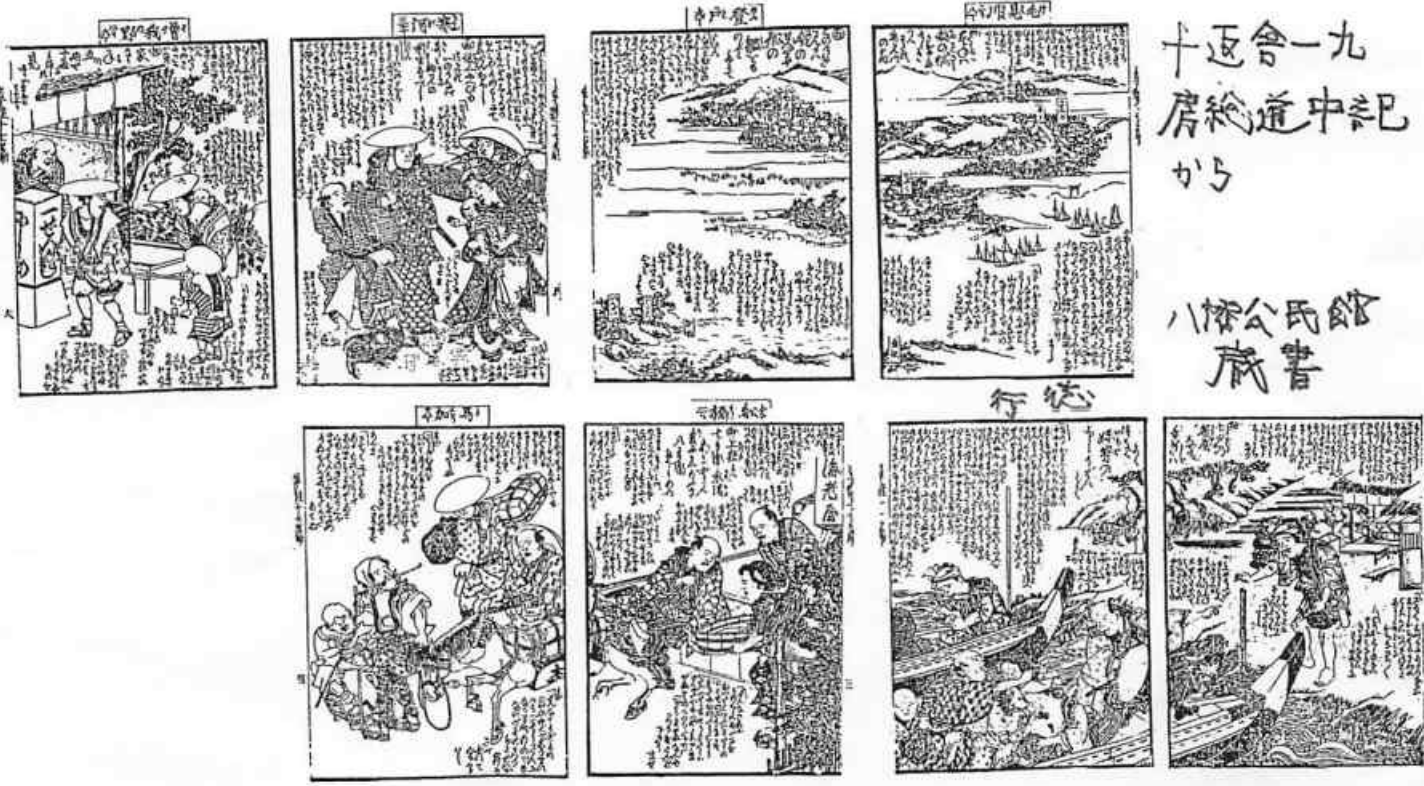
③出府中の主な支出=身だしなみ多く、総じてまじめ、浪費はない。

髪結い5回(28文~38文)、湯銭4回(12文~20文)、たばこ、ちり紙、洗濯代、てんぷら(100文)、酒代(100文)、まんじゅう(100文)、すし(48文)、折代(謝礼かみやげ230文)

④大坂滞在中の殿様への陣中見舞い?(現金の記載はない=別枠?)

黒塗り傘(2朱と250文)、かっぱ(1分、2分と300文)

⑤こうした道中記録はほとんど現存せず貴重な郷土資料といえる。



ドキュメント八幡村1868

第1話 明治維新の戦いで八幡が戦場に

1) 鳥羽伏見の戦いに幕府軍が潰走 — 慶応4年の長い1年がはじまる

①慶応4年1月2日、大坂城にあった15代将軍徳川慶喜は、老中格大多喜3万石松平正質（まさただ）を総督に、軍1万5,000を率いて京都をめざし進軍を開始した。

(1)前年、徳川家の「辞官納地」を決めた「小御所会議」後、将軍慶喜と薩摩藩は主導権を争ったが、慶喜派新体制に纏まりつつあった。事態打破をもくろむ薩摩は江戸市中放火などの無法行為で挑発、誘いに乗った幕府は薩摩藩邸を焼き討ちにした。慶喜の軍事行動は朝廷への「討薩の表」提出にあった

②阻止したい薩長土佐軍と強行突破したい両軍は鳥羽と伏見で激突した。

(1)迎え打つ薩長軍はわずか3,000、装備も劣ったが戦いが巧み、一方の幕府軍は指揮官の知識や経験が浅く1人が逃げるとみんなが後を追う始末だったという

③3日は夜半から薩長軍が優勢、4日には錦旗がたなびいた。5日前線本拠の鳥羽城に逃げ帰るが老中の稲葉正邦が入城を拒否する。現職老中にまで見限られた幕府軍は全員総崩れとなって大坂城に退去した。

④この間慶喜は一度も戦線に姿を表さず全軍が敗走してくるとあっさり海路江戸へ向けて脱出する。その本意は自らが朝廷から賊軍の汚名を着せられるのを恐れたのだとされる。

(1)将軍の敵前逃亡で幕府軍は戦意を喪失、江戸へ向けて潰走していった

(2)直後、統制のとれなくなった城内から失火、弾薬庫が大爆発して大坂城も焼滅した

2) 江戸開城に不満の幕臣たちが木更津に結集 — 義軍府の決起と八幡・五井戦争

①慶応4年4月11日江戸無血開城。寛永寺で謹慎していた慶喜は水戸に退いた。

②不満の幕臣たちは各地で決起した。海軍副総裁の榎本武揚は旧幕全艦隊を率いて館山に走り、陸軍歩兵奉行の大鳥圭介は市川国府台に集結した。

(1)榎本は函館にこもって抗戦、共和制政府を築くが降伏、大鳥も宇都宮、会津と転戦、函館で榎本軍に加わって降伏、投獄された。2人は明治新政府でも活躍した

③旧幕撤兵頭福田八郎右衛門は旧隊士や旗本有志、諸藩の脱走兵らと木更津に集結し、「徳川義軍府」を結成する。総勢1,500人、第1大隊（江原）、第2大隊（堀）500人を船橋に、第3大隊（増田）を姉崎に進め、真里谷の本営、第4大隊（戸田）、第5大隊（真野）の編成であった

④一方、東海道先鋒副総督の柳原前光は岡山、筑前、津、佐土原の4藩を率いて、閏4月3日義軍の前線本拠、船橋大神宮を砲撃、船橋宿は炎に包まれた。敗走する義軍を追って官軍の追撃が始まる。

⑤市原のあゆみ=市原市、市教育委員会

7日未明、上総の八幡に集結を終えた官軍は南新田において義軍との交戦の態勢に入り、軍を3手に別けました。主力を本道とし右翼は海岸を五井川岸方面に向け、左翼は君塚村に進めることになりました。

(中略) 7日の朝早くから五所村まで進撃を開始しました。(後略=養老川の戦い)

(1)二監軍ならびに各藩届け書=鹿児島、山口、津、岡山の兵は進みて曾我野に鹿児島の別隊、佐土原の兵



鳥羽伏見の戦い



江戸無血開城
勝、小御所会議



明治天皇



徳川慶喜



開城における徳川義軍の配置 (慶応4年閏4月3日)

右側の城塞等は陣地
▲ 徳川義軍の配置

は千葉に、大村の兵は寒川に次す。この夜賊、にわかには八幡を襲い、鹿兒島の番兵2人を口殺す。その報曾我野に至る。4藩の兵、報をえてただちに発し大村の兵は鶏鳴にその營を発してことごとく八幡に向かう。払暁、二監、6藩の兵を督して八幡に向かう。(中略)わが兵三道並び進む。

(2)総房鎮撫日誌=閏4月5日。この夜賊兵八幡を襲い鹿兒島の番兵を殺す。鹿兒島以下五藩の兵、ただちに八幡へ向かう

⑥五井戦争を掛け抜けた5人の青年、伊井寛次郎陣中日誌=酒枝次郎

(1)寛次郎は土佐藩郷士の2男、藩校「致道館」に学んで倒幕運動に芽生えた。慶応4年1月鳥羽伏見の戦いが始まると板垣退助率いる「迅衛隊」一員として高知を出発した。時に29才

(2)7日早暁、官軍は八幡円頓寺に集結、八幡の町は異様に興奮した官軍で満ちあふれていた。前線本部の置かれた円頓寺に入ると長い参道にはかがり火が焚かれていた(以下別掲=参照)

3) 徒党組んだ乱暴人が八幡村を横行 —— 寺嶋家文書が伝える維新の戦い

①江戸総攻撃をま近に、戦火を恐れた領主の村上家は家族を知行地の1つ、夷隅郡の布施村に疎開させていた。ところが上総の状況が緊迫、急遽江戸へ引き上げることにする。閏4月2日上様方(家族一行)が布施村から八幡村到着、3日村船で江戸をめざさすが悪天候のため途中で引き返す。4日市川・船橋戦争、6日敗走する義軍を官軍が追走、八幡を通過。一行を菊間村に避難させことなきをえる。

(1)戦時下での村人たちの動向を伝える資料は少ない、雨戸を締め切って潜むか、少しでも安全な所へ避難したものだろうか。

③閏4月4日、好次郎から地頭所用人あて飛脚便=

4月21日、当村へ乱暴人ども40人ほど、表向きは村役人ども強談について金子掠め取られ、夜は6、7人抜き身を携え、ことのほか村方一統恐怖まかりあり候(中略)はたまた先だつては脱走御武家様方、船橋、中山あたりへおよそ千人余り繰り出しに相なり、官軍向かい合いおり候につき騒がしく候(中略)しかるところ(閏4月)3日下総八幡、船(橋)宿あたりにて戦争に相なり(中略)小前、百姓どもに至るまで人馬召し出され、農事只今のところ出来申さず、この間の人々当村通行に相なりまことに大乱に相なり(後略)

④閏4月15日、地頭所用人から好次郎ほかあて飛脚便=

過日御家族様御引き移りの節、その村方へ御逗留に相なり候ところ、前後戦争の場合につき、菊間村へお立ち退きに相成り申し候由、(中略)右かれこれ御世話に相なりかつ舟へ積み込みの荷物も来る11日、御屋敷着に相なり申し候て御安意下さるべく候(後略)。ほかに送り荷物内訳など

4) 旅籠藤田屋にいまも残された刀 —— 八幡竹内家の伝承

①市原市八幡地区の遺跡と文化財、旅籠藤田屋(竹内克=市原市文化財研究会長)=

このころ(慶応4年)のことである。八幡の旅籠藤田屋に2人の旧幕府軍兵士が一夜の宿を乞い、宿泊した。翌朝出発する際「命があったら取りにくる」といって刀一振りと掛け軸を置いて立ち去った。2人は外で待っていた新政府軍に惨殺され、遺体は遺棄された。

(1)刀は竹内家に現存。刃渡り69.6cmの古刀、銘は国綱、掛け軸の所在はわからないという

八幡宿の町は異様に興奮した官軍で満ちあふれていた。前線本部の置かれた円頓寺に入ると、長い参道にはかがり火が焚かれ、寺の本堂には遺体が二つ置かれていた。ほんの一時ほど前、進駐する薩摩藩軍の前哨兵として八幡宿に入った薩摩兵二人が、徳川義軍の偵察隊と衝突して斬られたのである。
この日の夕刻、蘇我派野を南下する薩摩藩軍の先鋒隊の斥候として、三番隊所属の二人が十分ほど早く八幡の町に入った。たまたま横丁から通りかかった徳川義軍の遊撃隊十五人ほどに遭遇して、不意打ちを受けて戦う余裕もなく捕まって斬られた。遊撃隊はすぐ五井に引き返した。斬られたのは、種子島出身の菊地竹庵四十歳と、赤松守衛の家来で卒の助市二十五歳であった。少し遅れて町に入った戦友たちは激昂した。薩摩藩兵は怒りにえてただちに五井へ斬り込もうと思まき、指揮官たちがどうにか抑えていた。
境内に幕を張った司令部ができていた。

五井戦争を 駆け抜けた 五人の青年



藤田屋



円頓寺



寺嶋家文書

第2話 房総知県事仮役所

1) 芝山文平房総知県事に任じられる — 八幡東屋を仮役所とする

- ①慶応4年閏4月8日、官軍は最後の本営真里谷真如寺を攻めて幕府義軍府を制圧した。
しかし、房総一帯は幕府直轄領や旗本所領で幕府びいき、残党が潜むなど不穏な状況が続いた。
- ②新政府はこれに先だつ4月21日「政体書」を発して地方を府、藩、県にわけた。大名所領を除く幕府直轄領と旗本領を県とするもので、7月2日柴山文平に「上総、房州監察兼知県事」が任命された。
- (1)柴山文平(1822~1884) = 久留米藩出身の尊皇志士で、鳥羽伏見の戦いが始まると藩命を受けて官軍の軍監となり、当時前橋周辺の鎮撫隊に所属していた
- ③柴山は7月15日八幡宿に到着、8月1日まで東屋を仮役所とする。
後8月中、下旬の仮役所構成は公事局、田制局、会計局、軍事局の4局、16人であった。
- (1)寺嶋家文書「慶応4年7月、知兼事御役所へ書き上げ留控え」 = 慶応四辰年七月十五日夕刻、八月朔日にて大多喜へ御引き移り、知兼事柴山文平様御出張に当村東屋御宿、仮御役所移動
- (2)市史は仮役所を八幡宮宮司・市川信明邸としている。東屋も同宮社家であり一帯を使用したといえる
- ④7月17日、仮役所から房総、常陸野諸藩に通達
- (1)(前略)しからば今般柴山文平、上総房州監察兼知県事仰せ付けられ、上総国八幡宿へ出張致され、当分のうち支配所万事同所において聞きただされ(後略)
- ⑤7月18日支配8郡の組合親村へ通達、出頭を命ず
7月20~22日旧領高反別書き上げ提出を命ず、以降相ついで書き上げの提出を指示する。
- (1)その方ども申し渡しの儀これある間来る二十一日までに上総国八幡村仮役所へまかり出べく候(後略)
- (2)名主日記(市原市文化財研究会) = 7月20日、官軍知県事柴山文平様よりごさたにつき、御旗本知行召し上げ候につき、組頭多七まかり出候ところ、去る亥年より高反別上納石数書き上げ申すべき旨仰せ渡され(中略)なおまた御触書御高札掟写し下され拝見致し候
- (3)同 = 7月29日、その内知県事御役所より御呼び出しにつき訴答、一同東屋本陣へまかり出候ところ(中略)一同扱人御白州へまかり出(後略)(このほか八幡出張の記載が多数ある)
- (4)御高札(五榜の掲示 = 定三札) = 明治元年7月領内に掲出
第1札 = 定、一、人たるもの五倫の道を正しくすべきこと(中略)慶応四年三月、太政官
第2札 = 定、何ごとによらずよろしからざることに大勢申し合わせ(中略)慶応四年三月、太政官
第3札 = 定、切支丹宗門の儀はこれまで御禁制のとおり固く守り候こと(中略)慶応四年三月、太政官
1札終りに = 御高札の趣、堅く相守べきものなり、慶応四年三月、知県事、柴山文平
- (5)寺嶋家文書にも書き上げ若干点、八幡村名主一同、これまでとおりの永々支配宿嘆願書控えなど所蔵

2) 8月1日大多喜に移る — 宮谷県権知事当時の旧旗本先納下げ金事件で失脚

- ①8月1日八幡仮役所を大多喜に移転、ついでほどなく長南の浄徳寺に移動する。
柴山の八幡仮役所はわずか1か月ほどで終わった。当時上総は義軍府の敗走、脱藩大名林忠崇の奥羽転出などでようやく落ち着きを取り戻しつつあったといえる。柴山は新県制の確立に向けて領内の治安維持にあたる一方、旧旗本年貢の徴収、出入り訴訟などにあたった。柴山の支配は長南移転後もしばらく(八幡は元年8月までか)続いた。この間仁政を施し、領民に喜ばれたとされている。
- ⑦明治2年1月、柴山の支配地は宮谷県と改称、権知事に就任、4年7月廢藩置県が実施され罷免された。後、旧旗本先納下げ金について司法省裁判所で糾問され、明治5年官位剥奪、謹慎30日の判決を受けた。以後旧藩主有馬家家令、上等裁判所勤務などをへた明治17年逝去、63才。墓所は谷中墓地。



柴山文平



↑ 知県事印 東屋仮役所跡
柴山の墓



↓ 市川信明邸跡



第3話 菊間藩の誕生と築城① (次回に続く)

1) 沼津水野忠敬に上総転封が命じられる —— 菊間藩の誕生

- ①慶応4年5月24日、田安亀之助(家達)による徳川宗家相続が認められ、駿府70万石が与えられた。
- ②同じ日忠敬は「追って所替え仰せ付けられ候あいだ、かねて用意これあるべき旨」内示、7月13日、国替え先が市原郡の内八幡村を含む23,700石と決まる。このほか分領の三河国領(大浜陣屋)1万3千石、伊豆国領7千石、越後国領(五泉陣屋)1万1千石はそのままであった。

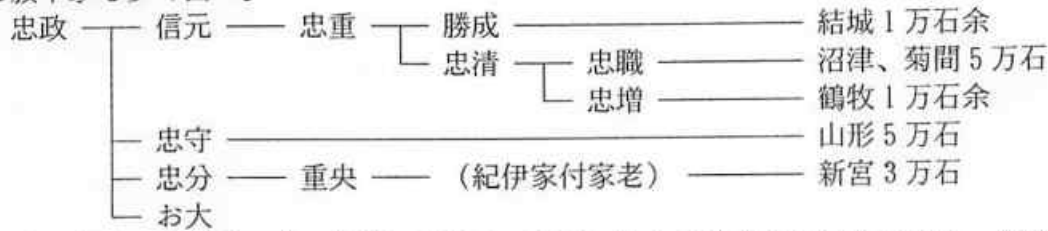
(1)同時に上総、安房国へ転封された7藩(◎印が市原郡)

- ◎駿河国沼津藩→上総国菊間藩=水野忠敬5万石
- 〃 小島藩→〃 金崎藩(後に桜井藩)=松平滝脇信敏1万石
- 〃 田中藩→安房国長尾藩=本多正納4万石
- ◎遠江国浜松藩→上総国鶴舞藩=井上正直6万石
- 〃 掛川藩→〃 芝山藩(後に松尾藩)=太田資美5万石
- 〃 相良藩→〃 小久保藩=田沼意尊1万石
- 〃 横須賀藩→〃 花房藩=西尾忠篤3万石

(2)房総地方は幕府の台所で、およそ40万石にも及んだ幕府直轄領と旗本領が移封先となった

2) 徳川家康の生母お大の実家 —— 華麗な水野家の系譜

①水野家は徳川家康の生母お大の生家で、大名家が4家、紀伊徳川家家老のほか旗本奴の十郎左衛門家など旗本家も多く出た。



②沼津、菊間家は勝成の弟・忠清に始まる。秀忠に仕えて松本6万石となるが、6代忠恆のとき江戸城中で刃傷事件を起こして改易、大伯父の忠毅に名跡相続が認められて7,000石が与えられた。8代忠友は10代將軍家治に信任されて老中、加増を重ねて沼津3万石となり、忠成も老中で5万石に定まった。

(1)諸侯年表=享保10年7月28日忠恆発狂し毛利主水正正師に傷つくるにより領地没収、秋元伊賀守喬房に預けらる。8月27日家の由緒を御思召され信濃国佐久郡の内において7,000石を忠毅に賜る

(2)寛政譜、忠友の加増=明和2年1,000石、5年5,000石、安永6年7,000石、天明元年5,000石、5年5,000石。あわせて沼津3万石。忠成の加増=文政4年1万石、12年1万石。あわせて沼津5万石



丸におもたか

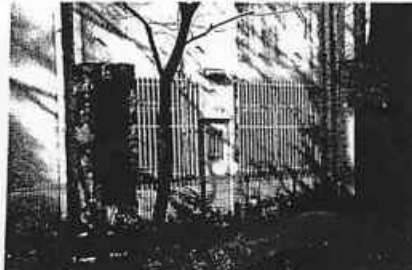


旧沼士会(中尺が水野忠敬)



沼津城下の北官邸

兵学校跡



沼津城跡

3) はじめに三枚橋城ありき —— 側用人水野忠友が沼津城として復活

①武田勝頼が築いた海城にはじまる = 沼津城の前史

長篠の戦いに破れた武田勝頼が、天正5年(1577) 本国甲斐と駿河湾を結ぶ軍事拠点として築城、鹿野川を外堀に川水を引き込んで4重の水濠を回した。5年後に小田原北条氏に攻められて落城、さらに徳川家康が奪う。江戸はじめ譜代武将・大久保忠佐居城となるが無嗣廃絶、廃城となった。

②安永7年(1777) 水野忠友が三枚橋城旧地に沼津城を再建 —— 城は鹿野川を背に2重の水濠に囲まれ、本丸に天守相当の3重櫓、2の丸、3の丸に2基の2重櫓と太鼓櫓を上げた。

③明治維新後、城主が居住した2の丸御殿はしばらくの間、沼津兵学校として使われたが、まもなく東京に移転し、石垣や水濠も火災や戦災、大規模な都市計画などですべて取り壊された。現在本丸跡は中央公園とされ、本丸跡碑、兵学校跡碑、三枚橋城石垣などがわずかに往時を偲ばせている。

4) いったん伊豆の戸田村で築城を待つ —— 沼津の家屋を解体して菊間へ運んだ

①慶応4年7月27日、城地、所領引き渡しを迫られた忠敬はいったん上知の対象外であった伊豆の戸田村への立ち退く。

(1)沼津史談⑥=水野の殿様は家族とともにこの御用河岸から舟に乗り、町の人たちの見送りを受けて戸田村へ向かった

(2)岡田程八日記=明治元年7月26日、両殿様(忠敬、忠寛)明暁七つ時御供揃え(中略)このたび御所替えにつき御領分のうち御領分の内豆州戸田村七右衛門方へ両殿様[]御乗船にて入らせられる。

②戸田村は高281石、小さな寒村に多くの家臣らも移転した。かれらは在村の百姓家を借りたが、1軒に複数家が間借りしたり、畳建具もない部屋や土間で雨露をしのいだ。

(1)沼津史談⑥=家臣や家族たちも7月27日の藩主立ち退きにともない、住みなれた侍屋敷を離れ、城外の郷村に家や居間を借り受け、順次転封地を待つことになった。

(2)市原市史=藩士の中には農家のそれも畳や建具などもないような部屋まで割り当てられた。仕方なく元の居宅の残品をかき集めてそれぞれ分配しようやく凌いだともいわれる。

②年号が明治に改まったこの年10月から翌1月、菊間での築城工事進展にあわせ藩士の菊間移転は波状的に始まった。移住にあたり家屋を解体して移築するものも少なくなかった。船で八幡宿の浜本に陸揚げ、そこから小船に積み替えて菊間城下に運ばれた。菊間城の建設が本格化していく。

(1)民政裁判所あて届け=沼津家臣団、侍屋敷105、惣長屋56、窩数(世帯)385、人数男1,181、女1,188。江戸在住家中、世帯97、男170、女156

③明治2年1月、忠敬は供揃いを整えて戸田村を立出、江戸に向かう。忠敬はしばらく江戸に止まり、初じめての国入りは7月26日になった。

(1)沼津史談⑥=明治2年正月、水野藩は同じ駿河国から転封の西尾、田沼、太田などの諸藩の行列は数十日間つづき、街道はその間人馬の絶える時がなかった



沼津城主住居間取圖



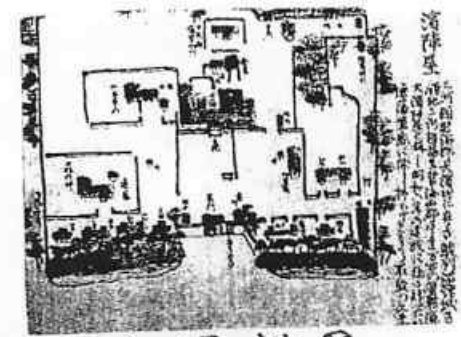
沼津城役元模写



↓五長陣屋



中央公園



大長陣屋

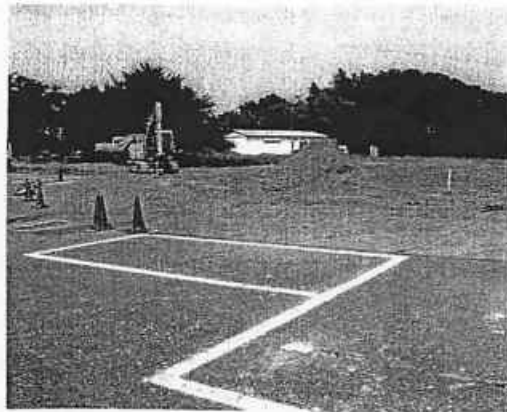
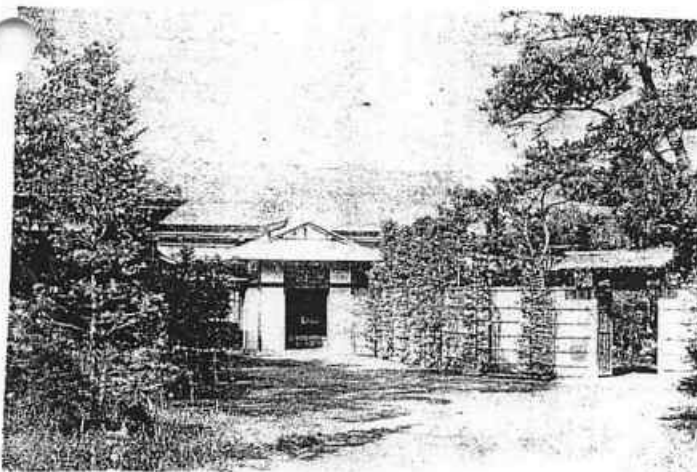
2の丸御殿

5) 菊間陣屋か菊間藩庁か、はたまた菊間城か —— 築城工事はじまる

- ①史書の多くは「菊間陣屋」とし、「菊間藩庁」もあるが「菊間城」はない
- (1)「広辞苑」は陣屋を「城郭のない小藩の大名の居所」、藩庁を「知藩事が事務をとった役所」とする
- ②「城」と「陣屋」の区分はあいまいで規模や形で判断されている。本来、大名の家格で、たとえ1万石でも城主格なら城、3万石でも在所大名なら陣屋と云った。
- (1)水野家支藩の鶴牧水野藩は1万5,000石城主格、鶴牧城を名乗ったが、一般に陣屋と呼ばれている。
- ③水野家は5万石城主で陣屋大名ではない。起工時は城、途中藩庁となり、未完成のまま終わった。菊間藩庁も正しいが「菊間城」と呼び変えたいものだ。

6) 所領引き継ぎと築城準備 —— 現地の総指揮は大殿忠寛がとった

- ①慶応4年8月、知県事柴山文平から上総国の新領2万3千石余を引き継ぐ
- (1)寄留者明細短冊=田所嘉文。慶応4年8月、旧藩転国の際代官役相勤め総国拝領地受取方かつ藩地境界測量方申し付けらる
- ②このころ測量方、総普請役、屋敷割り測量方などを派遣、
9月27日大殿様(隠居先々代藩主)忠寛が八幡宿に到着、築城の総指揮をとったとみられる。
忠寛ははじめ八幡称念寺を「宿陣」とした。
- (1)水野忠寛(文化4年~明治7年)=出羽守、側用人で井伊直弼側近。桜田門の変後、健康を理由に隠居し、養子忠誠の家督を譲った。忠誠は幕末期若年寄、老中となるが第2次長州征伐途次で病死し、養子忠敬を最後の藩主に迎えた。忠敬はまだ若く、実権は義祖父の忠寛が握っていた。
- (2)佐野彪家所蔵、海土有木村年番名主文書「諸用向き日記」=明治元年9月28日
廻状、八幡仮御役所。大殿様昨二十六日東京府御乗船のところ八つ時過ぎ滞りなく八幡村御着船、それより御旅館新左衛門宅へ御着遊ばされ候
- (3)忠寛は隠居後、江戸の浜町下屋敷か蠣殻町下屋敷のどちらかに居住していたと思われる
- (4)同書=10月1日。なおもってこの先触れ、村々早々継ぎ送り(留り村の)郡本村より八幡村称念寺まで宿陣へ相達したまうべく候(中略)八幡村称念寺宿陣、内田郷宿村より、水野出羽守内鎌倉治郎作
- (5)岡田程八日記=年月日無記(明治2年?)、大殿様上総国八幡駅称念寺へ仮移り
- ③忠寛は明治2年?、城内徳永台の字柳谷に土塁、空堀で囲んだ自らの住居、通称御殿を建造して移転。
- (1)菊間2657~2684番地のおよそ5千坪、一部土塁残欠あり、空堀跡の地形がわかる
- ④前出藤田屋(八幡竹内家)は沼津城に飾られていた水野家の「おもだか紋」も所蔵されている。
藤田屋は水野家の仮陣屋とされた。沼津から派遣された役人たちは藤田屋のほか、本陣名宅、八幡宮神官宅、前出東屋、寺院なども役所や宿舎として使用されたのではないだろうか。
- (1)前出竹内氏によると土地の測量や町割りの仕事にあたる先遣隊が仮陣屋とした。今は壊れてないが、正面の真ん中に黒光りする大黒柱があり、そこに木彫りの水野家のおもだか紋が掲げられていたという。直径39cm、厚さ7cmの重厚な家紋は今も私の家の保存されており、裏に北という字が書いてある。沼津城の本丸の北側に掲げられていたものと云われている。



藩庁舎、
医局跡
江戸練馬場跡

↓ 御殿跡

藩主野台字真
と現況



大寺道新坂



7) 謎多い菊間城縄張り — 明治4年廃藩置県、未完成で終わる

①明治元年10月ころ城地を菊間台と決定、築城工事が始まる。明治の新体制がスタートしたとはいえ、東北地方では戦乱が続き、この先まだまだどうなるかわからない。城作りは当初、前任地の沼津城をイメージした5万石城下の築城であったといえよう。

(1)菊間台はかつて古代豪族として村田川一帯を支配した「菊麻国造(くくまのくにのみやつこ)」の本拠で、台地はおおむね平坦、北野天神山、菊間天神山、東関山、姫宮など数十基の古墳が現存している

②菊間は海陸交通の要衝地・八幡に近く、村田川に接した比高20mほどの高台先端に立地する。迷うことなく即断できたのではないか。下記寺島家文書は招致活動の一端を伝えている。

(1)明治元年10月、八幡村名主連名から好次郎あて一札＝今般御陣屋御取り立てに相成りやにつき、右の段たまたま御取り合わせの儀、御頼み申し上げ候ところ、御聞き済み下しおかれ(中略)しかる上は諸入用何ほどにても滞りなく出銀仕るべく候(経費は心配なく菊間?への招致活動を進めてほしい)

③菊間城は菊間台地全域におよんだことは確実だが、図面や記録もなく工事の概要は不詳。寺嶋家や近郷村々の名主文書に含まれる可能性もあり、引き続き重要課題といえる。

④鶴舞藩など同時期房総地方に転封された他藩とくらべ工事の遅れがめだった。

藩の財政事情もあったが、時勢の推移を見極めたことも重要な要素となった。

忠敬は江戸に留まって中央の動きを見定める。明治2年1月、薩長土肥の4藩主が連名で「版籍奉還」を願い出、2月諸藩主もこれになった。版籍奉還が認められ旧藩主に藩知事が命じられたのは6月、こえて明治4年7月「廃藩置県」が断行された。

(1)「版」は領地、「籍」は人民をいう。藩も領主もない。明治維新の第1ステップといえる

明治2年1月国替えの途についた忠敬が江戸に留まったことと築城工事の遅れは無関係とはいえない

⑤菊間築城はこうした時代背景の中で始まった。中央の動きをみながら居城作りも進めるといふ、青信号から黄信号へ、テンポダウンしていったことが想像できる。

⑥明治4年7月廃藩置県、藩庁の建築は土地を造成し、土台を回した段階で中止となった。

⑦明治維新時点での工事進捗状況は

藩主邸(字台ほか敷地およそ1,500坪)＝明治4-2上棟) 御殿、庭園、土塁、空堀(古写真参照)

隠居御殿(字柳谷＝明治2年?) 御殿、庭園、土塁、空堀

藩庁舎(字雲の境＝工事開始後中止)

公がい(仮藩庁舎?) (場所?＝明治3-12上棟)

医局(字雲の境＝明治2年?)

松翁稻荷(字雲の境、忠霊塔の地＝明治元年12月浜町下屋敷から移築)

藩校明親館(字向原、小湊バス折り返し地?＝明治3年)

大手新坂(字座主窪＝明治3-7)

水沼(濠)(字下北戸＝明治2年ころ)などであった。

(1)菊間藩士岡田程八日記、ある水野藩士の生活記録＝藩庁の建築に先立ち、そこには壮大な層塔を建てた。

その最高層には時鐘を取り付け、一振すれば村内ことごとく時報を感知するなどの装備を具備していた。雲の境には2階建ての医局も建設されていたがこの建物はのち菊間村役場として明治33年10月の暴風雨の日まで用いられた。

(2)深山家文書、菊間藩御用覚＝明治3年12月17日。去る15日御公がい御上棟につき郡中村々御備餅1組ずつ下し置かれ候あいだ、明後19日四つ時印形持参致し遅延なく割元会所へ御出張なられべく候

(3)都道府県庁舎、その建築史的考察＝(千葉県庁舎は)旧菊間藩の藩邸を移築し、手を加えたものという説があるが、(中略)「木更津県建屋」がこの菊間藩邸に該当すると想像されるが、先の文言では材の転用にとどまったとみるべきだろう。

8) 次回は菊間城縄張りを現地に探る

①菊間城は「四神相応」の原則に則って築城されている。次回「現地巡見」では、本丸、2の丸、3の丸、新旧大手道、藩士邸など、忠寛の胸中に描いた縄張りを想定したい。

協力＝飯香岡八幡宮、千葉県文書館、市原市教育センター、市原の古文書研究会、八幡の石造物研究会
寺嶋千鶴子様、寺島滋夫様、瀧本平八様、竹内克様、佐野彪様、岡田家様

八幡史学館名所百選々々

沼津藩(譜代) 居城 静岡県沼津市



領地 駿河沼津
石高 五万石
席次 帝鑑問書
家紋 丸に立派湯紋
最後の藩主 水野忠敬

天狗党の筑波騒動を鎮圧するため、藩兵が出動する。尊王運動の影響を受けて、元治元年の暮に、五人の藩士が江戸の沼津藩邸を出奔した。五十川、神谷房次郎、庵地福太郎、高野善太郎、服部弁門である。彼らは沼津に立ち寄ったところを逮捕されてしまった。他に柔術指南役の柏崎又四郎も脱藩した。

神谷と庵地は入牢中に病死し、服部、五十川、高野は家臣としての勤めに励むようになって許された。

第二次征長が起り、慶応二年五月、藩主水野忠誠は上洛の供奉を命ぜられ、七月十一日大坂に着いた。二日後、老中に任せられ、直ちに征長軍の先鋒総督に就くことになり、八月十一日、広島に着いた。

將軍家茂は七月二十日、大坂城で病死したが、水野忠誠も九月十四日、広島で急死した。原因ははっきりしない。この死は内密にされ、遺骸を十月二十八日江戸に運び、ようやく死を公表した。

鳥羽伏見戦後の二月八日、先鋒総督府の使者として、熊本藩士一人が沼津へ来て、藩の重役一人を桑名まで差し出すようにと伝えた。これより前の五日に、三州大浜陣屋に詰めていた藩士の遠藤進八郎は、尾張藩からの勅王勸誘に対し、「何ごとによらず、尾張藩の指揮を受ける」という誓約をしていた。

二月二十九日、駿府に到着した先鋒総督は、藩主水野忠敬に甲府城代を命じた。忠敬は藩士二百二十六人と役夫三十人をひきいて甲府に行き、松代藩兵と交代して服務した。甲府は天領であって、幕府の旗本が甲府勤番として在勤していたから、旧幕軍がここに結集して東山道を進んで来る官軍を迎え撃とうという動きがあった。柴田監物ら旧幕臣もそういう動きの中の一つとして、甲州勝沼で松代藩兵と戦い、捕えられて、忠敬に引き渡された。また甲府には、旧幕府の勤番・小普請、与力・同心など総計四百三十人ばかりがいて身の振り方に困り、動揺していた。忠敬は笹子峠に一隊を派遣するなどして、旧幕軍の動静を把握することに努めたが、藩兵だけでは

弱体であるため、松代藩・掛川藩の援兵を得ることにした。

上総請西藩主の林昌之助忠崇ら百五十人は遊撃隊と称して、海路相模湾を横断して真鶴に上陸し熱海に出た。

伊庭八郎・人見勝太郎ら十五人ほどは沼津藩の探索の者に会い、土肥に退いた。一隊は小田原藩を説得して事をあげるよう努め、一隊は葦山に向かい、小田原領内に入った。沼津・小田原・田中・岡崎の諸藩が出て一掃につとめ、大目付山岡鉄太郎と石坂周蔵が箱根宿で説得を行ない、遊撃隊は水野忠敬の監視下におかれることになった。林昌之助ら二百二十人は、香貫村靈山寺とその付近の農家に分宿させられ、謹慎していた。彼らに合流した駿府勤番のものや、岡崎藩士五十五人も一緒であった。

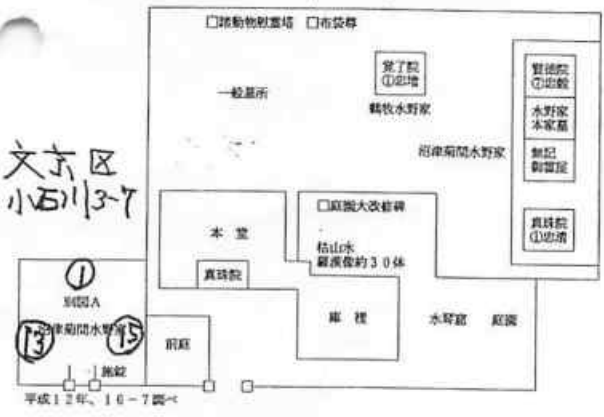
五月十九日、この謹慎中の林昌之助ら遊撃隊八十人はどは、おりからの大雨の中を脱走し、城下に泊まっていた軍監和田藤之助を襲撃した。戸倉村を越えて三島宿を通り、二十日には箱根関所を襲った。小田原藩兵は林らの脱走隊を迎え撃ったが敗れて、和睦した。小田原藩兵と遊撃隊は協力して、小田原城下に進んだ。二十一日には小田原藩ととも沼津に進軍してくるとの噂が流れ、沼津に帰って覚悟を定め、向背を決めよと命ぜられた。

遊撃隊は官軍に包囲されて敗北したが、忠敬は謹慎して、陳謝につとめた。老臣の吉田喜左衛門が責任を負って追放となり、忠敬は赦され、当分の間、三島宿関門の守衛を命ぜられた。

遠州報国隊、駿州赤心隊の影響を受けて、伊豆には伊吹隊が結成され、勳王グループとして総督府の道案内をつとめた。誘いを受けたのは三島大社の矢田部盛治で、二月二十二日から組織に乗り出し、百姓なども加えて総勢七十一人で結成した。葦山代官から小銃十五挺と槍三十五本を借りて、隊を整え、報国隊、赤心隊ともにかんりの働きを示した。

→ 芥末維新三百藩総見

院珠真寺提蓋宗野水

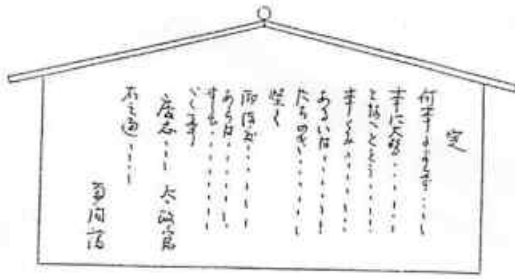


Genealogical chart showing family lines and names, including '忠清', '忠寛', '忠義', '忠寛 室'.

- 菊間水野家 5万石 (初代と菊間関係者)
- ①忠清 = 真珠院殿前布護署源朝臣廓誉全忠居士 (宝きょう印塔およそ 4 m = 正保 4年)
- ③忠寛 = 温徳院殿良誉肅恭実舒大居士 (⑩忠義と合祀 = 変形宝きょう印塔およそ 2 m = 明治 7年)
- ⑮忠寛、室 = 興徳院殿崇蓮社仁誉後翁忠敬大居士、従三位子爵源忠敬公、富岳院殿泰蓮社徳誉仁阿妙□大姉 (⑭忠誠、室と合祀 = " 明治40年)



岡田家所有の 水野家系図 (部分)



竹内克氏所蔵
「沼津城家紋」

谷馬一馬氏所蔵
「菊間藩高札」



八橋 國貞



三好 忠三郎

→「岡田程八日記」(巻頭部分)

Handwritten diary entries in vertical columns, likely from the diary of Kunitada Hagiwara.



忠敬が興した八幡銀行のお札

菊間藩
藩廳

右在堂早生免河取固
書面を通彦糸村中
大小之百姓入作之考
不殘立會無甲乙割合
来極月十日限急夜
可合旨候その也

Handwritten notes and signatures, possibly related to the historical document or the banknote.

本市教育センター所蔵「五井村明治3年年貢判付」

- 次回「現地巡見」の予定(雨天でも集合)全行程およそ4km=8千歩程度です
- 9時30分開講、およそ40分間、巡見コースと見どころなど説明
- 10時30分、八幡宿駅東口バス停から「菊間団地行き」乗車、北区バス停降車
午前のコース=東関山古墳、北野天神山古墳など
- 12時ころ~45分間程度、菊間コミュニティセンターで昼食
午後のコース=藩校跡、菊間藩庁跡、藩主邸跡、御殿跡、菊間廃寺跡など
- 15時00分ころ、菊間コミュニティセンター前解散
- 15時15分、菊間第3バス停(センター前)から「八幡宿駅行き」乗車、30分着

昼食、水筒など持参
雨天の場合、午前中八幡
公民館で講座

慶応4年(1868) 寺島家文書(仮24-65)
疎開先の地頭家族気づかう地頭所からの連絡

急便をもって啓上致し候、しからば去月二十一日
出立にてお迎えの人一人差し遣わし候ところ、その村方どもは
同日立ち寄り、すぐさま布施村へ立ち越し趣意にて
書状にて御申し越し下され候あいだ、右の段承知いたし候
もつとも雨天がちに日送りにて今まで一向沙汰
これなくはなはだ心配仕り候、かつまた昨今のところにては
船橋、行徳両宿へ惣(双)方の軍勢繰り出し
往来六ヶ敷(難しき)趣、右等の取り沙汰に途中より
布施村へ御引き返しの儀存じ候とは相心得候えども
何分御沙汰これなくいずれに布施村役人取り計らい
申し候ことや一向相分かりかね、同二十一日差し遣わし
申し候、使いの者もし二十六日出立?、御分家まで
飛脚の者兩人ともそのままにてこれまた手間取り
申すこと相わかりかね、右につき急便を差し遣わし候旨
その村方へ一□お頼み申し候、右使いの者すぐさま
布施村へ立ち越し申し候あいだ、当節柄迷惑には

これあり候えども、その村にて急使の者「」
御差し出し下され、もしまた急船便ござ候わば舟に
お届けにつきよろしく相成るべくはその村方へ仕立て飛脚
一人江戸表まで御差し下されべく、右へ委敷(くわしく)
布施村よりその村方までお越しに相成り候て、またまた
御引き戻りに成られ候や、またはその村方まで御着に
相ならず候て長柄山、長南辺りより
御引き戻り相なり申し候ことや、書面に委細
御認め何分にも急便にて御申し越し候分、この段
くれぐれもお頼み申し入れ候。右貴意をえべく早々。以上

(慶応四年) 閏(四)月四日

地頭所にて 石川政之丞

八幡村

名主 寺嶋好次郎殿

組頭 菊地藤右衛門殿

同 渡辺勘介殿

なおもつてこの便すぐさま布施村へ立ち越し申し上げ、
前文の次第につき、その村方よりくわしく
急便にて御申し越し下され候、この段くれぐれもお頼み申し入
るなり

明治元年（1868） 寺島家文書（仮2-69）
菊間藩新規陣屋取り立て願

恐れながら書付をもって願い上げ奉り候

上総国市原郡八幡村役人申し上げ奉り候、
今般新規御陣屋取り建ての儀、□□御願い申し上げ候とお
りもつとも右御陣屋御取り立ての場所、あら絵図面相添え
差し上げ奉り候とお、いささか御差し支えの儀ござなく候、
当村へ

御陣屋取り立て成し下され置き候よう願い上げ奉り候。以上

（以下欠落）

（慶應四年十月カ）

明治元年

（八幡村名主連名カ）

（水野藩仮役所カ）

明治元年（1868） 寺島家文書（仮2-69）

水野藩新規陣屋誘致諸入用について八幡村名主一札

御頼み申す一札のこと

今般御陣屋御取り建てに相成るやにつき、右の段
たまたま御取り合わせの儀、御頼み申し上げ候ところ御聞き済
み下され

「しかる上は諸入用何ほどにても滞りなく出銀
致すべく候、これにより頼み一札差し入れ申すところくだんの
ことし。」

名主 忠兵衛（印）

（明治元年）十月

同 儀兵衛（印）

同 久平（印）

同 佐右衛門（印）

同 源右衛門（印）

同 徳太郎（印）

御名主 好次郎殿

慶応4年(1868) 寺島家文書(仮24-65)
疎開地頭家族の引き戻し礼状

使いをもって啓上いたし候、しからば過日御家族様方御引き移り
の節、その村方へ御逗留に相成り候ところ、前後戦争の場合に
つき、

菊間村へ御立ち退きに相成り申し候由、飛脚の者立ち返り右の
儀申し聞け

候につき、にわか出立の御一統様御引き戻し候、そのみぎり立
ち寄り申して一応

挨拶申すべきのところ惣(双)方人数込み入り候て菊間村より
すぐさま御引き戻し

申し上げ候、右かれこれ御世話に相成りかつ舟への積み入れの
荷物も

来る十一日、御屋敷着に相成り申し候て、御安意下さるべく候、
かつその辺りは

追々静かに相成り候よう、風聞にこれあり大安心申し候、また
また別紙御荷物

御取り戻しに相成り候て、五郎助舟にも外舟にも髓(たしか)
なる舟に積み入れ、

御頼み申し入れ候、右はこのたび使いの者差し遣わし申し候て、
しかるべき取り計らいをもって下さるべく候、右貴意を得べく、
早々。以上

(慶応四年) 閏四月十五日

石川政之丞(印)

八幡村

名主 寺嶋好次郎殿

組頭 菊地藤右衛門殿

同 渡辺勘介殿

八幡文字館②追加資料

解説：市立の古文書研究会

未定稿(確定は市立の古文書研究会から募集)

御上々様ますます御機嫌よくござ遊ばされ
恐悦しごくに存じ奉り候、しからば

先般わざわざ熊吉殿をもって

お家族皆々様方お引き揚げ

相なり候おもむき、お迎えござ候ところ、四月二十一日

当村へ乱暴人ども四十人ほど

にて表向きは村役人どもへ強談(こわだん)

について金子掠み取られ、夜は

六、七人貫(抜き)身を携え、ことの外

村方一統恐怖まかりあり候につき、右の段

布施村御止宿候よう申し上げ候ところ

御見合せに相成り、しかるところ右乱暴人ども

は下総八幡村にて打ち取られ

召し捕り相成り候分もこれあり、またまた

御飛脚着につき、その段布施村へ

御通報申し上げべく候ところ、当月二日当村へ

御着に相成り、この段さよう御承引

下されべく候、はたまた先だつては

脱走御武家様方、船(橋)宿、

中山あたりへおよそ千人余り繰り出しに相成り、

官軍向かい合いおり候につき騒がしく候、右の段

申し上げ奉り候ところ、乗船御定に相成り、

昨三日、この船相雇い、乗り組み

沖まで出帆致し候ところ、大風にて

立ち帰り申し候、しかるところ三日、下総

八幡、船橋辺りにて戦争

に相成り鹿野墨より互いに早く

引き続き、それぞれ同所繰り出し、小前

百姓どもに至るまで人馬召し出され、農事

只今のところ出来申さずこの間

の人々当村通行に相成り誠に

大乱に相成り、御上様方

御宿相勤めまかりありべきにても安心

仕らず、この段□免□

申し上げ奉り候あいだ

「願い上げ奉り候。

(慶応四年) 閏四月四日

寺嶋好次郎

石川政之丞様

菊間城跡を歩く＝現地巡見

山岸弘明+佐倉東雄

本日の主要スケジュール

- 9時30分開講 巡見コースと見どころなど
- 10時10分 移動準備
- 10時30分 八幡宿東口から菊間団地行き路線バス乗車
- 10時40分 北区降車、巡見（午前の部＝北ゾーン）
- 12時00分 菊間コミュニティセンター着（昼食）
- 13時00分 巡見（午後の部＝南ゾーン）
- 15時00分 菊間コミュニティセンター前で解散
- 15時15分 八幡宿行き路線バス乗車

都合で車を利用される方＝コミュニティセンターに駐車、北区バス停で待つか、案内コースに沿って追いかけてください

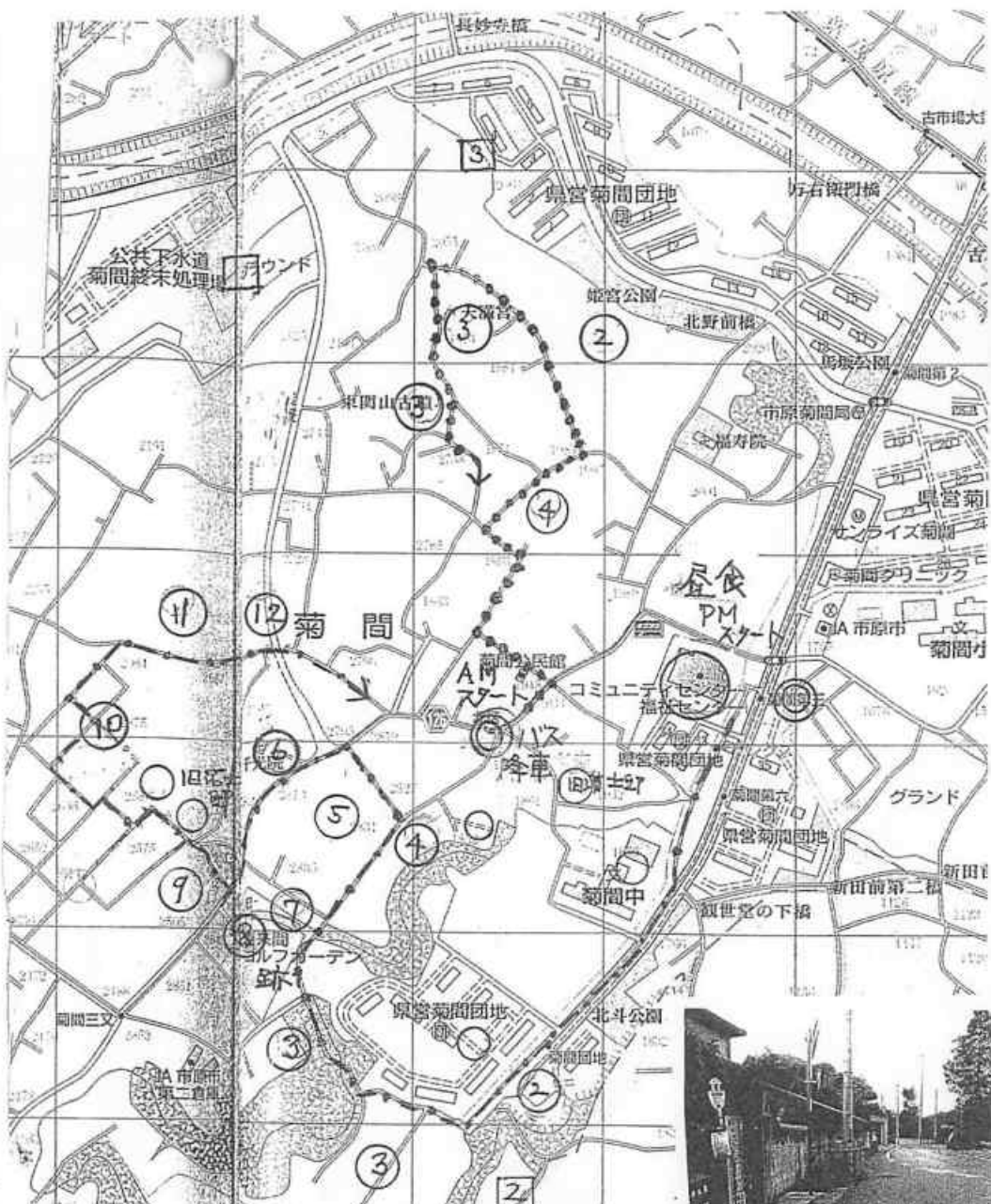
菊間藩の概要（詳細は第2回資料参照）

- 菊間藩庁舎（菊間城）＝市内菊間
- 入封、除封＝明治元年7月沼津から転封、4年7月廢藩置縣
- 領主＝水野忠敬50,000万石（沼津時代実高54,653石）
- 家格＝譜代、城主格、帝鑑の間詰め
- 所領（城付き）＝市原郡のうち23,000石（一部領地替えあり）
- 分領＝三河大浜13,000石、越後五泉11,000石、伊豆国7,000石
- 藩士数＝644人（明治6年調べ）
- 城遺構＝完成することなく終わり、遺構もほとんど存在しない

総距離＝午前の部およそ1.5km
午後の部およそ2.5km



水野忠敬の忠亮（子前）



あわただしい維新史の一駒



菊間藩庁跡

この中に菊間藩の水野忠敬（五相）とて、夏草の繁みに埋もれている。市原市に移った菊間藩の人たは六六〇人に及んだ。藩士は初め最前線の難れなどに住んだが、そのうち沼津の藩政を解体し、菊間、草刈、山本、大塚などに移された。沼津から八幡までは船運によった。

菊間の徳水台には、今もこの面影を色かに伝えている。武家風致や惣長屋が数軒、当時の面影を色かに伝えている。沼津まで出たという噂は、風流もあつたといふ。沼津まで出たという噂は、風流もあつたといふ。

駿河國津城主水野出羽守忠敬は、突然国替えの話があつたのは慶応四年五月二十四日のことである。それというものはこの年の四月十一日、徳川慶喜は江戸城を明け渡したが、このとき朝延では徳川の家名を立てる約束をした。田安亀之助（家達）が徳川の宗家を継ぎ、駿府城主として駿河國（静岡県）一門と連江、駿奥國において七十万石を賜わつたのはそれから間もなくのことである。駿河、遠江両國內の大名は、そのとき上総おとび、安房國（千葉県）に國替えされたが、

藩庁は菊間忠雄塔の西面に隣接する宇「雲の塔」におかれ、その最大な建物は、その最上層には時刻を告げる鐘が取り付けられ、鐘は村内の隅々にまで響いた。一風た。一風た。一風た。

本日のご案内コース AM ... PM
「広報いちはら」昭和41-8



スタートの北バス停

1) 沼津城に飾られていた水野家「おもだか紋」—— 八幡・竹内克家所蔵

① 明治元年沼津水野藩が市原に転封したとき、仮陣屋となった竹内家が所蔵。沼津城の2の丸御殿に掛けられていた、とされている。

- (1)丸に立沢瀉(たちおもだか)紋＝おもだかは水田や池沼に自生する多年草。くわいに似て小さい。葉面に隆起した模様がある。夏長花茎を出し、三弁白い花を付ける
- (2)竹内家は当時旅籠「藤田屋」であり、宿賃の代わりに拝領したものと考えられる。

2) 菊間藩主水野忠敬(ただのり)の書—— 古都辺・秋葉平家所蔵

① 濟其美不隕其名＝その美をなせるはその名をおとさず。源忠敬(明治8年または20年) 要旨＝代々父祖の業を受け継ぎ、善いことをして家名を傷つけない

- (1)中国の「春秋左氏伝」の一節から引用
- (2)教育勅語＝世々その美をなせるは(これわが国体の精華にして教育の淵源……)

② 旧藩士所蔵品＝菊間退去時に売却か、菊間新道に旧藩士目当ての古道具屋も生まれた

- (1)総和膳十人前、飯櫃湯桶入れ、文久二壬戌歳正月、柴田 明治21年10月26日、値3円50銭、古道具屋、菊間新道弁司
- (2)旧藩士名簿＝柴田令輔(慶応3年、側御用人)、柴田三太郎(明治4年、権大参事)

3) 八幡に城ができそうだった? —— 八幡・寺嶋家文書(追加)

① 水野仮役所あて(現地責任者＝前藩主水野忠寛)、陣屋取り立て願い(別掲)

(1)明治元年7月、八幡村での陣屋築城願い、すでに絵図面も提出している

② 誘致運動の経費負担についての八幡村名主連名一札(別掲)

(1)御聞きずみなどの御は藩を指すと考えられる。いま一步なのか、窓口となった好次郎に誘致経費を皆で持つことを誓約している



沼津城に村 水野家紋

↑ 水野家紋 ↓

手紙の写し... (明治元年)十月

→ 前回資料の集合写真
もと菊間藩主・水野出羽守忠敬
幻の殿様の写真発見

歴史的にも珍しい
市原、明治調べへに乗出す

明治元年十月カ

濟其美不隕其名

→ 旧藩士所蔵品
水野忠敬書
文久二壬戌年

恐れながら書付をもって願ひ上げ奉り候
上総国市原郡八幡村役人申し上げ奉り候、
今般新規御陣屋取り建ての儀、□□御願ひ申し上げ候とあり
もともと右御陣屋御取り立ての場所、あら絵図面相添え
差し上げ奉り候とあり、いささか御差し支えの儀ござなく候、
当村へ
御陣屋取り立て成し下され置き候よう願ひ上げ奉り候。以上
(以下欠落)
(明治元年十月カ)
(水野藩仮役所カ)
(八幡村名主連名カ)

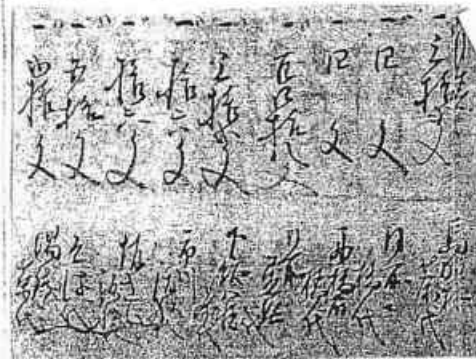
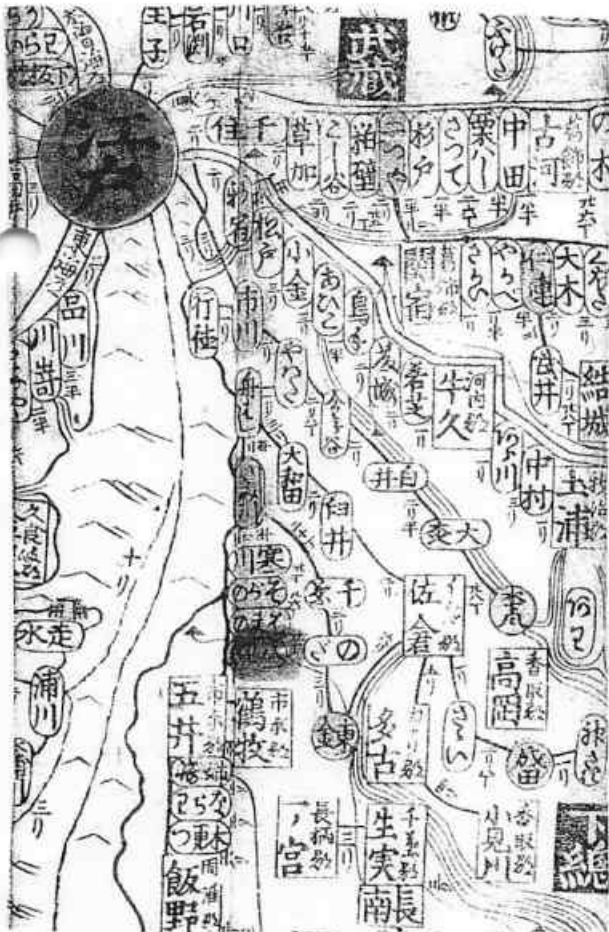
御頼み申す一札のこと
今般御陣屋御取り建てに相成るやにつき、右の段
たまたま御取り合わせの儀、御頼み申し上げ候ところ御聞き済
み下され
「一」しかる上は諸人用何ほどにても滞りなく出銀
致すべく候、これにより頼み一札差し入れ申すところくだんの
ことし。

- (明治元年)十月
- 名主 忠兵衛(印)
 - 同 儀兵衛(印)
 - 同 久平(印)
 - 同 佐右衛門(印)
 - 同 源右衛門(印)
 - 同 徳太郎(印)
- 御名主 好次郎殿

「文久3年=寺嶋由次郎、道中ならびに出府諸入用」

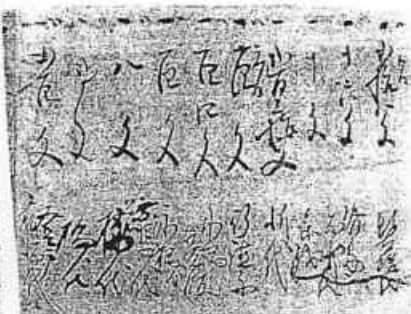
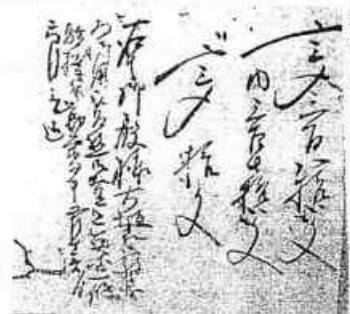
雨で巡見中止の時

- ① 旗本1,200石両番格、村上三十郎組名主、苗字帯刀。天保元年生まれ～明治2年没
幕末文久3年(1863)公用で江戸地頭所へ出張した時の経費メモ。
- (1) 旗本村上邸(地頭所) = 本所三つ目、現在墨田区緑4
- ② 文久2年、公武合体のため14代将軍家茂に皇女和宮が降嫁、しかし一方で尊皇攘夷運動が高まっていた。この年3月家茂は家光以来229年ぶりに上洛、孝明天皇は家茂を伴い賀茂神社に攘夷祈願する。村上氏もこの上洛に従っている。
- ③ 往路 = 5月13日早暁八幡出立、供の荷物持ち(半五郎)と2人か
- (1) 馬加(幕張)で休憩(茶代32文、橋代4文)
船橋で昼食(148文、船橋橋代4文)
下総八幡(本八幡)で休憩(茶代32文)
市川小岩渡船(関所)(16文)
逆井(中川、亀戸近く)で渡船(16文、そば代50文、湯銭、茶代20文)
夜、地頭所着
- (2) 1文 = およそ20円か
- ④ 出府中の主な支出 = 身だしなみ多く、総じてまじめ、浪費はない。
- (1) 髪結い5回(28文～38文)、湯銭4回(12文～20文)、たばこ、ちり紙、洗濯代、てんぷら(100文)、酒代(100文)、まんじゅう(100文)、すし(48文)、折代(謝礼かみやげ230文)
- ⑤ 帰り = 6月3日江戸出立(荷物持ちなしの1人旅か)
行徳から船(100文)
船橋で昼食(104文)、乗馬(100文)、橋代(8文、2文)
登戸(のぶと=千葉市)(夕食、酒代200文)、夜、八幡着



(部分)
寺嶋由次郎

江戸へ
道中



午前の部＝菊麻国造（くくまのくにのみやつこ）の里 佐倉 東 碩 さん

1) 古代（4～6世紀）村田川流域一帯を支配した菊麻国造 —— 菊間古墳群

① 菊間地区の古代は上総国市原郡菊麻郷で、「菊麻国造」が置かれた。菊麻国造についての記録は乏しく詳細はわかっていない。菊間に現存する古墳群は菊麻国造一族の墓とされ、周辺で縄文中後期の「実信貝塚」「菊間手永貝塚」や「条里制遺跡」などが発掘されている。

(1) 国造はほぼ1郡を領有した世襲制の地方長官、「大化の改新」後郡司となった菊麻国造の支配範囲は村田川下流域両岸とされるが、初期は千葉、成田など印旛沼周辺にまで及んだ可能性を指摘する考えもある

(2) 『国造本紀』（平安時代はじめ）＝菊麻国造。志賀高穴穗朝（たかあなほのみかど）の御世、无邪志（むさし）国造の祖の兄多毛比命（えたもひのみこと）の子の大鹿国直（おおかくにのあたひ）を国造と定めたまう

(3) 市原には菊麻国のほか、上海上国（かみつうなかみのくに）があった

2) 皇太子時代の昭和天皇が陸軍演習を観戦 —— 市指定文化財・姫宮古墳

① 姫宮古墳＝6世紀古墳時代後期とみられる未発掘、前方後円墳。村田川を望む菊間台地先端に立地。大正3年11月16日、近衛師団の房総における機動演習の時、当時皇太子であった昭和天皇が古墳上に立って観戦された。古墳上に登る。昭和天皇と同じ位置で村田川を望むが樹木多く見通しは悪い。

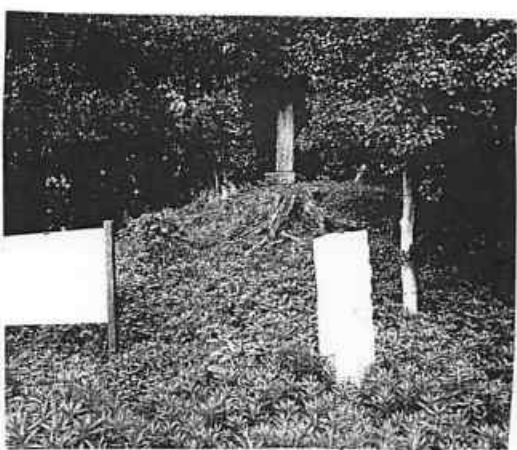
(1) 教育委員会看板（部分）＝市指定史跡、村田川下流の主要古墳、菊間古墳群位置図 姫宮古墳はこれらの（菊間）古墳群に属しています。規模は全長51m、前方部は高約3.6m、後円部高約3.9m、後円部径約18mを測ります。当古墳は今まで発掘調査がなされていないため、周溝の形や副葬品については不明ですが、墳丘の形態からみて古墳時代後期に造られたものと考えられています

(2) 皇太子殿下（昭和天皇）行啓記念碑

(3) 千葉県重要遺跡姫宮古墳碑



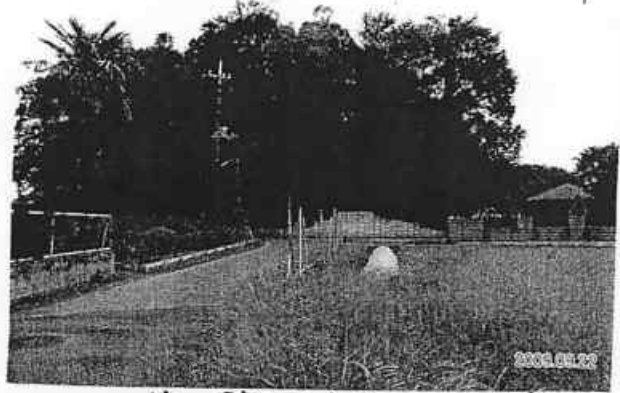
古代 周辺9国造



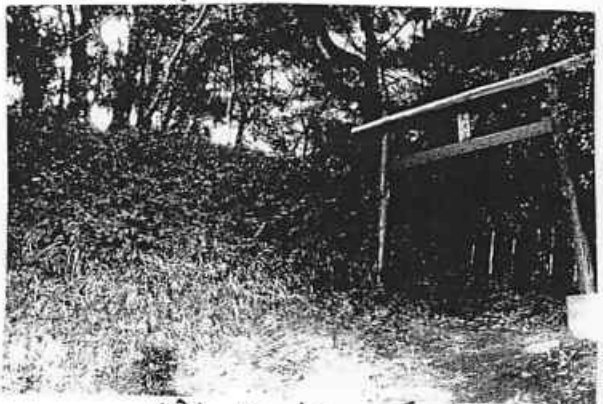
姫宮古墳



市指定史跡看板



北野天神山古墳



登り口、馬居



3) 平将門伝説も生んだ古墳群 —— 北野天神山、新皇塚、東関山古墳

① 菊間古墳群全50基のうち北東部村田川沿いの3基をめぐる

北野天神山(別称権現山)古墳=古墳時代中期末期と見られる円方後円墳、現在は前方部が削平され後円部の一部が残る。全長90m?、菊間古墳群最大規模だった可能性もある。未発掘。

伝説では平将門が菊間台に居城を築き、京都の北野を模して北野の天神山を称したという。近くに菊間天神山古墳、ともに天満宮の小祠を立てている

(1)教育委員会杭=菊間古墳群に含まれる古墳で、現状では径41m、高さ8mの円墳です。(前方後円墳の可能性もあります)建てられた時代は古墳時代中期と考えられます

② 新皇塚古墳跡(遠望)=古墳前期4世紀中ごろの40m級前方後方墳で、浅く広い周溝を回した。菊間団地造成にあたって発掘調査の上消滅。墳丘上に平将門の墓と伝承される宝きょう印塔「将門塔」が所在したが、国分寺仁王門前に移建された。

(1)将門塔=総高235cm、碑銘=応安第五壬子、十二月三日(将門とは一致しない)

(2)古墳発掘結果=鏡、石製腕飾り、玉類、鉄製武器、鉄製農耕具、壺などを出土

③ 東関山古墳=

(1)教育委員会杭=菊間地区を代表する古墳で、全長約61m、後円部径約33mの前方後円墳です。作られた時代は古墳時代中期と考えられます。

(2)千葉県重要遺跡東関山古墳碑

④ 菊間古墳群=前方後円3基、円13基、方33基、前方後方1基が確認されている

(1)広義の菊間古墳群は、菊間台の古墳群を天神山支群とし、大厩二子塚古墳、大厩浅間様古墳、潤井戸杉山支群、潤井戸小谷支墳、草刈支墳とする

4) 水野忠敬の仮本陣・元若宮八幡宮宮司邸 —— 「古民家」として再生中

① 根本家は若宮八幡宮の宮司を勤めた旧家で、代々国学を良くし、治胤、佳胤、胤満が従五位に列した。

② 明治2年、水野忠敬の菊間入封にあたって邸内を増改築して仮藩邸とした。

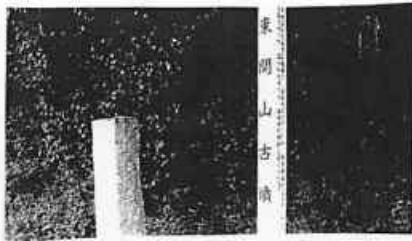
(1)水野忠敬は明治2年7月26日初めての国入り、根本家を仮邸とし4年2月4日藩主邸完成までの間居住された。一時千光院に居住したとする説もある

③ 根本家は後、東京に移られ長く空き家であったが、本年春に取り壊された。新築中の「菊間古民家邸」には旧根本邸の古材が利用されている。

5) 菊間コミュニティセンターで昼食

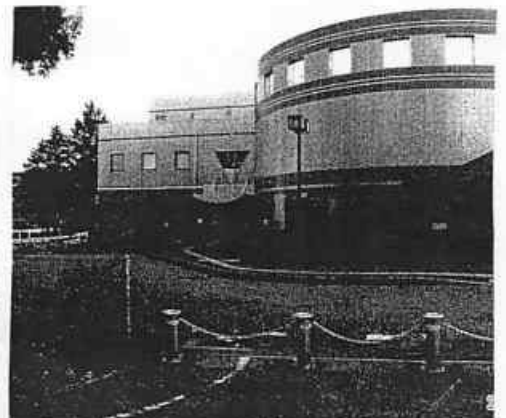
視聴覚室をお借りしています。好天なら周辺の日当たりも利用できます。

(1)近くはコンビニだけ、レストランや食堂はありません



←東関山古墳
菊間
↓コミュニティセンター

→古民家邸



.) 菊間団地はたんぼだった — 田部下

① 菊間団地の地はかつて字田部下などと呼ばれた田園であった。菊間藩の入封で村田川沿いの菊間小学校の地などに藩士長屋が作られて一時的に活況を呈したが明治になると旧藩士の転出などで元のいなか村に戻った。

(1) 一帯は菊間城からめ手。湿田は攻め手の進撃を妨ぐ防御ラインになる

② 県営住宅は昭和45年造成工事を始め、51年から入居、現在32棟を数える。

③ 菊間コミュニティセンターは平成4年地域住民と団地入居者のコミュニティの場として開館。福祉センターを兼ねている。

(1) 明治25年から昭和53年までの菊間小学校、児童数の増加にともない現在地に移転

2) 藩士子弟が学んだ藩校「明親館」 — いまは小湊バスのUターミナル

① 藩校は藩立の教育施設をいう。江戸後期には大半の藩が国元と江戸に藩校を開いた。

(1) 水戸の弘道館、佐倉の成徳書院、鶴牧の修来館、鶴舞の克明館などが知られている

② 「明親館」は沼津時代の文久年間14代忠誠が藩士子弟文武両道の教育施設として開設、明治元年菊間への転封に先立って日本橋浜町の江戸屋敷に移し、明治3年菊間村と大厩村の入り会い地13,000坪に校舎を新築して移った。

(1) 市原市史＝明親館の周囲には土塀を巡らし、その上に松樹を植え、規模すこぶる壮大なものであった。正面は庁舎の方を向いていた。校舎は96坪、中央に広い廊下がありその左右に3教室ずつ配し、中央廊下の突き当たりには職員室があった。時限は大太鼓で合図した。

(2) 7才以上の藩士は全員、藩士以外でも特に希望者には入学を許可した。朝五つから夕べ7つまで、学問は国学、儒学、洋学、礼式、筆道、作文、算術で、武術は兵学、槍術、剣術、柔術、馬術、砲術などを教えた。

③ 明親館からは明治「日本工業教育界の父」手島精一が出た

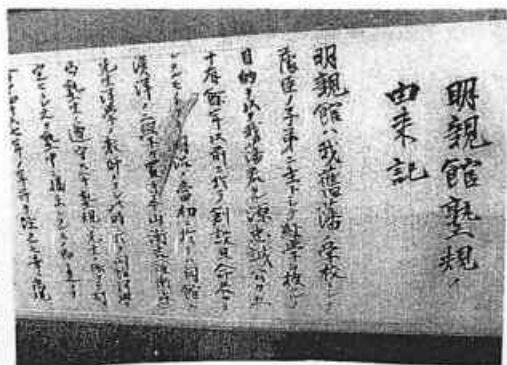
④ 廃藩置県で廃止、明治5年新学制発布で菊間小学校となり、25年まで使用された。

⑤ 裏山は藩校の馬場、維新後は菊間小学校の付属地とされた。

(1) 明治時代の小学校は田畑を持ち、貸地して年貢を取った



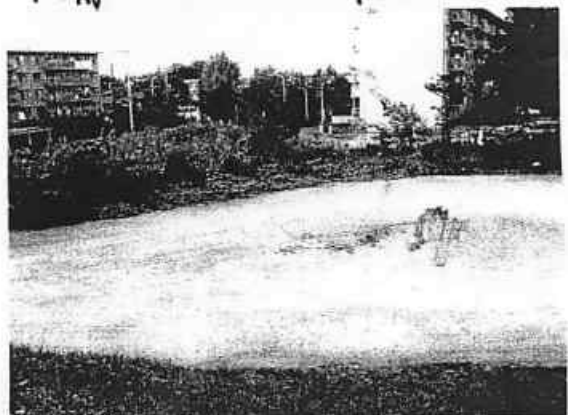
↑菊間団地 ↓明親館跡



由来記 ↑ ↓高打先生揮



手島精一



菊間中学校

3) 「四神相応」の地形で沼池を掘る —— いまも地形が判る(ホト池)

① 城の縄張りは中国の易学に準拠した「四神相応の地形」によって築かれる。
本丸南に「朱雀の神」宿る水濠(沼池)を掘る。地形が沼池跡を示している。

(1)四神相応=東は青竜、南に朱(赤)雀、西白虎、北玄(黒)武をいう

(2)沼池は辰巳台、山木台谷津地の川を人工的に堰止めた水濠、普段は田部下一帯の灌漑用水で、冬季の敵襲にはたんぼに水を張って備える

② 神徒墓地と若宮八幡宮神官=根本家の墓

若宮八幡宮神道関係者の墓所。神道のため鳥居もある。

(1)旧神官根元家の墓(碑文)=日章齊平先生之墓、明和二年歳在乙酉四月二十一日

上総州菊麻宮司故大炊頭従五位上平朝臣胤満碑(中略)、平先生は諱を胤満、号は日章齊、上総州市原郡菊間郷八幡の祠官なり、本姓は神服氏、その先の世事は生実の疾父名は安成先生、すなわちその次子なり、右近平重員の家に出嗣する(以下省略)

4) 前任地と比較できない質素な藩主住居 —— 仮御殿で終わる

① 藩主邸跡=

沼津城時代、城主は2の丸御殿(後の沼津兵学校)に居住、表向き、中奥、奥に分かれた壮麗な書院造り建築であったが、菊間城は比較できないほど質素な造りであった。

(1)水野忠敬はじめての国入りは版籍奉還後の明治2年7月、直前に藩知事就任をいったん辞退しており至近の明治が読めたこと、また経済的事情などで本格的な工事をためらったことが考えられる

(2)明治2~4年の3年間1,000石、15,000両の国家補助の収支は不明(鶴舞藩はある)沼津藩は国替え経費13,000両を前借りするなど藩財政は逼迫していた

② 藩主邸は旧名主田辺家を増改築したといい、茅葺き屋根平屋およそ50坪であった。

(1)岡田程八日記=明治4年2月4日、御住居御棟上げの式あり、一同出張致し候こと、ただし餅をまく

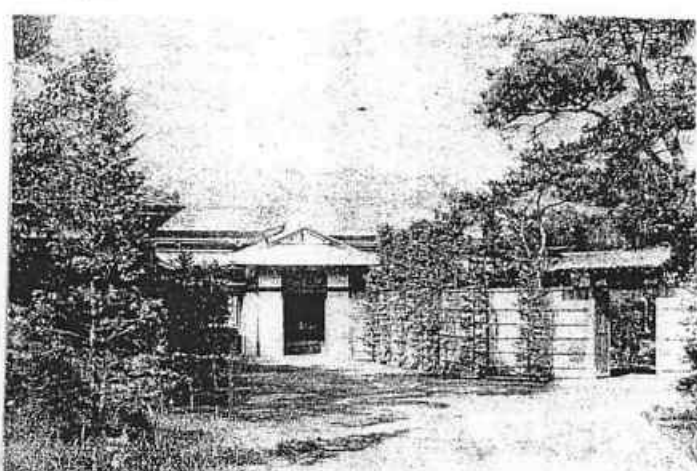
市原市菊間地域の遺跡と文化財

(2)菊間藩邸跡とその周辺(瀧本平八著、斉藤夫人談話)=新築した建物「離れ」は手前が6畳で押し入れが北に付き、奥8畳に床の間、違い棚が付きここに忠敬が住んだ

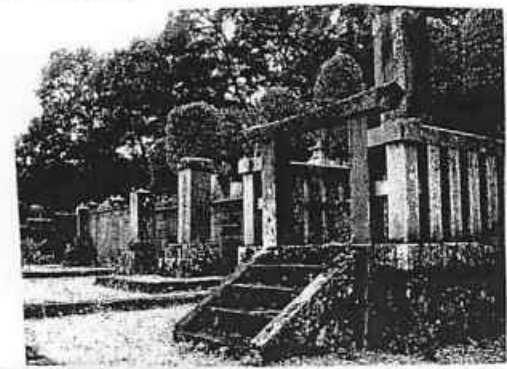
(3)急ガケを背負った立地は本丸にふさわしいが後出、忠寛御殿とくらべても狭すぎる。本丸地としては後出、藩庁舎後ろの方がベターだが?



水濠(沼池)跡



藩主邸跡



← 根本家の墓

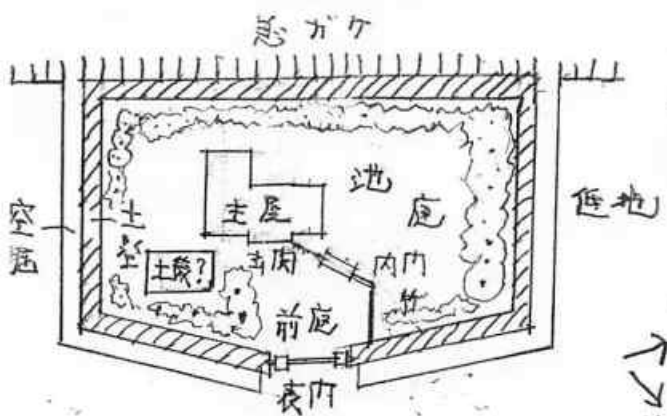
→ 仮後藩主邸



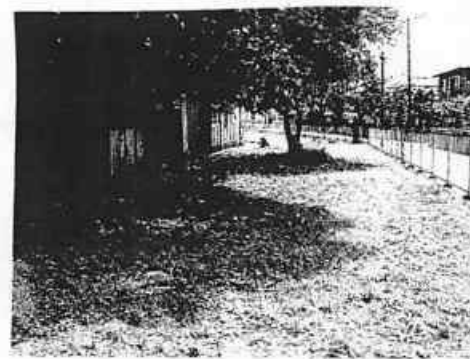
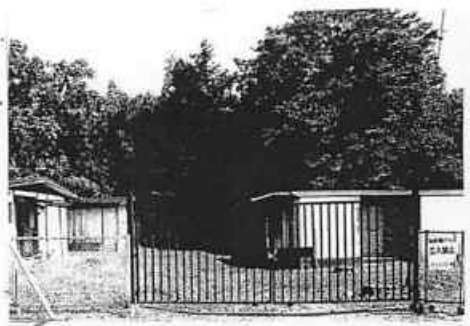
- ③ 現存古写真2枚参照（瀧本、大岩氏提供）いずれも門内から玄関を撮影不鮮明だが、前庭から続く玄関は簡単な軒千鳥破風で車寄せはない。母屋は切り妻屋根、こけら葺き？（少なくともかや葺きではない）、左手前に瓦屋根の建物がありそう。軒瓦の簡易瓦がみえる。
- (1)正門は写っていない。空堀、土橋、冠木門（長屋門？）か
- (2)右側塀は竹を結んだ建仁寺垣？。内門は棟門で風雅な造り、庭園は華麗な大名庭園が予想されるが現状から何うすべはない
- (3)明治維新後の水野家は東京渋谷の神山町に居住されたが、旧藩主邸も別荘とし、忠敬、忠亮父子や学友の秩父宮殿下などもたびたび訪れてテニスに興じたという。藩主邸は昭和40年ころに取り壊し、その後、不二サッシ社の寮や社宅になっていた。
- ④ 周囲に土塁、空堀を回した。埋め戻されているが土塁一部が現存している。
- ⑤ 物見台（櫓有無は不明）＝現在は大六天社、明治維新後菊間台地内から移築した。
- 5) 謎の空間は本丸御殿用地か2の丸か —— 主要郭であったことは間違いない
- ① 藩主邸から千光院までの空間（現在民家と畑）は？
藩主邸に引き続く本丸御殿地か、はたまた藩庁舎に連結した2の丸、^葺重臣邸などを予定したものだろうか。水野忠寛の縄張りを推し量ることはできない。
- (1)大手から3の丸、2の丸、本丸と続く梯郭式（連郭式）、総曲輪縄張りといえる

6) 石造物の宝庫 —— 城内に残った千光院

- ① 千光院は鎌倉末期の正応5年（1292）市原郡犬成の地で創建、長享2年（1488）、日泰上人に帰依した土気城主酒井定隆の「七里法華」の布告に抗して現在地に移った。明治元年の水野家入封の時仮藩邸を勤めた。新義真言宗。本尊大日如来。
- ② 山門前の石造物（境内には立ち入りません）
千光院庚申塔（宝永2年）庚申信仰の石塔、青面金剛像、三猿などを刻む
観音信仰巡拝塔（文政10年）西国と秩父の33観音霊場めぐり満願の記念塔
月光院巡拝塔（天保3年）元末寺、廃寺。四国88か所72番札所の移し
観音寺巡拝塔（寛政8年）〃 観音めぐり札所29番、四国71番札所の移し
東漸院巡拝塔（天明5年）元菊間八幡宮別当寺、廃寺。74番札所甲山寺の移し
千光院宝きょう印塔（享保7年）珍しい隅飾りのない角柱宝塔型
千光院巡拝塔（天明2年）四国88番札所大窪寺移し
- (1)境内に猿山庚申塔（移設）、小型室町末期五輪塔、無縁塔石仏群などがある
- (2)墓地に菊間藩士子孫の家の墓も5～6軒ある



藩主邸の推定図



→ 藩主邸の現況



↑ 千光院

7) 江戸藩邸から移築された松翁神社と明親館先生の碑

① 松翁稲荷神社=明治2年水野藩の入封にあたり、菊間に移転するが昭和はじめ、取り壊された。2本の平行する土塁と土壇が残っている。

(1)碑文=松翁稲荷神社跡、昭和六年十月、正四位子爵水野忠亮

(2)忠霊塔=内閣総理大臣、吉田茂書

(3)市文化財研究会史跡杭=菊間藩庁舎跡、老朽して判読はできない

② 高柳先生之碑 (題字は正五位子爵水野忠敬書=明治23年)

碑文 (要旨) =菊間藩士族として水野公に仕え、学を究め、廉潔成徳の人、藩校明親館で教授、菊間小学校で訓導 (教諭) を勤め、忠孝の行い、友愛の風を興した。明治22年東京の下谷で病滅、水野家と同じ小石川真珠院に葬る。

8) 天守代用櫓か、最上階の時鐘は村々に響いた —— 藩庁舎跡

① 広大な字雲の境一帯が藩庁舎予定地といわれている。

一説では藩庁舎は建前を終え、土台を回した段階で工事が中止されたという。

しかし一部の建物は間違いなく完成、使用された。

(2)公がい (仮藩庁舎?) =明治3年12月17日上棟、郡中村々へお供え餅下さる

(3)2階建て医局=明治3年3~4月ほうそう接種。医局は菊間村役場として明治33年の暴風雨の日まで用いられた。

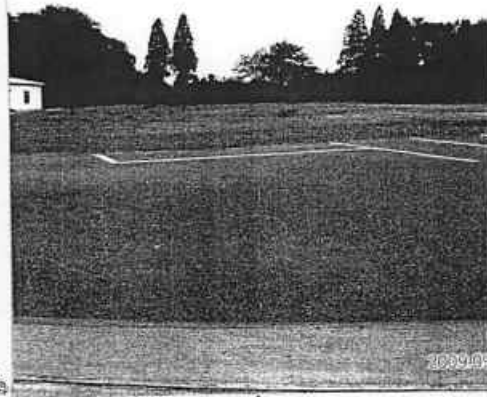
(4)2重または3重の鐘櫓? =時鐘を知らせた

② 「千葉市史」は、千葉県庁舎は旧菊間藩の藩邸を移築し、手を加えたとするが、「都道府県庁舎、その建築史的考察」は調達木材の転用、としている。

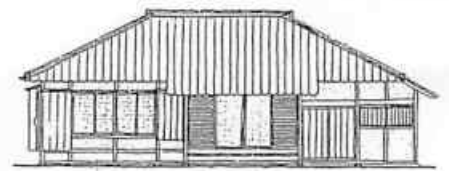
③ あわただしく始まった築城工事は完成することなく終わった。



松翁神社跡



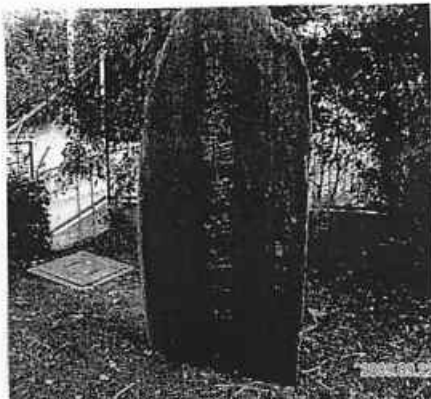
藩庁舎跡



渡辺家立面姿図



中級武士の家
図版7 渡辺家平面図



松翁神社碑



瀧本氏
提伎

道路



藩士長屋右写兵

9) 自然か人工か、巨大空堀と藩士長屋群 — 2の丸と3の丸を分ける空堀

① 藩庁舎側を本丸、2の丸とすると空堀を挟んだ先が3の丸。大殿御殿(下屋敷?)と一部町家を取り込んだ武家屋敷地=総曲輪ということになる。

(1)空堀は明らかに戦略的意味を持つが、天然か人工かは即断できない

(2)明治16年測量図では武家屋敷と民間家屋の識別ができない。

② 明治16年図の細長い家は藩士の棟割り長屋で、空堀周辺に集中している。

(1)3の丸台地の建設に邪魔にならない所に、長屋を仮設したことも考えられる

③ かつての滝本氏調査によれば、長屋はおおむね奥行き4間、1軒が間口3.5間の棟割りで2LDK、左半分が主人兼客用で玄関、式台、寄付、座敷8畳、右半分が家族用で8畳と台所、土間になっている。材木は沼津の旧宅を取り壊して運んだとされ、再利用の跡が残っていたという。前庭と自給自足のための畑が少し付いた。

(1)上級家臣は一軒家で中級以下は長屋、家禄と職務で区分された。

④ 空堀中ほどの渡辺家は中堅菊間藩士の子孫、菊間入封時は大厩で、後現在地の旧藩士小態総吉宅に移られたという。

(1)平成はじめ建て替え前図参照=長屋にくらべゆったり、式台、玄関の間も独立

⑤ 空堀を少し下がった所に銭湯やはたご、すしや、そばやなどの町家が立ち並んだ。

⑥ 徳永台の武家屋敷街=3の丸、かつての武家屋敷街だが旧藩士の大半は東京、静岡などに移転、菊間にはほとんど残っていない。

(1)中堅家臣・岡田家住宅(遠望)

「岡田程八日記」の筆者宅、多くの郷土史料を保存されていた。現在は県に。

(2)岡田家の旧邸は藩士長屋の最後の1軒であったが平成13年老朽化のため取り壊された

(3)明治40年旧藩士住所調査=旧藩士444軒中、東京39%、静岡15%(うち沼津は7%)、千葉21%(うち菊間9%)、現在は10軒未満

⑦ 屈曲(五の字道、升形)する道=市街戦想定した戦略、城下町にはよくある



下屋敷(忠寛邸)と本邸跡



武家屋敷街の現状



10) 空堀と土塁が巡った —— 大殿水野忠寛御殿跡は下屋敷か

- ① 細長い敷地は空堀跡、かつて周囲を土塁で囲んだが土塁は埋め戻されている。
- ② 大規模な敷地は通称「御殿」、先に菊間入りして築城工事を指示した水野忠寛が居住、本来下屋敷で別荘、本丸に事故ある時の予備屋敷だが、当時忠寛の隠居御殿。

(1)少なくとも御殿と呼べる建物が立ち、池泉を回した大名庭園があった。

11) いまも軒先瓦や布目瓦の破片が転がっている —— 菊間廃寺跡

- ① 古代菊麻の豪族「菊麻国造」の子孫建立か、光善寺廃寺などと同じ8世紀はじめ、上総国分寺の少し前か、未発掘のため詳細は不詳だが畑地周辺が門跡と推定されている。

(1)周辺の畑地や林に布目瓦や軒先瓦の破片が現在でも転がっている。

- ② 菊間転封時、家財、資材引き上げ道＝藩士らは沼津の旧藩邸を解体し、ダンペイ船に積み込んで伊豆半島を廻り、八幡宿の浜本に陸揚げ、さらに小船に積み替えて村田川を逆上り、菊間終末処理場前あたりから大八車で菊間台地へ引き上げたという。

(1)千光院裏側に通じる低地（空堀）が引き上げ道となった

- ③ スタート地点の北区バス停をへて菊間コミュニティセンターへ戻る。

12) きょう回れなかったこの他の菊間城関連 —— 機会みてぜひ確認してください

- ① 当初計画の大手道＝旧道バス通り八幡北町2、3丁目境の交差点から菊間へ向かい、市原八幡高校、スポレクパークを通り手永橋に通じた。菊間台入り口あたりが大手予定地であったが、大手門が完成することはなかった。
- ② 新坂、変更大手道＝明治3年に作られた新大手道。菊間出途と結ぶ。菊間城の実質的城下町であった八幡村との交通便をはかったものと考えられる。
- ③ 八幡銀行と能満開墾社跡＝維新後忠敬は旧藩士の生活に心痛した。明治11年資本金9万円余で八幡銀行を設立、明治15年には政府の援助を受けた旧藩士50家の「能満開墾社」を支援したりもしたが成功することなく終わった。

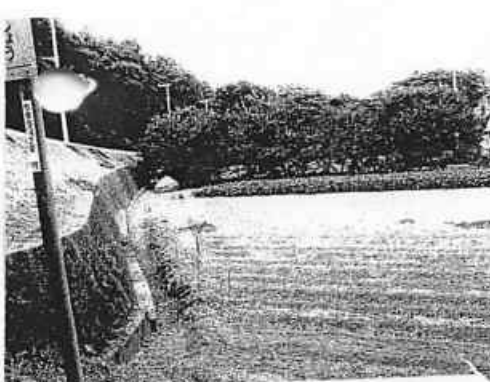
13) 菊間コミュニティセンター前で解散 —— エンディング

- ① きょうは大変お疲れさまでした。来年お会いできることを楽しみにしています。
- ② 「菊間第3バス停」時刻表（11時～14時台はありません）

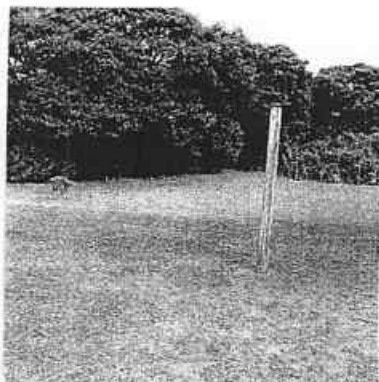
15時15分、30分、

16時00分、30分、

以上



資材引き上げ道



菊間廃寺



←新坂

→手永貝塚跡



←引き上げ船着場

35

市教辰公第 21-1 号
平成 21 年 3 月 3 日

山 岸 弘 明 様

市原市立辰巳公民館
館 長 石 井 孝 雄



平成 21 年度辰巳公民館主催事業の講師について (依頼)

早春の候、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

平成 20 年度主催事業につきましては、熱心かつ丁寧な御指導を賜り、誠にありがとうございました。

さて、本年度の主催事業におきまして「歴史散策」「中高年のためのすこやかカレッジ」を計画いたしました。

つきましては、公私御多忙の折り、誠に恐縮に存じますが、主催事業の講師として御指導くださいますようお願い申し上げます。

記

- 1. 事業名 歴史散策
 - 日 時 平成 21 年 6 月 26 日 (金) 講義
9 時 30 分～11 時 30 分
 - 平成 21 年 7 月 31 日 (金) バス研修
8 時 30 分～16 時 30 分予定
 - 内 容 歴史ある建物や下町の情緒が残る町並みなどについて学び、訪ね歩く。
 - 対 象 成人一般 40 人

- 2. 事業名 中高年のためのすこやかカレッジ
 - 日 時 平成 21 年 9 月 15 日 (火)
午前 8 時 30 分～午後 4 時 30 分
 - 内 容 第 6 回 歴史講座 (バス研修)
 - 対 象 高齢者 40 人

担当 朝緑佳子 (74) 8521

36

区分	事業名	部室名・対象・人数	募集開始	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
幼児・児童	たつみお話し会 10:30~11:00 こども読書室 10:00~12:00	和室 小学生以下	当日公民館へ	4, 18(土)	2, 16(土)	6, 20(土)	18(土)		5, 19(土)	3, 17(土)	7, 21(土)	5, 19(土)	16(土)	6, 20(土)	6, 20(土)		
	たのしい人形劇 14:00~15:00	視聴覚室 小学生以下	当日公民館へ	11(土)	9(土)	13(土)	11, 25(土)		12(土)	10(土)	14(土)	12(土)	23(土)	13(土)	13(土)		
	こどもまつり 9:30~12:00	研修室・会議室・体育室 小学生以下	当日公民館へ				25(土)										
	チャレンジ教室	タグラグビー (全16回) 9:30~11:30	基ラト(雨天体育室)小学生30名	3/18	19(日)	17(日)	7, 21(日)	12(日)		6, 13(日)	4, 18(日)	8(日)	6, 20(日)	17(日)	7, 21(日)	7(日)	
		卓球(全18回) 9:30~11:30	体育室 地区の小学4~6年生 50名	一般募集なし	25(土)	16(土)	6, 20(土)	4(土)		5, 19(土)	3, 17(土)	7, 21(土)	5, 19(土)	16(土)	6, 20(土)	6, 20(土)	
		クリスマスケーキ作り 13:30~15:00	調理室 小学生 30名	11/18									6(日)				
		書初練習(全2回) 9:30~11:30	研修室・会議室 地区の小学3~6年生 30名	一般募集なし										25(金) 26(土)			
	夏休み体験教室	料理 9:30~12:30	調理室 小学生各30名	6/18				22(水) 23(木)									
		科学工作 9:30~11:30	研修室 小学生 30名	6/18				29(水)									
		七宝焼 9:00~11:30	研修室 小学生と希望する親 30名	6/18				30(木)									
絵手紙 9:30~11:30		研修室 小学生と希望する親 30名	6/18					10(月)									
一日図書館員 9:00~12:00		図書室 小学3~6年生各4名	一般募集なし						夏休み期間中予定								
英会話で遊ぼう(全6回) 9:30~11:00	視聴覚室 小学1~3年生 24名	9/18								17(土)	21(土)	5(土)	16(土)	20(土)	20(土)		
親子	くまの会 ~12:00	視聴覚室 1歳3カ月までの親子	当日公民館へ	9(木)	14(木)	11(木)	9(木)		10(木)	8(木)	12(木)	10(木)		18(木)	11(木)		
	親子教室(全6回) 10:30~12:00 10:30~11:30	視聴覚室 2,3歳児とその保護者 24組	4/18		12(火)	9(火)	14(火)		8(火)	13(火)	10(火)						
	親子ふれあひフェスタ・たつみ 10:00~12:00	体育室 幼児と保護者	当日公民館へ							29(木)							

区分	事業名	部室名・人数	募集開始	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
高齢者	中高年のためのすこやかカレッジ(全6回) 9:30~11:30 8:30~16:30バス研修	視聴覚室・体育室・館外 40名	3/18	オリエンテーション、講話「とまらない振り込め詐欺に注意」 21(火)	「歌おう」 19(火)	「筋力トレーニング」 16(火)	「人権講話」 21(火)	「租税教室-相続税と贈与税」 18(火)	バス研修 15(火)							
	シルバー歌謡教室 9:30~11:30	視聴覚室 各40名	5/18 9/18			22(月)				19(月)						
一般成人	健康体操(全2回) 9:30~11:30	体育室 30名	4/18		13, 27(水)											
	「くまの会」のための書道入門(全6回) 9:30~11:30	研修室 24名	5/18			1, 15(月)	6, 13(月)	3, 24(月)								
	歴史散策 9:30~11:30 8:30~16:30バス研修	視聴覚室・館外 40名	5/18			26(金) 講座	31(金) バス研修									
	太極拳体験(全6回) 9:30~11:30	体育室 50名	8/18						14, 28(月)	5(月)	9, 16, 30(月)					
	古典文学教室(全6回) 9:30~11:30	視聴覚室 42名	9/18							20(火)	17(火)	15(火)	19(火)	16(火)	16(火)	
	郷土の歴史を訪ねて(全2回) 9:30~11:30 8:30~16:30バス研修	視聴覚室・館外 40名	9/18							28(水)		2(水) バス研修				
	七宝焼体験 9:00~11:30	研修室 20名	1/18											22(月)		
	お菓子教室(全6回) 9:30~13:00	調理室 24名	4/18		21(木)	4(木)	2(木)		3(木)	1(木)	5(木)					
	男のはじめて料理塾(全3回) 9:30~13:00	調理室 20名	5/18			24(水)	15(水)	26(水)								
	プロから学ぶ中華料理 9:30~13:00	調理室 24名	8/18						25(金)							
シェフから学ぶクリスマスのとっておきレシピ 9:30~13:00	調理室 24名	11/18									12(土)					

◎講師及びその他の都合により変更になる場合があります。

◎詳しい内容につきましては、広報「いちばら」毎月15日号、ホームページ、辰巳公民館内掲示板または窓口でご確認ください。

江戸東京歴史散策

・平成21年6月26日(金) 歴史散策の講座



平成21年7月31日(金) バス研修

辰巳公民館発—湾岸幕張P・A—首都高—東京都

8:45

10:30

水道歴史博物館—憲法記念館(昼食)—旧司法省赤レンガ庁

~12:10

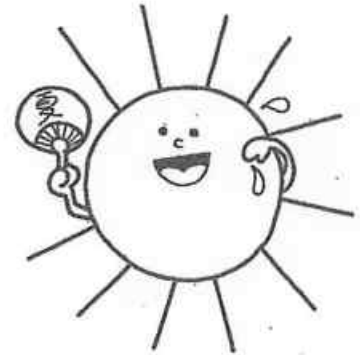
12:30~13:45

14:00~

舎—湾岸幕張P・A—辰巳公民館着

4:45

16:45



講師 山岸弘明先生



(辰巳公民館 74-8521)

担当 篠原



- ①6月26日(講座) = 江戸城と大江戸八百八町
- ②7月31日(バス研修) = お茶の水、霞が関などに江戸東京を訪ねる



太田道灌



徳川家康



徳川義忠

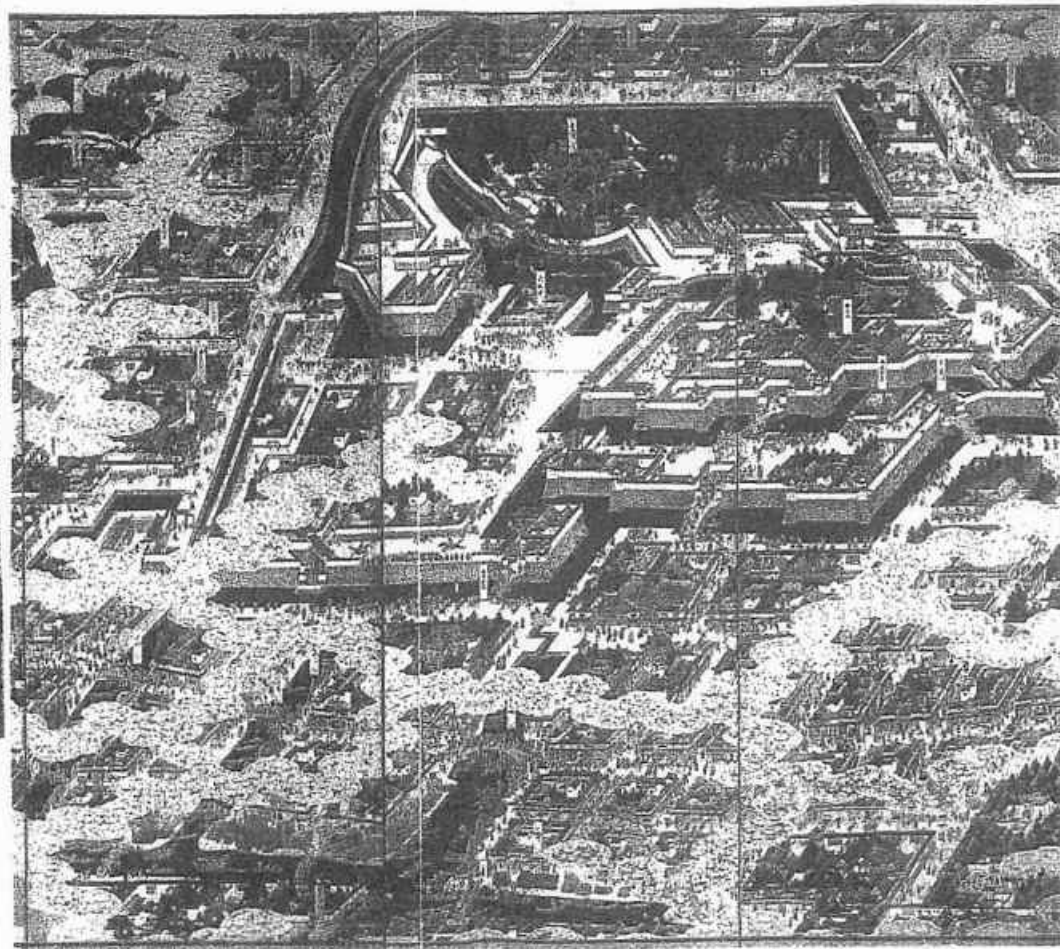
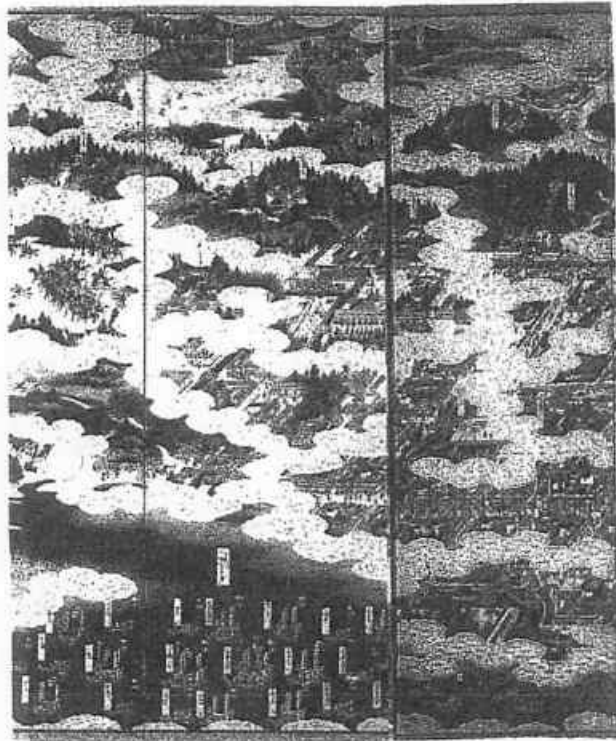


徳川家光

- 1) プロローグは「江戸図屏風」と「江戸大絵図」から
江戸図屏風=寛永ころ1624~(③代将軍家光代)
作者不詳(国宝、国立歴史民族博物館蔵)
- (1)6曲1双、各扇162×366cm。金地著色(極彩色)本間屏風
- (2)寛永はじめころの江戸市街(寛永11年の絵構え工事を反映していない)
- (3)豪華絢爛、江戸城天守閣、黄金に輝く外様雄藩、御三家御成門
活気あふれる日本橋、町人の暮らし。4,983の人物と2,546の建物を描く



「花の大江戸八百八町」人口100万、ロンドンしのぐ世界最大都市・江戸



後楽園	寛永寺 不忍池	板橋 浅草 川越
-----	------------	----------------

右隻6扇 5扇 4~1扇



富士山 品川	増上寺	目黒 愛宕山 新橋	山王 霞が関 日比谷	吹上 西の丸 日本橋	北の丸 江戸城 本丸
-----------	-----	-----------------	------------------	------------------	------------------

左隻6扇 5扇 4扇 3扇 2扇 1扇

- ②江戸図鑑綱目=元禄2年1689年(⑤代將軍綱吉代)相模屋版、石川流宣作
 - (1)明暦元年(1655)の江戸大火は江戸城本丸以下、ほぼ全市を灰塵と化した。被害にこりた幕府は大規模な都市改造を実施する。江戸は人口流入が進み、飛躍的に膨張する。かつて武蔵と上総を分けた隅田川から先の本所、深川も江戸の一部となった。
 - (2)「元禄文化」華やかなころの江戸。人口100万を越え世界1の大都市に成長
- ③江戸大絵図=文政11年1828年(⑩代將軍家齊代)須原屋版、金丸彦五郎作
 - (1)「大御所時代」、將軍の奢侈な生活は財政混乱を招き治安は乱れる。江戸文化の頂点「化政文化」を出現するが、享樂的、頹廢的ともいえた
 - (2)江戸幕府はこの後、ペリー来航から開国、幕末動亂へと進むことになる

2) いまの千代田区と中央区全部が江戸城 — 日本最大の総構え城郭
 ①皇居=旧江戸城と知っている人が多い。間違いではないが正しいともいえない。正確には江戸城の一部、家康の隠居城として築城、最後に仮本丸となった「西の丸」。

主郭の面積(將軍居住空間=水滸含む)

本丸(皇居東御苑)	0.19㎦	西の丸下(皇居外苑)	
2の丸(〃)	0.12	大手前(大手町、一つ橋)	
3の丸(〃)	0.13	丸の内(丸の内、有楽町)	
西の丸(皇居)	0.33	(3)外郭	
吹上(吹上御苑)	0.69	(外桜田、霞が関、永田町、	
北の丸(北の丸公園)	0.34	神田、日本橋、銀座、新橋)	
合計	1.80		

- (2)現在の千代田区と中央区のすべてが江戸城だった
- ②江戸は長禄元年(1457)上杉氏の執事太田道灌が築城、天正18年(1590)に徳川家康が入府して拡張工事を行い、江戸幕府の首都として発展した。
 - (1)江戸幕府成立後の江戸城工事は諸大名に築城を命ずる「天下普請」で、慶長11年以後繰り返し行われ、寛永時代に完成した
- ③関東支配地としての「四神相応」の江戸城
 家康の江戸入りから慶長8年までは「四神相応」の都市計画原理を進めた

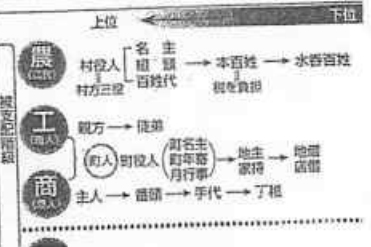
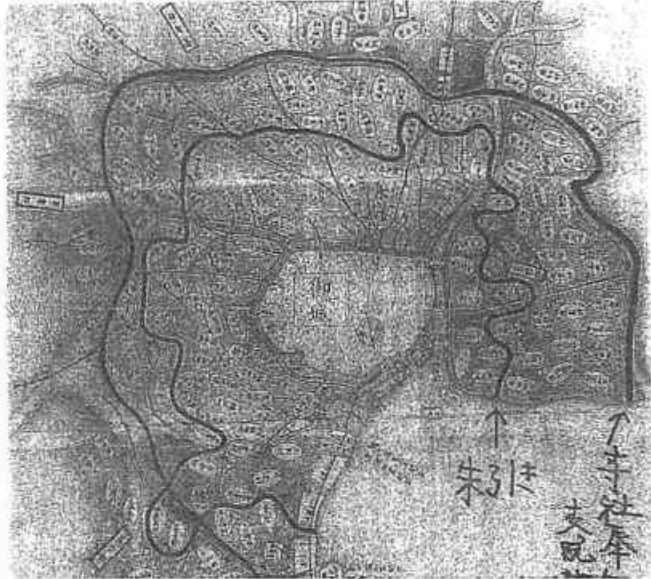
- ④日本の首都としての「の字」の江戸城
 江戸城が覇都となると規模拡大に迫られ「の字」右渦巻き状の都市計画に変更した。城域は北と西は中央線四谷、市ヶ谷、飯田橋、水道橋、お茶の水、秋葉原、浅草橋まで、南は赤坂見附、新橋、浜離宮、東は隅田川に及んだ。
 - (1)「の字」を城下に広げる縄張りは異例だが、市街地の拡大に理想的であった
- ⑤城内に町人町を取り込む「総構え」
 銀座や日本橋なども江戸城の一部、商人町を城に取り込んだ縄張りを「総構え」という。
 - (1)総構えは防御上の地形によるが、籠城時の自給自足対策とする考えもある
 - (2)総構えは小田原、大坂、岩槻、土浦など全国の多くの城にある
- ⑥だんとつ日本1の巨城。広さは大坂城、名古屋城の20倍にも達した。
 - (1)家康構築の初代慶長度天守は20mの天守台に5重6階、棟高48m(異説もある)織田信長の安土城天主、豊臣秀吉の大坂城豊臣天守のおよそ1.3倍、面積は2倍
 - (2)石垣は徳川家が再建した大坂城の方が材質、高さ、構築技術に優れる

- 3) 花の「大江戸八百八町」、人口流入で膨張しつづけた江戸
 - ①大江戸=広辞苑は「江戸の美称」とする。18世紀後半天明ころ登場、文化文政ころさかんに使われた。江戸は拡大、人口が増加した。大消費地としての江戸経済が一層伸長し町人文化が開花する。繁栄する江戸の様子を讃えている。
 - (1)大江戸や芸なし猿も花の春(小林一茶)
 - (2)御府内(図参照)は江戸の市域のこと。町地は町奉行、寺社地は寺社奉行、武家地は大目付、目付が支配したが範囲は異なり、行政区域が統一されなかった
 - ②八百八町=実数でなく広大な都市空間に多数の町人町が存在したことをいう。江戸後期武家地、寺社地を除きおよそ1,700町、八百八町どころか2倍はあった。
 - (1)寛永ころ町奉行支配地300町余(古町という)
 - (2)明暦大火後町並地を拡大、寛文2年674町、正徳3年933町
 - (3)江戸中期の延享年間(1744~48)1,678町、最大は後期天保14年(1843)の1,719町
 - (4)武家地や寺社地、町奉行支配地以外の町(品川、内藤新宿、板橋、千住や周辺農村地帯は数えられていない。実数は数千町といえる

江戸の土地分類(江戸後期) *江戸城に高野町通を境とし、東側が「江戸」西側が「町」

分類	面積㎦	比率%
江戸城	3.3	4.3
大名屋敷	27.8	35.5
旗本屋敷	18.8	24.1
寺院	11.1	14.3
神社	0.7	0.9
町家	16.3	20.9
合計	78.0	100

→ 町府内拾図



③人口100万を突破、世界最大規模の都市に成長

江戸時代中後期の人口は町民がおおよそ50万人で、武家の50万人、居神官2万人ほかを加え合計約130万人とされる、ロンドンをしのご世界最大都市であった。

(1)江戸の前期寛文元年、町方人口はほぼ30万人

(2)享保6年町人人口501,394人、男323,285人(64%)、女178,109人(36%)

天保3年545,623人、男297,536人(54%)、女248,087人(46%)

はじめ男が多く次第に男女差が縮まっている。しかし町人以外の武士や中間、奴、神官らは男社会で女が少ないことに変わりはない。結婚できない男も多かった

(3)ピークは嘉永6年(1853)574,925人、幕末慶応3年は53万余人

(4)ヨーロッパの主要都市はロンドン70万人、パリ50万人、ウィーン25万人

④江戸が膨張した原因は参勤交代や流入人口による1極集中にあった。

(1)江戸は諸国のはきだめ(萩生由来)

(2)地方で破産、離農した百姓や犯罪者などの無宿人も江戸なら住まれた

(3)「天保の飢饉」で百姓たちが大量に流入、幕府は「人別改め」を強化して強制的に帰農させたがその後も増加した(天保の改革、人返し政策)

4)江戸の町割り、町家と会所地

①江戸の町割り=慶長11年の第1次江戸城工事に始まり、寛永の総構え工事で完成した。

(1)江戸城直下丸の内まで入り込んでいた「日比谷入江」を埋め立て、日本橋、京橋が成立、中世からあった神田を加えた「江戸下町」が誕生する

(2)下町に駿府や上方など全国から商人や職人が移住し、「町家」が生まれた

(3)下町の語源は低地の町で、台地を「山の手」といった。のち江戸の拡大で下町は浅草、深川に広がり、昭和の終戦後世田谷、杉並も山の手と呼ばれるようになった

②江戸の「町割り」は京間(2m)60間四方の正方形街区を基盤に区画され、そのま中に作られた空間を「会所地」といった。

(1)町割りは街区ではなく、道路を挟んだ両側の町屋敷(20間)で町を形成した

③会所地は20間四方で、入会、共有地のこと。始め多くが排水場やゴミ捨て場であったがのち私有化が進み「裏長屋」が建った。享保(1716~36)ころ裏長屋が一般化した



↑会所地 ↓表通りの大店

↓取人町 ↑寛永の3ヶ会所地

5)八さん、熊さんが住んだ裏長屋の生活

①長屋は一連の狭い建物に多くの所帯が居住する共同住居をいう。江戸時代には大名藩邸や旗本屋敷の周囲に回した堀代わりの長屋(2階建てもある)、足軽などの下級武士長屋、庶民が生活した裏長屋などがあつた。

(1)藩邸の長屋は江戸詰めや参勤交代で江戸へ出張する藩士たちの官舎(社宅)

②江戸の大部分は武家地と寺社で、町屋は狭く江戸の面積の20%にも満たなかった。また下層庶民の居住区は限られたので、増え続ける人口で過密居住を余儀なくされた。

③町家は表通りが「町屋敷」を構える地主、借地で店をもつ商人が生活し、裏の会所地は裏長屋に住む店(たな)借人の町、奉公人や職人、裏通りで小商いする人、行商人、日雇いなどの一般庶民が生活した。

④貧富差が大きく、町方のおよそ71%を占めた中下層庶民(町方小前)は裏長屋でその日暮らしの生活を送った。

(1)裏長屋は地主が町屋敷内の土地をいかに活用して収益をあげるかという「町家経営」の一環。一般に地主の名前をとって「なに兵衛店」と呼んだ

(2)「大家」は地主の代理人、家賃を集め、「町触れ」の徹底や「人別帳」管理、木戸の開閉などの雑務にあつた。

(3)三百店に新造とさし向かい(当時の川柳=店賃の相場が300文)百安で首をくくった店へ越し(事故の長屋は100文安かった)

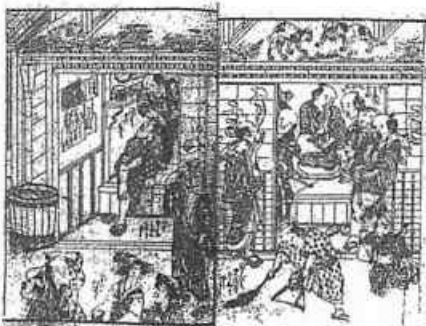
⑤租税は地主だけで、裏長屋の庶民は徴収されなかった。

⑥裏長屋は間口9尺、奥行き2間、よくて2間、3間。入って土間で1K、仕切りは小さなついで、押し入れはなくせんべい布団を隅に重ねた。隣は薄い壁1枚、プライベートはなかった。表通りから裏長屋への路地に木戸があり、夜間10時ころ施錠された。

(1)井戸とトイレは共同、奥さんたちの井戸端会議が弾んだ。おわいは肥料として売る。大家の小遣い

(2)風呂は公衆浴場の「湯屋」を利用、はじめ男女混浴で、寛政3年(1791)禁止、「天保の改革」で取り締まりを強化した。大人10文、こども6文

(3)食料品や生活用品などの買い物はポテフリや小商い、木戸番屋などを利用。ポテフリ

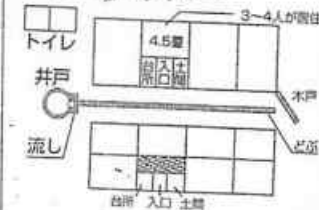


ポテフリ

←吹き出し

↓裏木の新造

←↓裏長屋



はてんびん棒をかついだ行商人、上水道の通らない本所、深川では水売りもあった
⑦上水道—家康は江戸入府直後、大久保藤五郎に命じて武蔵野井の頭池から流れを引いた「神田上水」を開かせ、承応年間、多摩川から「玉川上水」を通した。

- (1)次回バス研修の「水道歴史博物館」では、江戸上水道の歴史としくみ、遺物などを展示、また、井戸や下水を題材とした裏長屋を復元している。
- (2)裏長屋は(1)江戸東京博物館、(2)深川江戸資料館でも常設展示している

6) 火事とけんかは江戸の華、宵こしのゼニはもたない

- ①江戸は火事が多く大火だけでもおおよそ100件に達する。明暦の大火は冬の乾燥期、北西の季節風に、明和の大火は春の南風に煽られて江戸市中の大部分を焼失した。原因は燃えやすい木の家の密集と防火対策の遅れにあったことは容易に想像できる。
- (1)南町奉行大岡忠相は「享保の改革」で江戸市中表屋敷の瓦屋根使用を義務化し「町火消」を設置した。消防活動は「破壊消火」が中心であった。
- (2)江戸は焼け太りの町、経済は大火後の復旧工事で潤い、火事のたびに発展を遂げた
- (3)裏長屋の下層庶民たちも火事で仕事にありつき、火事で財産を失った。「宵越しのゼニは持たない」とする「江戸っ子」気質も火事と関係しているといえる

以上

(江戸東京博物館「模型でみる江戸・東京の世界」)



○明暦の大火 1657年、本郷丸山の芝草寺から出火し、江戸城を命の江戸の6割が焼失した。死者は5~10万人。大火後、江戸の都市計画がおこなわれ、防火帯や火越地などが設けられた。



○長屋の内部 多くの長屋は、幅9尺(約2.7m)、奥行2間(約3.6m)、面積3坪(約9.9m²)で、掃入のない台所兼用の土間つきの4畳半1間が標準であった。掘割地の中央には、どぶ板が通り、井



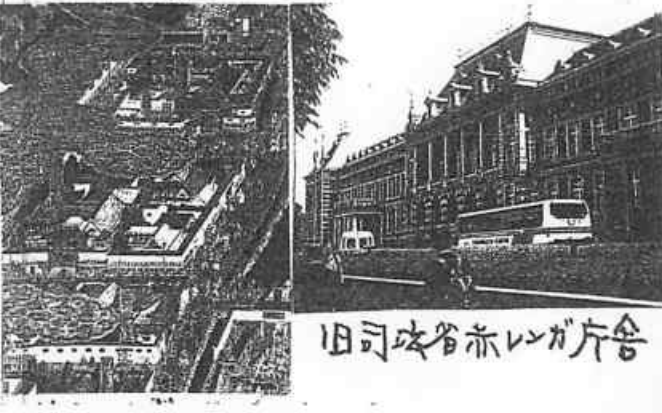
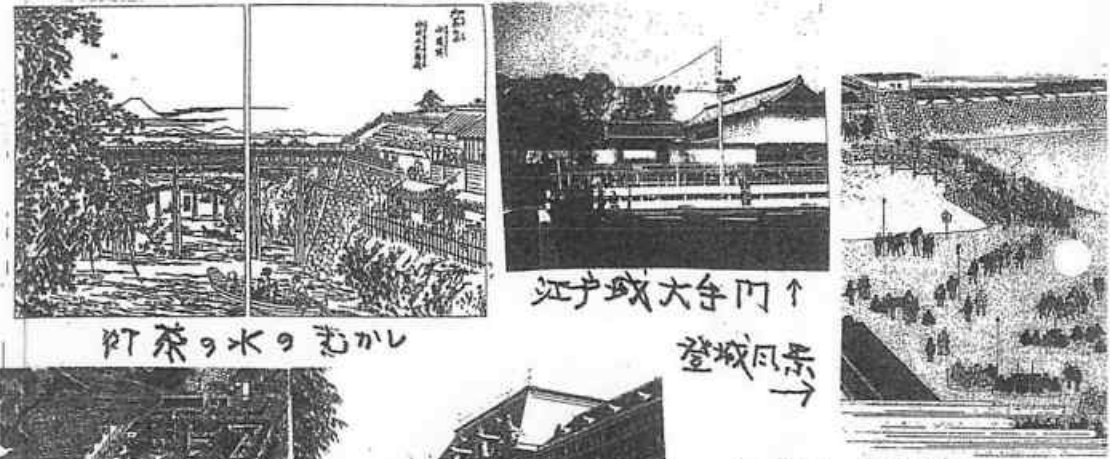
○上水井戸 木桶や竹籠などの枝箱で汲まれた上水は、枝箱のなかに溜められ、早の先に取りつけた桶で汲み上げて、長屋の住人が共同で使った。



灰小路と火の恩地

次回「バス研修」のみどころ

- 1) 江戸の上水道と裏長屋を体験 — 御茶の水の「水道歴史館」
 - ①元は「本郷竹町」=江戸城外、山の手で裏長屋に八さん、熊さんらが居住した。
 - ②東京都水道歴史館=明治水道創業以来の本郷給水所に開設。江戸時代はじめの玉川上水開削から近代上水にいたる江戸、東京上水道の歴史としくみを紹介。
 - ③井戸が中心の庶民の裏長屋を再現。配水池上の公園に石垣樋も移設復元。
- 2) 江戸城正面は石垣「威厳に満ちた表の顔」 — バス車窓から観察
 - ①大手門周辺の構えは堂々、壮厳、將軍の城らしい権威溢れる。
 - ②一方、桜田門を境に裏側は柔和、なだらかな緑の土塁は太平、平和の象徴。家康隠居城、西の丸は山里、江戸城の和戦両構えに注目する。
 - ③水濠が江戸城を囲む。源泉は自然の湧き水、堰止めして次の水濠へ落とす。
- 3) 加藤清正邸、井伊直弼邸跡 — 憲政記念館庭園で昼食
 - ①かつての加藤熊本、井伊彦根邸跡。清正是周囲に角櫓を上げ、御成門や櫓門を築く。
 - ②大老井伊直弼は登城途中、目の前の桜田門に倒れる。
- 4) 大河ドラマ「天地人」の上杉景勝江戸屋敷 — 法務省赤レンガ庁舎
 - ①秀吉5大老の1人上杉景勝は石田三成と「関が原の合戦」開き、家康に米沢へ左遷。
 - ②慶長8年人質差し出して江戸屋敷拝領、7,432坪を子孫引き継いで明治維新に。
 - ③明治28年司法省赤レンガ庁舎建設、関東大震災、東京空襲で被災するが復元。
- 5) 数寄屋橋、日本橋などをバスで巡る — 江戸城総曲輪を体験
 - ①外堀通り、銀座通りなどを回りながら江戸城の広さを確認。



旧司法省赤レンガ庁舎



↓ はなやかな緑の土塁

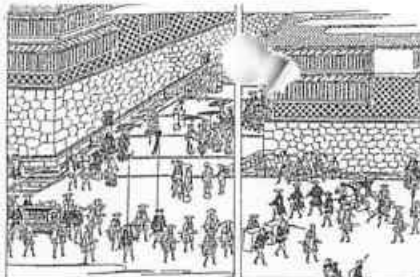
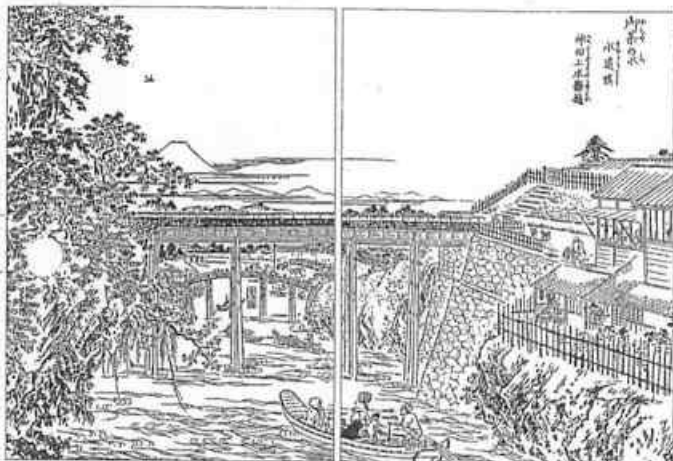
辰巳公民館主催事業「江戸東京歴史散策」

②バス研修＝お茶の水、霞が関などに江戸・東京を訪ねる

山岸弘明

本日の主要行程

- 8時45分 辰巳公民館出発
- 10時30分～ 東京都水道歴史館
- 移動車中から 旧江戸城大手門、皇居前、桜田門前
- 12時30分～ 憲政記念館＝国会前庭北庭園（昼食とも）
- 14時00分～ 法務省＝旧司法省赤レンガ庁舎
- 帰り車中から 御台場跡
- 16時45分 辰巳公民館着



かすみだて

憲政記念館

加藤清正→



桜田門外の変

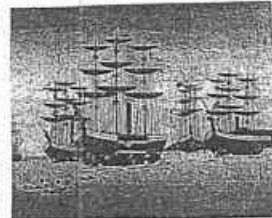
お茶の水かけ橋↑
東京都水道歴史館



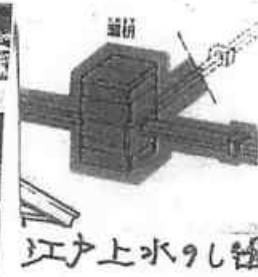
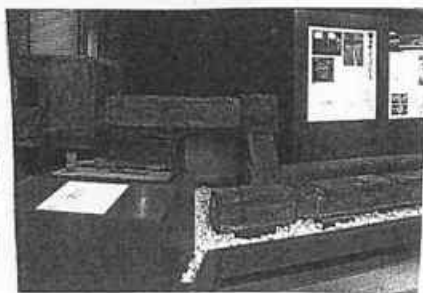
長屋の上水井



江戸城3英セット



黒船↑と台切



江戸上水のしづ



北村一輝



旧司法省赤レンガ庁舎



普段なにげなく使う「水道」にこんな歴史ドラマが隠されていました
「玉川上水ものがたり」は見逃せない

次回はもう一度。少人数でも音声ガイド（無料）で楽しめる。
江戸・東京くらしを支える水の道＝東京都水道歴史館
玉川上水＝玉川上水の歴史と現況、玉川上水2＝旧江戸市中散策絵図
水道歴史館の「パンフレット」をゲットしよう

→旧司法省



常盤貴子



お船

→

妻天木聡

平成21-7-31 「リピートできる」身近な歴史館。次回は家族や友だち誘って

木下田の十月五日

江戸の上水配管網に感動、くらしを支えた道

東京都水道歴史館 (10時30分~12時10分)

1) わかりやすい「水道の歴史」—— 見て楽しめる「生涯学習館」

- ① 文京区の本郷給水所、「東京都水道歴史館」に到着。
 - (1) 本郷給水所は水道水の供給センター、裏側「本郷給水所公苑」地下の巨大タンクには膨大な量の上水が貯蔵され、安心な水を都民に供給している
 - ② 平成7年開館の水道歴史館では江戸、東京上水道のあゆみと仕組みを紹介している。
 - ③ 1階ラウンジで映像による概要紹介の後、歴史館担当スタッフの案内で見学
 - ④ 2階フロア=江戸上水
 - (1) 江戸、東京の水道の起源は天正18年、江戸に入府した徳川家康が家臣に作らせた小石川上水(のちの神田上水)に始まる。のち江戸の発展により玉川上水などが作られ、江戸の人々の生活を支えた。2階展示室では江戸上水の歴史としくみを紹介している
 - (2) 江戸上水史、地図でみる江戸上水管網、お茶の水かけ樋、発掘された木管、「上水記」(都指定文化財)、玉川上水、江戸の給水
 - (3) 「玉川上水ものがたり」=玉川兄弟の開設までの努力と苦心を人形劇風に表現、大人から子どもまで楽しめる「感動編」。1押し「名作」をゆっくり鑑賞しよう。
 - ⑤ 1階フロア=近現代水道
 - 明治31年新宿の淀橋浄水場が通水を開始、東京の近現代水道が誕生する。以後、関東大震災や昭和戦災などの困難を乗り越えながら、増大する水事情に対応、世界有数規模の水道へと成長している。
 - (1) 淀橋浄水場のいまむかし、馬水槽、戦争と水道、水とくらしの移り変わり、現代の水道、小河内ダム、東京水道ネットワーク

2) 「はっさん、熊さんの世界」—— 裏長屋を楽しむ

- ① 前回講座の「会所地」「裏長屋」の続編。
- ② 水道歴史館2階に2軒長屋と3軒?長屋の一部と水回りを復元している。
 - (1) 江戸の碁盤目1区画(1町)の会所地は京間20間(40m)×20間=400坪(1,600㎡) 広さはこのおよそ2倍ほどになる



1階ラウンジ↓と展示↑ 玉川兄弟



上水記



玉川上水ものがたり

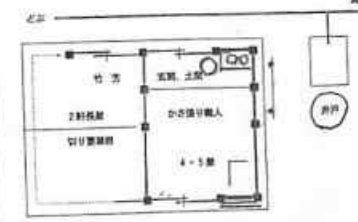
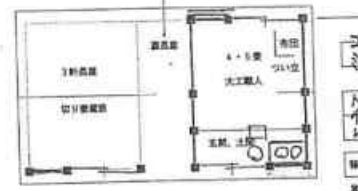


石樋の移築復元

- (2) 会所地ははじり有地で排水場、ゴミ捨て場などの荒地地であったが、江戸の人口増加にともなって私有化が進み、庶民の生活空間になった。華やかな表通りとは別世界、権利者の地主、家主が複雑にからみあったこの地に、小さな1軒屋や長屋が所狭し雑然と連なった。それぞれ家主の名前を付け「○兵衛ダナ」と呼ばれた
- (3) 住民は奉公人や職人、裏通りで小商いをする人、行人商、日雇いなど、町方の3分の2を占めた中下層(町方小前)は裏長屋で生活した(長屋タナ賃は300文くらい)
- ③ 木造平屋、長屋作り、屋根切り妻トントン(板)葺き、天井、小屋組はない。
 - (1) 柱は3寸角?、側面下見板張り、一部土壁、しょうじ戸、雨戸、基礎石?、土台
 - (2) 江戸は火事が多く家主もカネをかけない
 - ④ 1軒は「9尺2間」3坪で平均的、広い所は2間3間、3~4人家族が生活した。
 - ⑤ 復元した家は大工職人と傘張り職人(内職?)。家いっぱい傘が広がる。
 - ⑥ しょうじ戸を開けると玄関土間、内戸はなく一目で家中が見渡せる。土間は台所、下拵えと洗いは井戸端でやり煮炊きだけは家。水かめは飲料水、ずいぶん入りそう。
 - (1) 玄関=しょうじ戸、花びら、もみじ補修、ゲタ、ちりとり、ほうき
 - (2) 台所備品=カマド、なべ、釜、流し台、水かめ
 - (3) 台所用品=七輪、箱張、とっくり、ザル、網、すりばち、しゃもじ、へら、おろし金
 - (4) 生活用品=神棚、ついたて、ふとん、小たんす、火鉢、あんどん、提灯、衣裳こうり、裁縫道具、番傘、葉箱、茶びつ、ハエ張、お膳
 - ⑦ 井戸まわりは炊事、せんたく場、奥さん方の井戸端会議に花が咲いた
 - (1) 木桶、竹桶などの枝管で運ばれ井戸研に溜まった上水をつるべさおで掬った
 - (2) つるべさお、手桶、せんたくたらい、板、たわし、戸板、洗い張り
 - ⑧ トイレ、茶溜め(燃えるごみ)、稲荷祠
 - (1) おわい(肥料)は大家の小遣いかせぎ。連携して値段の吊り上げを図ったりもした

3) 張りめぐらせた上水道網—— 神田上水石樋(せきひ)を移築復元

- ① 神田上水碑、神田上水石樋の由来
 - (1) 神田上水は徳川家康が江戸入府時に大久保主水に命じて開削された
 - (2) 昭和62年文京区で発掘された神田上水道跡の一部、本管の石樋部分を移築復元
- ② 石樋の底は板、側面は石垣、蓋石を乗せ、覆土した。
 - (1) 底部120、上部150、高さ120~150cm、蓋石はおおよそ長さ180、幅60、厚さ30cm



り長屋の井戸↑



←会所の長屋

か

近世から近代、現代へ、国政中心地の変遷をバス車窓から

1) 江戸城正面は石垣「威厳に満ちた表の顔」—— 大手門周辺

- ①バスで次の「憲政記念館」めざす。途中バス車窓から江戸、東京を「歴史散歩」。
- ②中央線の走る神田川(旧外堀)を超えると旧江戸城内の外郭、大名、旗本邸跡が続いた。千代田通りから内堀通りへ、正面に大手濠、石垣が連なる。
- ③大手門=江戸城の正門、何者も寄せつけない戦う男の城のイメージ堂々、壮厳、將軍の城らしい権威溢れる。石垣、白漆喰壁が続く。
- (1)周辺石垣は慶長11年「江戸城第1期工事」で築く、その後積み替えがあり、どこまでが当時のものかは不明
- (2)大手門は太田時代からの正門、第1期工事で櫓門、元和6年伊達政宗が形形門に。伊達家は大手門建設の榮譽を担ったが出費も多く、延べ42万人、黄金2,600枚も
- (3)1月1日などの式日、1日、15日の総登城日の朝は諸大名の登城ラッシュで混雑した
- ④巽櫓、桔梗門、富士見櫓=「江戸城3点セット」はテレビ、映画の定番。
- ⑤西の丸下(皇居外苑)はかつて重臣、幕閣の町、いまは松林に。
- (1)皇居二重橋を遠望、元西の丸、將軍隠居城だが幕末、家茂、慶喜時代本丸になる。
- (2)慶応4年江戸開城で明治天皇皇居、京都から遷都し江戸を東京に改める
- ⑥桜田門=外桜田、霞が関と西の丸をつなぐ主要内郭門、保管旧材再建、重要文化財

2) 桜田門を境に裏側は柔和、なだらかな緑の土塁 —— 移り変わる景観を見やる

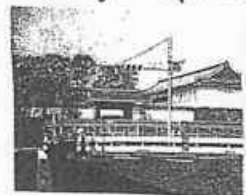
- ①西の丸は山里、江戸城の和戦両構えに注目する。
- (1)桜田濠は江戸城最大の景観、水濠と土塁の緑が美しい
- ②水濠が江戸城を囲む。源泉は自然の湧き水、堰止めして次の水濠へ落とす。
- ③正面に国会議事堂がみえるとほどなく憲政記念館に出る。



江戸城大手門↑



旧江戸城の
↓入城す明治天皇のし



↓皇居二重橋

→桜田濠



加藤清正が金匱(きんぎょ)の御殿を築き、井伊直弼は登城途中に暗殺された

憲政記念館(12時30分~13時45分)

1) つわものどもの夢のあと —— 憲政記念館、国会前庭北庭園で昼食

- ①憲政記念館=昭和47年開館、わが国の議会開設80年を記念、議会制民主主義の一般認識を深めることを目的に設立した。国会の組織や運営を資料と映像で紹介している。
- (1)残念ながら今日は月末休館日のため本館展示場への立ち入りはできない。ぜひ改めて開館日に来場ください。11月5日~27日「激動の明治国家建設」特別展示開催
- ②国会前庭北庭園で持参の弁当を楽しむ。四季の花が美しい。
- (1)時計塔、尾崎行雄銅像(憲政功労者)
- (2)日本水準原点(明治25年=都指定文化財)ローマ神殿建築にならったトスカーナ式
- (3)江戸の名水・桜の井戸(加藤清正の井戸=都指定旧跡)

2) ことごとく金貼り込み —— 加藤清正の豪華華麗な江戸上屋敷

- ①慶長8年ころ~寛永9年、加藤清正、忠広邸。
- ②加藤清正(1562~1611)=織田、豊臣、徳川初期の武将、尾張生まれ、母は豊臣秀吉の生母と従兄弟で幼時から秀吉に仕えた。賤が岳(しずがたけ)7本槍の1人、朝鮮出兵で勇名を轟かせ、関が原の合戦では徳川方で戦功を上げた。熊本54万石に進むが、死後の内乱で2代忠広が改易となった。
- ③歴博本「江戸図びょうぶ」にみる旧加藤熊本藩上屋敷(付箋は次の井伊掃部)
- (1)周囲に低い石垣、白壁長屋を巡らせ、角櫓を上げる。
- (2)表門=切り妻屋根大棟門(ことごとく金貼り付け)
- (3)檜皮(ひわだ)葺きの大女閤、殿舎は御成り御殿
- ④江戸はじめ、雄藩江戸屋敷は城作りと同じ、巨費を投じ豪華絢爛さを競いあった。

3) 万延元年、大老・井伊直弼桜田門外で暗殺される

- ①寛永9年熊本加藤家の改易で江戸屋敷は彦根井伊家に払い下げられた。以後明治維新まで歴代藩主が居住、寛永12年3代將軍家光の式正御成りがあった。
- ②井伊家では直澄、直興、直幸、直亮、直弼の5人が大老に進んだ。
- ③直弼は5か国条約の調印、安政の大獄をすすめたが、安政7年3月3日早暁雪の日、江戸城を目の前にした桜田門で水戸浪士らのテロ襲撃で横死した。現職大老の死は幕府権威の低落を招き、將軍家は急坂を転げ落ちるように崩壊していった。
- (1)藩邸眺望の地から皇居の森や桜田濠を遠望、直下桜田門が事件の地



加藤清正



江戸城の桜田門外



↓利回国会



←国会議事堂
↓水準原点



「天地人」の「直江兼統終焉の地」米沢藩江戸屋敷跡

旧司法省赤レンガ庁舎(14時00分~45分)

1) 「天地人」大河ドラマストーリー=これまでとこの先

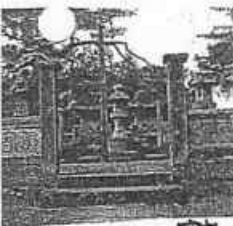
①上杉景勝(1555~1623)=弘治元年坂戸城主長尾政景、上杉謙信の実姉・仙桃院2男に誕生、父の死後母と春日山城に入り謙信の養子となる。性格は寡黙で厳格、ことに及んで決断力と行動力に優れた。武将としての資質に富んだ戦国後期を代表する名将といえる。

- (1)天正6年、謙信没後の後継争いでライバル景虎を下して相続、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と対峙しながら天下の形勢を窺う
- (2)天正14年、石田三成を通じて天下人・秀吉に接近、大坂城で臣従の礼をとる
- (3)文禄元年、秀吉の命を受け朝鮮出兵、釜山で前線の加藤清正らを指揮する
- (4)慶長2年、豊臣家5大老に就任(ほかは家康、前田利家、宇喜多秀家、毛利輝元)
- (5)3年、会津120万石に移封(秀吉の狙いは伊達政宗、家康対策、上杉謀叛回避)
- (6)5年、石田三成の反家康連合に呼応、関が原の合戦を開くが三成軍敗北で降伏
- (7)6年、米沢30万石に減封、かろうじて生き延びる
- (8)8年、人質を差し出して江戸屋敷を拝領(千代田区霞が関の現法務省=見学地)
- (9)元和元年、大坂冬の陣、夏の陣に徳川方として出陣、豊臣氏滅亡
- (10)9年3月20日、米沢城内で没、69才

よく偉大すぎた父謙信と比較されるが、存亡の危機を何度も乗り越えた「危機管理能力」は謙信を超えたといえなくもない。墓所は米沢市御廟、法号を覚上院殿法印権大僧都宗心という。

②直江兼統(1560~1619)=永禄3年長尾家の家臣・樋口兼豊長男に生まれる。景勝の5つ年下、幼くして近習となり春日山に移る。謙信没後本丸を占拠して景勝の家督を不動のものとした。以後名家老として景勝を支えた。

- (1)慶長3年、景勝の会津移封にあたり秀吉から米沢6万石(巻間30万石)を与えられる
 - (2)慶長6年関が原の戦いに敗れ、景勝は会津120万石から米沢30万石へダウン
- 大幅リストラを迫られた兼統は自らに大減封を課し「在郷」土族などで乗り切る。苦しみの中、治水事業、殖産振興に力をそそぎ、米沢藩の基盤を築いた。元和5年12月



Handwritten notes and signatures, including the name 豊臣秀吉 and other characters.

- 19日、震が関の米沢藩江戸屋敷で逝去、60才
- (3)妻お船は夫死後、嫡男景明も亡くすが養子を取らず、女ながらも藩政に携わる。自ら選んだ家督断絶は夫の遺志を貫いた究極のリストラでもあった
- (4)夫妻の墓は米沢・林泉寺にある。兼統考案の家型、まん中の四角は攻められた時積み上げて砦とするよう身分に関係なく同寸法とした

2) 江戸後期の米沢上杉藩江戸屋敷

- ①上屋敷=千代田区霞が関2-①法務省、7,432坪(慶長8年~明治はじめ)
中屋敷=港区麻布台1-⑤、⑥麻布小学校、外務省麻布公館、麻布郵便局、12,800坪
下屋敷=港区白金2-①、⑤の一部、三光起業ほか、4,732+2,602+1,901坪
- ②上屋敷は藩の藩主居所兼公邸、中屋敷は嫡子居所、下屋敷は別荘、時に隠居所に。別に蔵屋敷を置く藩も多い

3) 明治36年赤レンガ庁舎が完成、いまに伝える

- ①明治4年、新政府は周辺一帯の地を上地、跡地を「日比谷操練場」とする。
- ②明治21年東京市の都市計画「市区改正」が可決、明治28年「中央官庁集中計画」の一環として「司法省赤レンガ庁舎」が完成した。
- (1)初期設計はドイツ人建築家エンデ+ベックマン、縮小設計は司法省工事主任河合浩蔵
- (2)桜田門前に司法省、裁判所、海軍省の近代ヨーロッパ建築が相次いで完成した
- (3)大正12年9月、関東大震災ではびくともしない
- (4)昭和20年3月、昭和戦災で米軍B29の焼夷弾直撃、室内を焼失、黒くなったレンガ壁と石だけが無残な姿で残る
- (5)昭和23年、司法省は法務庁(現在は省)に変わる。応急復旧工事をへて再入居
- (6)平成3年、明治の姿に復元する工事開始、7年不死鳥のように蘇った
- ③赤レンガ2階建て、ドイツのネオ・バロック様式建築。
- (1)正面外観の見どころは壁面=赤レンガと白い花崗岩との対比、屋根=天然石スレート葺きの緑、鋭くのびる尖塔は明治建築のシンボル
- (2)内部見学は3階の法務資料展示室だけ。展示は法務資料と裁判員制度などが詳しい。第1資料室は旧司法大臣官舎大食堂、漆喰の壁に木製パネルの腰板、寄木張りの床、ドア回りのコリント式や装飾など、ドイツのルレサンス風意匠を凝らしている
- ④ベランダから桜田門周辺を一望、半円アーチ窓や丸く太い柱列がみられる。



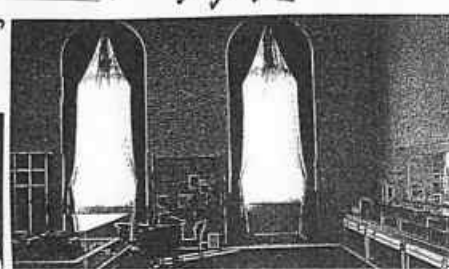
Text block next to the statue, providing information about the person depicted.



Text block next to the logo, possibly a title or description.



赤レンガ庁舎

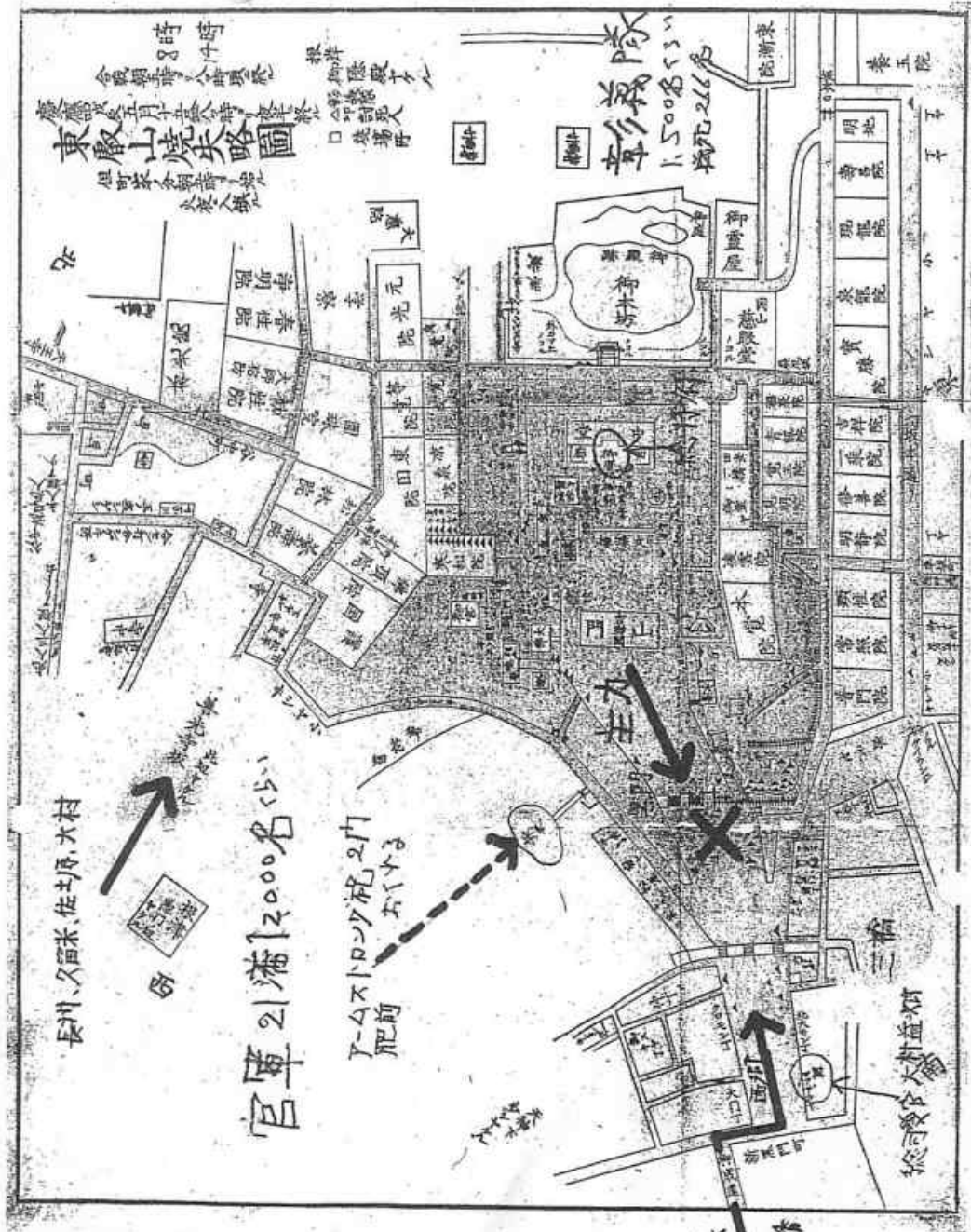


9) 彰義隊戦争の最激戦地 —— 黒門跡、彰義隊の墓と西郷隆盛銅像

- ① 慶応4年1月、鳥羽伏見の戦いに敗れた15代将軍慶喜は上野寛永寺で蟄居謹慎に努めたが、4月11日江戸城の無血開城で水戸へ退いた。
- ② しかし慶喜護衛のため寛永寺に集まった彰義隊は引き続き上野に籠もって官軍に抵抗した。彼らは上野山で籠城体制を固めその勢2,000、また3,000にも達した。
- ③ 5月15日、大村益次郎、西郷隆盛率いる官軍21藩1万2,000は主力の薩摩、因幡、肥後軍を8,000を上野広小路に進め、砲7門を据えた。(狭く4門しか使えなかった)
- (1) 上野山(彰義隊側)から攻め手本陣松坂屋、大砲を並べた広小路が一望
- ④ 早朝、小雨をついて開戦、黒門口は争奪の場、最激戦地となった。正面突破をはかる官軍、対する彰義隊も主力を投入して必死に防戦した。
- ⑤ はじめは互角、正午ころ本郷に遅れて布陣した肥前軍の阿姆斯ロング砲が寛永寺を直撃しはじめると彰義隊の勢いは衰え、黒門が破れ、官軍は一気に上野山内になだれ込んだ。彰義隊は敗走、一帯が火の海となった。
- ⑥ 彰義隊の墓=戦死者266名。正面小墓は明治2年、大墓は14年に建てられたが政府に遠慮して彰義隊の文字はない。かたわらの碑文が維新史の一端を刻む。
- (1) 当初関わりを恐れ遺骸はしばらく放置されたが、寒松院、護国院住職が集めこの地で茶毘(だび)に付した
- (2) 小墓銘=彰義隊戦死者之墓、慶応戊辰五月十五日。大墓銘=戦死之墓
- ⑦ 西郷隆盛銅像=官軍を指揮して彰義隊を壊滅させた西郷隆盛だが、10年後西南戦争で敗死することになる。

10) 辰巳公民館めざして帰路に

- ① 北の丸公園駐車場の場合(歩く距離が短い) 電車移動160円
14時10分=千代田線湯島駅(5番口から=2駅乗車)
東西線大手町駅乗り換え(2駅乗車)九段下降車(うしろ側、2番口へ)目の前
 - ② 15時00分北の丸公園または上野をバスで出発、辰巳公民館16時30分到着
 - ③ きょう一日お楽しみいただけただけでしょうか、ご協力ありがとうございました。
- 以上



東叡山焼夷略圖 (慶応四年=1868)

茶木権新石地団大図説

主力隊
サマ、因幡
肥後

辰巳公民館主催事業「すこやかカレッジ」バス研修

岩崎邸と上野不忍池をめぐる

山岸 弘明



岩崎邸



江戸切絵図→
右嘉永4年東村下谷
左"6年本郷

タイムスケジュール

- 8時45分 辰巳公民館出発
- 10時20分 上野公園バス駐車場着
上野東照宮、清水観音堂などを見学
- 11時45分 昼食休憩（持参弁当または周辺の茶店）
- 12時30分 不忍池弁天堂前集合
不忍池連絡通路を歩く
- 12時50分 岩崎邸
（皇居北の丸公園駐車場の場合）
- 13時50分 湯島天神
- 14時20分 千代田線湯島駅乗車（160円、2駅）
東西線大手町駅乗り換え、九段下降車
- 15時00分 北の丸公園駐車場バス乗車
（上野公園駐車場の場合）
- 14時00分 不忍池を反時計まわり移動
上野戦争、彰義隊史跡などを見学
- 15時00分 上野公園駐車場バス乗車
- 16時30分 辰巳公民館到着

地名のいわれ

上野＝草茂る岡、江戸幕府の盛衰と歩んだ寛永寺、上野のお山の町
 忍が岡＝上野台地の古名。不忍池＝忍が岡に対するしゃれ
 湯島＝武蔵野の末端で小川が入り組んで島のようなだった

- 1) 元は徳川將軍家菩提寺の寛永寺だった —— 上野公園駐車場に到着
 ①寛永寺は江戸時代はじめ3代將軍家光の命を受けた天海上人が創建した。
 (1)寺名に年号を付した寺は国家的事業で建てられている
 (2)江戸城の鬼門（東北）を鎮護し、国家の安穩、徳川家の武運長久、子孫繁栄を祈願
 ②上野全山36万坪に支院70坊、本坊、根本中堂、五重の塔などを擁した。
 慶応4年明治維新の戦いの時、彰義隊が籠もり、官軍の攻撃で全山が焼失した。
 ③維新後、新政府が跡地の大半を没収、明治6年公園地、大正13年東京市に移管され、一般開放された。春は「上野の花見」で賑わう。
 (1)現在の寛永寺は上野公園の鶯谷駅側にあり、徳川家綱、綱吉、吉宗、家治、家斉、家定の6將軍、歴代將軍御台所、生母などが眠っている



不忍池

平成21-9-15

上野公園と不忍池の史跡をめぐる

2) 華麗絢爛の権現造り、今回はテント絵で我慢 — 工事中の上野東照宮

①徳川家康を祀る。社名は家康の神号「東照大権現」に由来、全国に300社、うち幕府が作った官製は日光、久能山、江戸城紅葉山と上野の4社。ここでは吉宗と慶喜の2将軍も合祀している。

(1)家康は元和2年4月17日駿府城で逝去、いったん久能山に埋葬された後1年後に日光に移葬された。3年2月後水尾天皇から神号「東照大権現」を勅賜された。

②大鳥居=寛永10年大老酒井忠世寄進。重要文化財

(1)東照宮宝前、寛永十年癸酉四月十七日、厩橋侍従酒井雅楽頭忠世(建立)

享保十九年甲寅十二月十七日、厩橋城主従四位下酒井雅楽頭源朝臣忠知(再建)

③諸大名寄進石灯笼=慶安4年家康36回忌で寄進。195基を数える。

(1)潤井戸城主(当時古河城主)永井尚政寄進石灯笼=

奉獻、石燈籠兩基、武州東叡山、東照大権現宮宝前、慶安四辛卯曆四月十七日、従四位下大江姓永井氏信濃守尚政

④寛永寺五重の塔=寛永16年土井利勝寄進、高さ36m。上野動物園内。重要文化財

⑤国持大名等寄進青銅灯笼=前田、伊達、毛利、細川、上杉ら寄進、50基。重要文化財

⑥御三家寄進青銅灯笼=重要文化財

(1)紀伊國從二位行権大納言源頼宣(家康の10男、和歌山55万石=左右とも内側の2基)

正二位行権中納言源頼房(家康の11男、水戸28万石=まん中の2基)

尾張国主参議從三位兼右近衛権中將源光義(家康の孫、名古屋61万石、外側の2基)

⑦唐門=切り妻屋根両軒唐破風造り、将軍専用の正門。金箔透かし彫りみごとな彫刻、伝左甚五郎昇り竜、降り竜、梅に亀甲、松竹梅に錦鶏鳥など。重要文化財

⑧透かし塀=延べ160m、1間ごとに上に小鳥、下に魚介類刻む。重要文化財

⑨社殿(権現造り=本殿、幣殿、拝殿)修復工事中。今回は絵だけ。内部も非公開。

室内は豪華絢爛、金箔、彩色彫刻が桃山文化を伝える。重要文化財

(1)平成26年ころ完成予定。内部も公開、完成時に改めてお越しくささい

⑩お化け灯笼=高さ6m、日本3大灯笼の1つ。近江山路1万8千石、子孫不行跡断絶。

(1)奉寄進、佐久間大膳亮平朝臣勝之、東照大権現御宝前、石燈籠、寛永八辛未孟冬十七日



↑上野公園 ↓東照宮

↑唐門 ↓大鳥居

↑永井宗石灯笼 ↓銅灯笼



3) 上野の山にも人があった — 大仏山仏塔バコタ

①バコタは仏塔のこと。薬師如来を奉る

②大仏の顔=寛永8年鑄造、青銅「上野大仏」の残欠。上野戦争は罹災を免れたが関東大震災で倒壊、部材は保管されたが戦時下に金属供出され、顔部分だけが現存している。

4) 花の雪、鐘は上野か浅草か(松尾芭蕉) — 江戸市中に時を知らせた

①江戸市中10か所とされる時の鐘の1つ。日本橋石町、浅草寺、増上寺などにも現存している。当時は毎正時、現在は朝夕6時と12時を伝える。

(1)花の雪…、深川の芭蕉庵に暮らした芭蕉が花の盛りに遠くから響いた鐘の音に耳をすました。のどかな江戸の春の眠くなるような草庵風景が伝わる

5) 京都の清水寺を模して作る — 清水観音堂の舞台造り

①寛永8年背後のすり鉢山に創建、元禄11年焼失、現在地で再建。舞台造りは比叡山から眺める琵琶湖を見立てている。

(1)かつて不忍池が望めたがいまはみえない

(2)本尊は千手観音像(秘仏)、子育て観音、人形供養などで知られる

6) 弁天堂周辺で持参の弁当を楽しむ — 集合時間を厳守しよう

①不忍池=上野の山を「忍ぶ岡」と読んだのに対して名付けられた。上野台地と本郷台地に挟まれたこの地は元江戸湾の入り江で平安時代のころ海岸線が後退して沼地になった。

②弁天堂=寛永寺造営の時、琵琶湖になぞらえた不忍池に竹生島にならった弁財天を祀る弁天堂が作られた。寛文10年寛永寺と陸路と橋で結ばれ、明治中期池の端と結んだ。

(1)弁財天は長寿、福德、また音曲の神として靈験新たかとされる

(2)江戸時代から信仰地として、四季を通じた景勝の地として賑わった

(3)管弦、舞踊関係などの碑が多く、聖天宮は結びの神として知られている

③周辺で昼食を楽しむ。集合時間厳守、集合場所は弁天堂前

(1)茶店勝亭(弁天堂裏)、レストラン桜木亭(弁天堂前=12時から)

ともにメニューはラーメン、やきそば、カレー、丼物程度です



↑時の鐘 ↓清水観音 ↑弁天堂 ↓不忍池



↑上野大仏
←古字奥



コンドルが築いたジャコビアン様式の決定版＝ 崎邸

7) もとは榊原康政邸 — 岩崎邸のあゆみ

①徳川四天王・榊原康政邸跡＝天正18年徳川家康江戸入りのとき、奥州方面の抑えとして配備。榊原家歴代の江戸上屋敷で、明治維新後舞鶴牧野藩知事邸をへて、三菱財閥3代岩崎久彌の本邸になった。

(1)榊原家＝康政は姉川、長篠の戦いなどで戦功を上げ、家康の江戸入りで館林10万石を得た。3代忠次のとき15万石に栄進、白河、姫路などを居城としたが、8代政岑が不行跡で蟄居を命じられ、寛保元年越後高田へ左遷、子孫が明治維新に及んだ。

(2)戦後GHQに接收、返還後国有財産となり、最高裁判所司法研究所などに使用された。平成13年東京都に移管、岩崎邸庭園として一般公開された。

②岩崎家＝岩崎彌太郎は土佐郷土の出で、慶応3年、後藤象二郎の起こした長崎の土佐商会(後の三菱商会)を引き継ぎ、明治維新後、政府の払い下げ汽船で日本の海運界を独占した。長男彌太郎が三菱財閥の初代、3代久彌と4代小彌太が三菱合資の各種事業を分離独立して三菱コンツェルンを築いた。

③岩崎家は都内に本邸や別荘を作った。その多くが現存している。

(1)清澄庭園(旧関宿久世藩下屋敷＝江東区清澄3)池泉回遊式庭園、一般公開

六義園(旧大和郡山柳沢藩下屋敷＝文京区本駒込3)回遊式築山山水庭園、一般公開

殿ヶ谷庭園(旧溝鉄副相殺別邸＝国分寺市南町3)回遊式林泉庭園、一般公開

旧古河庭園(旧明治元勲・陸奥宗光別荘＝北区西が原1)洋風、和風庭園、一般公開

④岩崎邸は明治29年、3代久彌の本邸として英国人建築家、ジョサイア・コンドルが設計した。コンドルは明治10年日本政府の招きに応じて来日、工部大学(現在の東大工学部)の初代教授に就任し、日本で初めて本格的な西欧式建築教育を行った。門下から辰野金吾、片岡東熊など近代日本を代表する建築家を送り出し、自らも多くの名建築を残した。日本をこよなく愛し、大正9年日本で永眠。

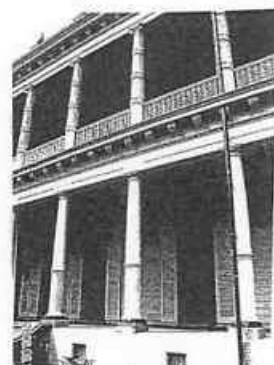
(1)コンドルの代表的建造物(現存)＝ニコライ堂(重要文化財＝明治24年)

岩崎家高輪別邸(三菱関東閣＝明治41年)、廟(明治43年)

三井家倶楽部(三井倶楽部＝明治43年)、島津忠重邸(清泉女子大本館＝大正4年)

古河虎之助邸(旧古河庭園＝大正6年)

(2)現存しない建造物＝上野博物館、鹿鳴館、有栖川宮邸、北白河宮邸、内務大臣官舎、内閣庁舎、海軍大臣官舎、三菱1号館など



ロンドンの柱列
↑
岩崎邸正門

お断り＝多人数のご案内は混雑と声が届かないことがあります。またほかの見学者の通行の迷惑にならないようご注意ください。館内では「別行動(自由見学)あり」とします。説明板などを利用ください。集合時間は玄関前の現在地 時 分。庭園からの洋館の景観はすばらしく日陰や椅子もあります。ぜひくつろいでください。

7) コンドル壮年期の傑作 — さまざまな様式が溶け合った大輪、岩崎邸洋館

①英国建築「ジャコビアン様式」を基調に、ルネサンス風やイスラム風を折衷した明治期の上層邸宅建築。

(1)ジャコビアン様式は17世紀はじめイギリスのジェームズ1世時代に盛行した建築、工芸様式、ギリシャ、ローマなどの古代建築法を意識した古典主義で装飾を重視している

(2)岩崎邸はコンドルが一番油の乗り切った壮年期の代表作といわれる

②岩崎邸の最大の特徴は外観の優雅さに加え、内装の丸柱、階段手すり、壁面などに施されたアカンサスのツルや草花をモチーフにした装飾の精緻さにある。

(1)アカンサス＝地中海原産の耐寒性多年草でギリシャ語でトゲの意、初夏に白やピンクの花が咲き、いまは夏枯れ。古代ギリシャ、ローマの装飾に多用された

③外観＝地下石造1階、木造2階建て(高さ16m、タワー20m、マンション5階分ある)スレート屋根の黒、壁面のクリーム、点在する赤、緑など色彩バランスがすばらしい。

(1)屋根＝天然スレート葺き、外壁＝下見板張りペンキ塗装

④玄関上四角錐のドーム塔屋とイスラム風屋根と、屋上バルコニーを支える一対の双子柱の広い車寄せがまず目を引く。

(1)玄関は公式行事のみ開く。馬車で乗り付けた貴族紳士、淑女が降り立ったことだろう

(2)見上げて外壁窓回りの細かい装飾を観察

⑤車寄せ、玄関、玄関ホール＝
玄関扉上の丸窓ステントグラス、玄関タイル、シャンデリア……

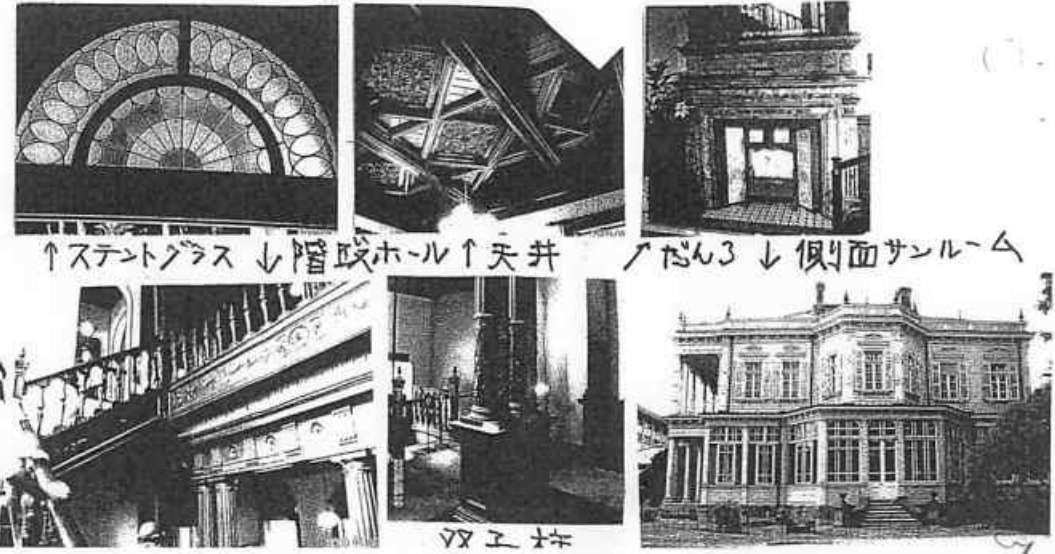
⑥丸柱、柱の間がアーチ状、西洋建築の特徴でやわらかさを表している

⑦久彌の書斎＝天井が高く部屋は広い、時々三菱会社の幹部との打ち合わせにも使われた

(1)この後続く室内、天井、床、窓、壁、暖炉など部屋に合わせた装飾に注目しよう

⑧サンルーム＝明治の後期に増築された居間

⑨1階婦人客室＝シルクのイスラム刺繍天井、正面扉の小アーチスクリーン



↑ステントグラス ↓階段ホール ↑天井 ↑だんご ↓側面サンルーム

双エタ

- ⑩1階客室、ベランダ=ベランダには草花のタイルが敷かれている。立ち入りはできない。
- ⑪大食堂=会食に使用、基調の赤は食欲増強。給仕用扉はキッチンとの連絡や料理の出し入れに利用、スタッフは表に出ることはなく室内は主人が振る舞った。
- ⑫重厚な階段ホール=ジャコビアンの花開く、邸内最大のみどころ
暖炉=1番大きく美しい大理石の暖炉。暖炉回りの細かい細工もみのがせない。
鏡=姿見ではなく広さを出すための装飾
2組1対の双子柱=角柱をたる状に包んだ丸柱にはアカンサスの飾りが取り巻く
地下連絡通路に抜ける回り階段=
階段手すりとは手すり下の装飾=ジャコビアン装飾の真骨頂といえる

- (1)階段手すりは安全対策で唯一触れられる場所です。じっくりと感触を味わってください
- 2階
- ⑬婦人客室=ベイウインドー
- ⑭客室=金唐革紙の壁紙に注目。当時の技術を正確に復元
復元した原板、製作工程
- ⑮集会室(ダンスなどに興じた部屋)=
- ⑯広く開放的な2階ベランダ=庭や敷地全体を一望。かつてこの4倍あった
床は板張り、イオニア式丸柱は巻き貝飾り、つる草模様手すり、ライト
- (1)洋風庭園=榊原藩時代の御殿跡、東京地裁湯島庁舎に岩崎邸当時和館が広がった



本邸の主人であった岩崎久彌(いわさきひさや)は、慶応元(1865)年に三家の創設者、岩崎彌太郎の長男として生まれました。慶應義塾塾長を経て通商、明治24(1891)年、米国ペンシルバニア大学を卒業後帰国しました。明治27(1894)年、三友合資会社を設立し社長に就任し、明治29(1896)年、男爵を賜った実業界に名を振す実力者でした。大正5(1916)年、従兄弟である岩崎小彌太に社長を譲りましたが、久彌が社長をつとめた明治から大正にかけての20余年は、殖産興業、産業革命、農工商形成の時期に重なり、祖父の職之助によって決められた事業の近代化とともに、新しい事業を興し多角化を図った時期でもありました。岩崎一族が所有していた邸宅は、都内に深川別荘、駒込別荘などがありました。後述、それぞれ清里別荘、六義園となり、一般公開されています。



系 上庭園など

- ⑩和館=洋館がゲストハウスであったのに対して和館は岩崎家の私邸、家族の生活の場であった。かつて洋館に隣接して500坪もの和館が並列したが、現存はほんの一部、書院造りの客殿か、床の間付きの広間を中心に次の間、三の間と3室の外側を結ぶ畳廊下の入側、洋館との渡り廊下が現存している。
- (1)渡廊下=舟底天井。坪庭
入側=天井板、鴨居。前庭の手水鉢
- (2)広間=書院造りの典型。床の間を広げ違い棚を付けると大名屋敷の上段の間になる
- (3)明治美術界の重鎮・橋本雅邦の障壁画は四季折々の景観を描く
組子(マス目)や引き手、クギ隠しなどに岩崎家の菱紋が配されている
- ⑪洋風庭園=かつての岩崎邸は1万8千坪の大半が庭園であったが、現在はその3分の1ほどが現存している。大型テントや芝庭に腰を下ろして、岩崎邸のベランダやサンルームに目をやる。明治洋館に至福の一時を感じてください。
- (1)中央が芝庭で周囲は榊原藩当時の大名庭園の一部を残している。洋風庭園は旧御殿跡、池泉は和風庭園の奥左手からその先にかけて作られていた。
- ⑫撞球(ビリヤード)場=コンドル設計、素朴なスイスの山小屋風木造ゴシックデザイン
ビリヤードは明治10年代に渡来、当時社交界にかかせない遊技になっていた
- (1)日本伝統の枝倉風外壁や天然スレート葺き大屋根、深い軒、丸柱のゴシック風刻み、天井のない屋根小屋組、現存壁面、洋館からの連絡地下通路(非公開)の明かり取りや階段、ステントグラスなども見どころ。

- 8)「婦(おんな)系図」別れの場の舞台——湯島天神(中止することがあります)
- ①社伝は5世紀創建、文明10年太田道灌再建という。
徳川時代、家康以下の歴代将軍が社額5石を寄進した。
- (1)江戸時代、菅公の遺風を慕う学者、文人の参詣も多く、谷中天王寺、目黒不動とともに「江戸の3富」としても知られた。
- ②祭神は菅原道真(みちざね)
東風(こち)吹かば 匂いおこせよ梅の花 あるじなしとて 春な忘れそ
- (1)道真は9世紀名門大伴氏の生まれ、学問と政治力を認められて右大臣兼右近衛大将、従二位に進んだが中傷を受けて九州の太宰府に左遷された。歌は出発の心境を読んでいる
- ③道真がこよなく愛した梅の木=境内におよそ300本、江戸時代から梅の名所で、泉鏡花の「婦系図」「湯島の白梅」の名を高らしめた。春は「梅祭り」で賑わう。
- (1)天神様と牛=道真は丑年に生まれ、丑の日に亡くなった。「自分の遺骸は牛に引かせ、牛の行く所にとどめよ」と遺言したとされる。天神信仰には牛にかかわるものが多い
- ④ガス灯と新派記念碑、泉鏡花筆塚=新派で大ヒット。「別れる切れるは芸者の時にいう言葉……」早瀬主税とお蔭が恩師の反対で仲を割かれる「別れの場」としても有名。



中央図書館 歴史講座

日時 平成**21**年**12**月**13**日(日)
午後**1**時**30**分から**3**時

場所 中央図書館 2階 視聴覚ホール

テーマ 『遠浅の海思い出すまま』

講師 あづまお 佐倉 東雄 氏





昭和26年頃の陸地と海面の様子(昭和32年秋、漁業権を放棄した時も同様です)
 (昭和26年志倉修正図・地理調査所)
 ・寒川、今井、蘇我地先が埋め立てられ、工場の進出が見られるが、昭和26年2月に開設された川崎製鉄(現在:JFEスチール東日本製鉄所)を埋め立てるのは、昭和15年の内務省土木会議の立案によって、東京湾臨海工業地帯製造の一環として行われ、同18年に日立航空機会社が進出して、飛行機の生産に着手している。

平成17年4月現在の八幡・五所地域の様子(千葉県商工業地図シリーズより)
 ・(有) 中央地学より転載許可済

